

續日本歌學全集 第四編

香川景樹翁全集卷

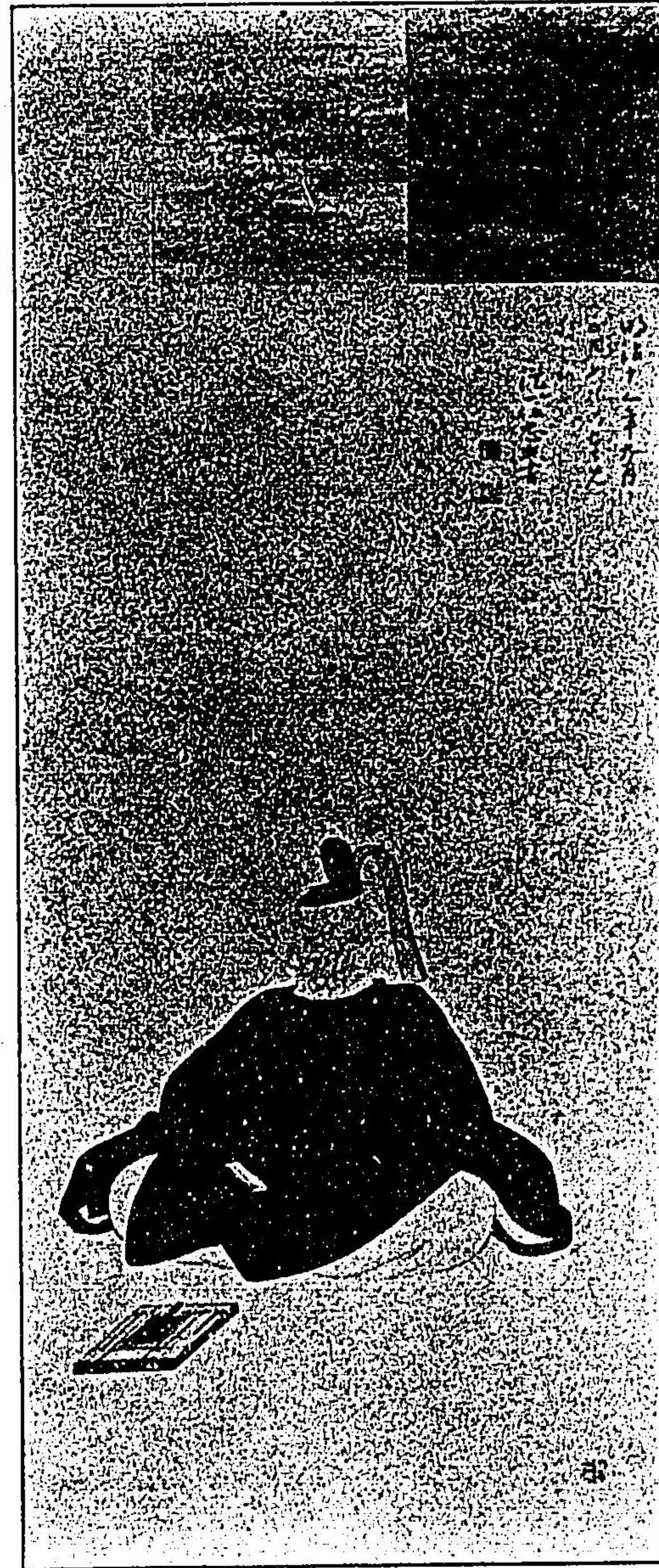
東京博文館

佐々木信綱編纂

香川景樹翁全集

東京博文館藏版

香川景樹翁肖像

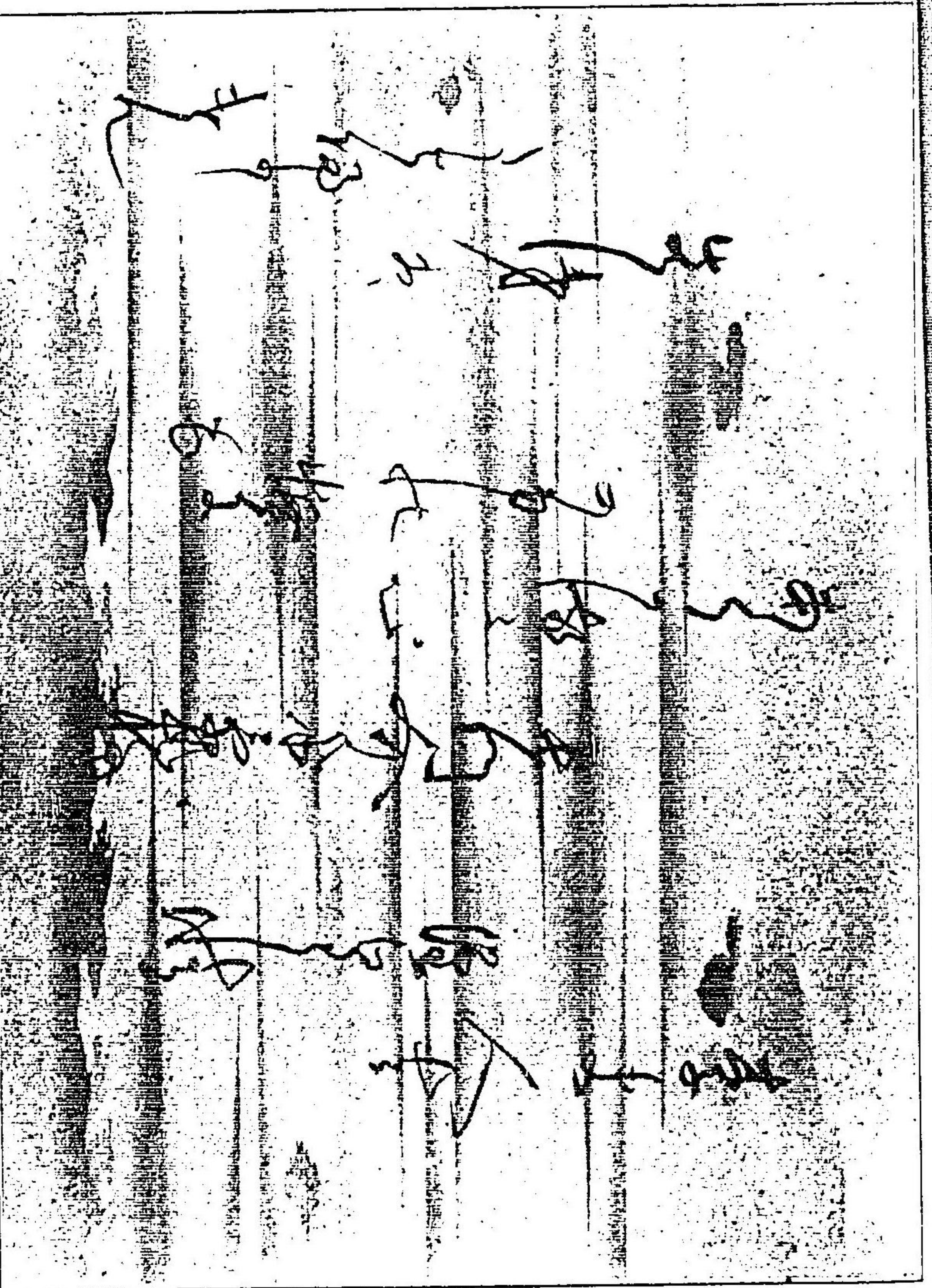


(御歌所長崎男爵所)

実則



香川景翁眞蹟



(御歌所長雷崎男爵所藏)

景文畫樹翁讀



(御世所長高崎男爵所藏)

香川景樹翁眞蹟

<p> </p>	<p> </p>
--	--

(御歌所長高崎男爵所藏)

續日本歌學全書第四編

佐々木信綱編

解題

香川景樹翁の傳は、井上通泰氏の桂園叢書に詳なれば、いま其第一集及第三集の文を、いさゝか取捨して次にかゝぐべし。

桂園、觀鷺亭、東塢亭此諸號あり。又香川家の號をつぎて、梅月堂ともいふ。徳大寺家の臣なり。

鳥取藩の徒士、林善太兵衛の二男なり。若うして京師に上り、鷹司西洞院等の諸家に仕へしが、遂に其和歌の師、香川景柄キタの養子となりて、徳大寺家に仕へぬ。後養父と道の上の意見合はずして、分れて一家を成し、が、なほ香川の氏をなのり、且徳大寺家に仕へたりき。叙任の左の如し。

享和三年二月二十三日、從六位下に叙せられ、長門介に任ぜらる。此時年三十六。
文化八年十二月五日、從六位上に叙せらる。此時年四十四。

文政二年八月十九日、正六位下に叙せらる。此時年五十二。

天保十二年六月十四日、特旨を以て従五位下に叙せらる。此時年七十四。

同年十月六日、肥後守に遷る。

明和五年四月十日鳥取にて生れ、天保十四年三月二十七日京師にて卒す、年七十六。二條川東、東寺町開名寺(一名大炊道場)なる香川氏瑩城の後に葬られぬ。法名を實參院悟阿在焉居士と云ふ。子景周(後に景恒と改む)家を嗣ぎぬ。後吉田家より桂園靈神の號を贈られ、次で靈社に進められぬ。

歌の、國にありての、清水貞固に學び、京に上りての、香川景柄に學びしが、後お新に一派を開きぬ。弟子いと多かりし中おも、熊谷直好、木下幸文、菅沼斐雄、僧玄如、僧亞元、高橋殘夢、赤尾可官、中川自休、兒山紀成、穂井田忠友、八田知紀、渡忠秋等、最秀でより。

家の洛東岡崎村と、木屋町筋樵木町とにありき。岡崎なるを東塙亭又ハ桂園と云ひ、木屋町なるを臨淵社、觀鷲亭、一月樓、萬水樓などいへり。妻を包子と云ふ。鳥取の人瀧川某の女にして、山崎比洞官松田秀明の養女なり。明和五年六月三日生れ、文政三年三月十二日没す、年五十三。法名を觀水院生一蓮上大姉といふ。

著書の板に上れるもの

古今集正義

九卷(四季の部)

百首異見

五卷

土佐日記創見

卷

新學異見

一卷

歌文の板に上れるもの

桂園一枝

三卷

桂園一枝拾遺

二卷

桂の落葉初篇

二卷

桂の落葉二篇

二卷

齋嶋の波

二卷

桂園遺文

二卷

中空日記

一卷

まゝぬ青葉

一卷

六十四番歌結

一卷

測水

一卷

桂花餘香

一卷

しまぐ板に上らざる著書歌文の

古今集正義(戀雜の部)

萬葉摺解

活言考

古事記新疏

三十六人集抄略解

をりく草

道の記、日記、詠草の奥書、歌結の判など。(以上桂園叢書)

この全集の上巻のせし書どものうち、桂園一枝の、翁の本集にて、これを物せられし故よし、その序ふくはし。桂園一枝拾遺の、翁の身まかられし後、世に出しつるあて、あを小林歌城の評せる、そを又仲田顯忠の評せる、桂園叢書第一集第二集あり。又此二集の外、桂の落葉初篇二篇あれど、正しく撰びたるならぬとらず。新學異見の、賀茂翁のあひまなびを駁せられし書。古今正義總論の、正義のはじめあるを、ぬきつるな

り。桂園遺文の、江戸人鈴木光尙のあつめて、萬延年中お梓ふ上しつる書なり。誤謬少なからぬが、松波資之翁の自ら書かれし詠草奥書、刊本の隨所師説等ふよりて校ぐへ正しつ。中空日記の、文政元年五十一歳の冬、江戸より尾張まで歸り上られし道の記、またぬ青葉の、文政三年お妻包子のあひまこもられしほどの日記、六十四番歌結、うす水の、共お翁の判せられし歌合なり。大ぬさの、桂園一枝の歌九十七首を、江戸人秋山光彪の難せしを、翁の門弟中川自休の辨せしなり。此大ぬさあつきて、さらふ、あるの駁し、あるの辨せし書十數部あべり。歌學提要の、翁の説を、門人内山眞弓が輯録せしなり。

附言

此巻のはじめのせたる四ひらの、みな御歌所長高崎男爵此秘藏なり。桂園翁の像の、香川家ありしを、森寛齋のうつし、あて、贊の近衛翠山公の筆なり。懷紙の、尾崎宗夫の珍藏せしを、束修あかへておくりしなりとぞ。畫譜の、正風翁維新の頃京都あて、なあがしのもたるを見て懸望せられしかと、主人惜みてゆづらざりき。さるお廿余年を経、今のあるじより請得られしなりと云。短冊二葉の、三條家の歌會あ、はじめめてめされし時の歌。このさつ年、故三條實美公、景樹翁をはじめ門下の人々の、歌會の當坐ふよりしがあるを、帖お物せへければ、ついでてよと正風翁あたらへらましかば

そをつらでて、桂のひと葉とらはがさせられしを、公の御遺物として、三條家よりかく
られしなりとぞ。この桂のひと葉は、よめつらしきものなれば、ちなみふ、すべてを
かゝぐべし。

桂のひと葉

はじめてまうの有りたる御仰ごとの身も過るるを添がりて

天地の誠此そちのうれしきいたうさいやしきへだてざりたり

景樹

初て御二のを見おげ奉りて

相生の小まつの千世の遠なればそのこの葉もいうお繁らん

景樹

子 日 山とて子日されども小松原かすとのひくおまうせてぞとる

景樹

初春待花 春たてばまづ咲く梅もあるものをこゝろお匂ふわらし山うさ

景樹

大うさおぬくる、事うめの花此くれあるをこむるありたり

景樹

昨日けふ岩くらやまおうちおびゆうこりぬくも、櫻ありたり

景樹

湖上花 朝づまのうさ山とてくらなまふたりおさなるしも心してふけ

景樹

我門の知のおやむぎのりあげし今日しも雨のおきたれて降る

景樹

朝更衣 青およし平城のさらしのさうくおすいしきさの衣おへ哉

景樹

杜郭公 ぬえの森むしおぼゆる村雲おひと離しなるはと、さすうさ

景樹

大ききのさうげの山のあふひくさうけて神おもつうへなる哉

景樹

ゆふべく扇のうせおとらふうさ誰をばまぬ夜床おれども

景樹

山うげのあさぢ原のさくれとつわくともさえお流れたる哉

景樹

涼としていくよぬぬらん塵もさく清さうさらのとて夏のとさ

景樹

蚊遣火 山とて杉のわを葉を散りくへて蚊遣がてらふ夕けさくらん

景樹

初 秋 秋さうづなよと植しふるさとのをさの上うせ今うふくらむ

景樹

瀧上のおとこのとねをらするよりおちくる月の影のさやな

景樹

月迎秋明 殊さらあうげあされあさくれづつさの心もすまざるらし

景樹

わか風や空おつらんさやぎ野の本あらの小萩色めさふなり

景樹

九月十三夜 後どのとたのさなるまお長月のこよひの月もうささふなり

景樹

暮 秋 月のさめをしとおもへど長月のくるも年此つもるありけり

景樹

もさち葉のうへに都のおしきうもうちさびしなみさゆる秋哉

景樹

野北山のもさちをるとて神無月さくれのあめお濡ぬ日もさし

景樹

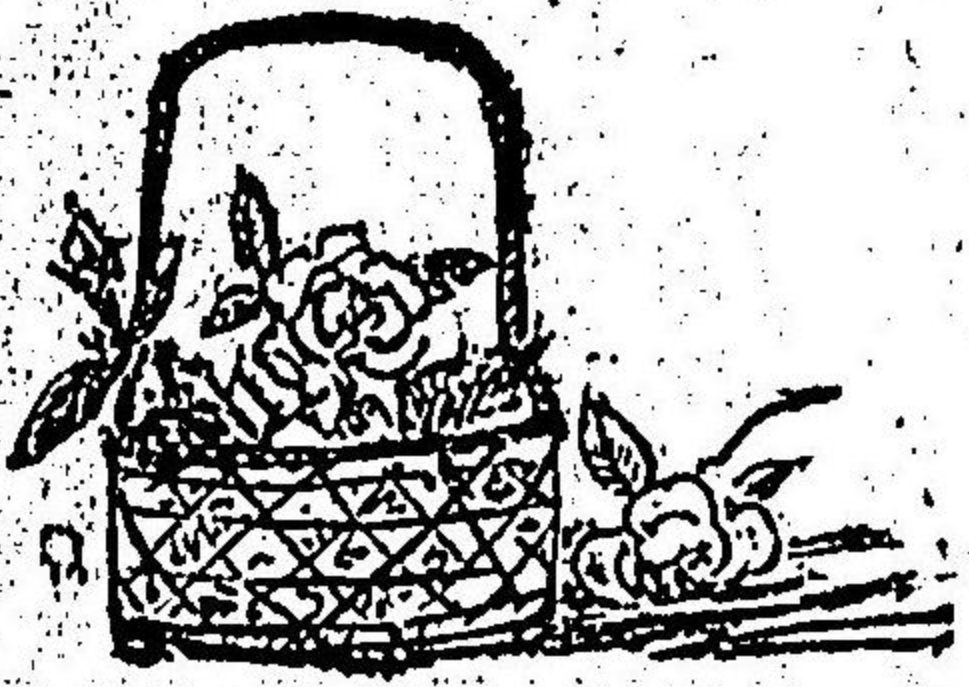
鷹 狩 明ぬるうさの山うげあかり人のすさめくたうの一さるぞとる

景樹

高瀬のよきなる、年のとやせふ千鳥がへてを立さざりけれ
 景樹
 あふひ草あまねくのさせちとや振神のめぐもかゝるてふ也
 直好
 五月雨のころふりありぬ小山田のあせおほ水も音ひくまで
 直好
 久うこの月のひうりお照されてやどのうつらも匂ふころうき
 直好
 衣手のぬるしもちらずあきとぎの花のさかりを分てけるかな
 直好
 と山よりながれいづみの音さけけ耳をもむらふ心地こそまれ
 直好
 曇るうとみればはれつゝ世中のさまにもあたるむらさぐれ哉
 直好
 白ゆきのさえぬにつけて大ひえの山のかさを空にまるとな
 直好
 落さざつたきのまら波たちながらこかり果たる山のおくあり
 綾雄
 よるなればめにい見えねど梅の花紛はぬ香おそ匂ひ來にけれ
 綾雄
 よし田山のちりてみれば白河の野へむらさきみれ花さく
 綾雄
 うら風のきつまりはてとまのうに降る春雨の音ぞさこゆる
 雙雄
 鴨山のあふひのうづらとりうさしのみ祭る日近づきになり
 綾雄
 山うげのまみづがもとにやまらへハ蟬の聲さへ涼しうりなり
 綾雄
 郭公こゝあかりせむわがさみかへさの道にわたるごとくとへ
 雙雄

さみづれお軒は若さけうちあひささくらくおれる窓のうち哉
 綾雄
 ささづれの雲のうへおを聞ゆる愛宕のやまの山はとゞさす
 雙雄
 五月雨あはれと思ひし撫子の照る日の影おにやひまされり
 雙雄
 吾妹子がねやのあふぎの風おほそまのびお秋もよひ初られ
 綾雄
 さしのなる月の光おあらとれし尾花がそでのあこれあるうき
 綾雄
 いりばうり露のかくらんさを鹿杖つまとふ野邊の秋萩のはな
 綾雄
 龍田姫そむるもみちのころこのし唐くれあるも及ばざりなり
 綾雄
 々ふも又まぐれふるあり高尾山いまだもみちの染くらじとや
 綾雄
 山ふりみゆきおとちる柴の戸のまつ嵐もあとせざりなり
 綾雄
 谷川の水のそこまでこやまらんをさうおふも音比きこえぬ
 綾雄
 春がまみたさびく見てやうぐひすも谷の古巢を出てさくらん
 常清
 小山田のあせつゝい行く手ささびつゝてもみつるつが葦哉
 常清
 あまこゝび風のさそへとうめの花盡ぬふやひの變らざりけり
 常清
 あふひ草うささぬ人もあうりなりうへも祭の名おひにたり
 常清
 山うげのまみづがもとのすいしとふおもひぬ夢を結びつる哉
 常清

ちとれつきたし晴ぬを見し程ふせし雪うくる大ひえのやま 玄如
 松のびのいと井のまここのむとさう千歳の命のぶあちする 玄如
 わがやまの庭のあぢとささしより思ひやちる宮城野の原 玄如
 ちとちふるかもの祭のあふひくさいつの昔ふうさしそめらん 玄如
 おしきへて野へも山へも白砂ふよりうくしたる今朝の雪うさ 則孝



香川景樹翁全集上巻目次

桂園一枝……………	一七		
春歌……………	一九	夏歌……………	二九
秋歌……………	三五	冬歌……………	四五
事につき時にふれたる……………	五一	戀歌……………	六一
雑歌上……………	六七	雑歌下……………	八一
長歌……………	八八	旋頭歌……………	八九
俳諧歌……………	九〇		
桂園一枝拾遺……………	九九		
春歌……………	一〇一	夏歌……………	一〇八
秋歌……………	一一五	冬歌……………	一二四
事につき時にふれたる……………	一三〇	戀歌……………	一三八
雑歌……………	一四二		
新學異見……………	一五五		

古今集正義總論……………一七一

桂園遺文……………一八五

文化七年の日記のうち……………一八九

秋元公英が尋にこたふ……………一九二

同じ詠草の和文の奥に……………一九五

藤木光好が詠草に……………一九七

浪花人の詠草に……………二〇二

西郷元命が詠草に……………二〇三

孝子品女にひくる文……………二〇五

高橋正澄が詠草に……………二〇六

白木重樹が詠草に……………二〇七

また……………二〇八

含子の詠草に……………二一〇

今井信古が詞書の詠草に……………二一一

同じ人の詠草に……………二二三

法性寺水月が詠草に……………一九一

信濃人さすくが詠草に……………一九四

大塚知元が詠草に……………一九六

丸山辰政が詠草に……………二〇〇

林宣義がもとへ……………二〇二

矢島保恭が詠草に……………二〇四

三條三位中條殿詠草に……………二〇六

藤堂含子の詠草に……………二〇六

よし子への文……………二〇八

また……………二〇九

ある時人に示されたる文……………二一一

神方升子う詠草に……………二一二

同じ人其後の詠草に……………二二四

高木常喜が東へ返るを送る文……………二二六

新學異見或問に答ふる文……………二二二

並木信粹が詠草に……………二三〇

同じ人其後の詠草に……………二三三

梅見もどりの文……………二三四

清水詣での文……………二三六

あしたの露の序……………二三七

すみれの説……………二三八

中空日記……………二四七

またぬ青葉……………三〇九

六十四番歌結……………三四七

うす水……………三九一

大ぬさ……………四一三

歌學提要……………四七三

總論……………四七九

東山鹿聞の記……………二二七

並木周子が詠草に……………二二八

小坂道賢が詠草に……………二三一

古田重興が詠草に……………二三四

覺林寺へ返事の文……………二三五

朝岡泰任が家にて……………二三六

新尼をわはれむ文……………二三七

雅俗……………四八六

偽飾	四八七	精粗	四八七
強弱	四八八	趣向	四八九
實景	四九一	題詠	四九二
贈答	四九四	名所	四九六
本歌據	四九五	假字	四九六
天仁遠波	四九七	枕詞	四九八
序歌	四九九	詞書	五〇〇
歌詞	五〇〇	文詞	五〇一

吾師桂園大人月ころ病に煩らひ給ひけるが夏もや、更て岡邊の夕日隈あ
 き暑さの堪へがたきを厭ひ涼しかるべき陰をとて此松原なる川岸に隠れ
 すみて世の人をさへ避おはしけるほど七月の末よりおち俄にたのもし
 げなく自身も今いと思ひとり給へるを見驚さておのれいへらく著はし給
 へらん書ものうへいまばらくおく年來よみやり給ひし若干の言の葉千
 歳の後おのづから散り失せんだに惜みても悲しむべきに侍るを其もひと
 つに焼き棄てんなど獨言給へる眞實のこと、もえ覺え侍らず従ふ眞實に
 崑崙の千願の玉ども仰ぎいたいさまつるの吾佛たどきのみに侍らんやの
 せめて有然べきばかりをだに撰置かせ給は、いなどやうく、に申解き侍り
 し日より頓て讀聞え參らせて爪おるしつけもてくるほどに僅百が一にと
 いまれりそれ書き清めたるを見給ひて又みづから筆とりてこのく、と書
 き捨て給ふまに、遂に片光も遺るまじう見おそりてやをら引とりかい
 をさめ侍りしさて是が外題いか、標し置き侍らんと申すに何ぞこと、
 しうた、藻屑どか朽葉どか似おはしう書きすつべしと宣へるにまたがひ
 ておのれ病に桂園一枝と號け侍るもすべてをぬなるわさなりかくするを

同志の友垣遠近き、及びて見れもく、と見まくねがへるにおどく、書き
 わたへんいと煩らはしく假に梓にやどして千にわまれる社友の望をたら
 しむといへどもなほ一時とりわへぬまさびに侍り後えりくはへ給はん
 の改めものし侍るべきものなり文政十一年かんな月の末賀茂の川邊なる
 觀鷺亭にして源元幹沙門玄如等に謀りて平清樹これを去るしぬ

桂園一枝

香川景樹

春歌

御讓位あらんとする年の春家の會始に松迎春新といふおとをよめる

今年よりあらたまるべき聲すなり大内山のみねのまつかぜ

春風春水一時來

水どくいけの朝うせふくなべに春とや浪のはなもさくらむ

春水澄 雫ふもにごらぬ春になりけりむまぶにあまる山の井の水

瀧音知春 千早振かみの宮瀧おとをみてよしの、おくも春や去るらむ

初春見鶴 子日まどわが打むれてこし物を小松が原いたづぞ去めたる

朝こほりとけたる澤になくたづの聲おほ空にかまむ春かな

妙法院の宮の御會始に東風暖入簾といふことをよませ給ふによめる

玉まだれゆらく春風ふきにけり外山の雪もけふぞどくらむ

雪消山色静 けふ見れば比良の遠山雪さえて霞のおくになりけるかな

子 日 千世ハ皆かはらざらめど小松原心のひくをひかんとぞ思ふ
 君を祝ふ千世の子日の例にひきもらされし松なかりけり
 社頭子日 神山ハ松のふた葉もひくものを葵のみどもおもひけるかな
 子日若菜 ひきそへし松の千歳あり七種の若菜の敷ハさらずともよし
 子日に賀しける人の家あてよめる

この宿ハ千世もあかねハ松がねの巖ながらにひき移してむ
 ある年の春ねのひにもまからでこもりをり

霞 雪ふかき北白河の小まつぼらたがひくそでに春をまらむ
 朝がすみたなびきこめつ巻向の檜原があくも春やたつらむ
 霞 かつらきの山のまがたにうち靡き立てりともなき春霞かな
 霞 遠 聳 大比叡やをびえの奥のさゝなみの比良の高ねぞ霞み初たる
 霞 添山気色 いそのかみふるの遠山ふるとしの物ども見え霞たなびく
 野外朝霞 鶯のおゑまる野邊にたつものハわれどあしたの霞なりけり
 海上霞 あけてあそ見んと思ひし宮崎の浪まにかまむ松のむらだち
 鶯 鶯のなくはつあゑのうれしさに獨あきつるあさばらけかき

待 鶯 我園にきてなかなぬ日ハ鶯のあれどもこゑを聞かぬ日ハなし
 鶯 中 鶯のなきくらむ日の春雨ハつれづれならぬものにざりける
 野外 鶯 野ハやがてかきはなれども朝な／＼たちいでてさく鶯の聲
 水邊 鶯 河上の淺篠原の葉むもりになくうぐひまやこほりどくらむ
 曉 鶯 夜をこめてなく鶯ハわが宿の竹のねぐらやふしうかりけむ
 毎朝聞 鶯 朝な／＼かなじどころにきこゆれどあたらたまりゆく鶯の聲
 夕 鶯 鶯のなく山かげぞくれわたる霞むどころやねぐらなるらむ
 關路聞 鶯 ふた／＼びハ越えじとおもふ陸奥のいはでのせきに鶯のなく
 山家 鶯 柴の戸の春のさびしさ鶯のこゑよりほかのやまびおもなし
 花間 鶯 をしみてもなくとハせれど鶯のこゑのひまよりちる櫻かな
 名所 鶯 根芹つみたれかきくらんまらどりのとぼたの原の鶯のこゑ
 若菜 春日野に若菜をつめハ我ながら昔のひとのこゝちこそまれ
 踏分けて人のつむらんけふをこそ若菜も雪の下に待ちけれ

としく〜に若菜といひて摘みしかど積ればこれも老の數也
佛光寺御門主の御會始に若菜知時といふことをよませたまふに

けしきをも下に知りぬる春日野の若菜の春のつまにやあるらむ

水邊若菜 河ぞしにもゆる若菜の青柳の影のみどりどひとつなりけり

田若菜 をどめらが袖こそにはへ紅のにふの山田に根せりつむとて

小山田の根芹つむこそ賤の女がうきにかりたつ初なりけれ

春雪 はる霞たなびきそめし高砂のまつのは葉にあわ雪ぞふる

山ざとの梅のはつえにふる雪のたまらぬ春になりける哉

残雪 かげろふのもゆる春日に残りけりきえぬばかりの峯の白雪

足曳の山まがのねにむきばれどけがてにまる去年の雪哉

梅餘寒 梅が枝に春となきつる鶯のゆくへもまらぬゆきふりつゝ

かた岡の梅の盛になりしよりあしたの原のふりひなりけり

たが宿の梅の立枝にふれつらん今朝ふく風ぞ香に匂ひける

梅度年香 年のうちにさきつる梅の初花もけさより匂ふ心地こそまれ

梅 岡のべに家居せしより梅の花をりてかざさぬ春なかりけり

梅 毎年愛梅

月前梅 開よりもあやなき物の梅の花見る〜月にまがふなりけり

清月上梅花 いかなれば匂へる梅の花の上にいでたる月の霞まざるらむ

暗夜梅 目に見えぬ梅の匂の春の夜の闇こそいとさやけかりけれ

梅が香のにははざりせばぬば玉の闇の春をば誰かまらまし

嵐のみふくとわびつる山里の梅のにはひになりけるかな

雪と見て人や來ざらむ山里の垣根のうめいままさかりなり

梅香留袖 心のみゆきて折りつる梅の花あやしくそでのにはひける哉

うちはへし柳の糸のながのねの永き春日にあはせてぞよる

柳 青柳のいとふきみだま春風のたえまを露のむきぶなりけり

柳露 うちなびく柳の糸のながければ結びあまりて露やおつらむ

夕柳 今日もまた靡き〜て永き日の夕べにかゝる青やぎのいと

夕柳 かへりきてとけども解けを成ふけり結び置きつる青柳の糸

故郷柳 三島江のたまえの里の河柳いろこそまされのぼりくだりに

水郷柳 山もどにたてる煙も青柳のなびくかたふとなびくはるかな

遠村柳 道のべに胸のふみしくからなづな下あや春をもえ渡るらむ

春草短

早 蕨 春日野の若むらさきの初蕨たがゆかりよりもえいでにけむ
 早 蕨 未 遍 み吉野のみすゞが玄たの風さえてまだもえいで春のさ蕨
 春 月 春の夜を朧月夜といふおどい霞のたてる名おおそありけれ
 ながめても思はぬ誰か春の夜の霞をつきにゆるしそめけむ
 春 月 朧 おぼつかなおぼろくと吾妹子が垣根も見えぬ春の夜の月
 春 曉 月 鶯のあかつきおきの初聲にいまのと玄らむはるの夜のつき
 春 夕 月 あまりにも春の日影の長ければ暮るゝもまたで月の出おけり
 山 家 春 月 世中の春おのれし山里のつきのひかりもかすむころかな
 柴の戸になきくらしたる鶯のはなのねぐらも月やさすらむ
 題 玄 ら 老 旅にして誰にかたらむとほつあふみいなさ細江のはるの曙
 伊勢の海の千尋たくなは永き日も暮れてぞかへる蟹の釣舟
 歸 雁 雁 はるくと霞める空をうちむれて昨日もけふも歸る雁がね
 花をよそまわたりつれ雁がねの歸る空にもなりにける哉
 草枕たびをつねなる雁まらもかへる空にねをぞなきける
 深夜歸雁 春の夜の朧月夜にねざめしてたへずやかりの思ひたつらむ

歸 雁 少 花によりたまくと残る雁がねも今のとあそい思ひたつらめ
 旅にありける年の春雁のこゑを聞きてよめる

なきかはし歸るをきけば雁がねの敷に列なる心地こそすれ
 鈴菜さきたる野に畑うつ賤のうちさしてあがる雲雀をあふぎ見たる處のうら

題 玄 らず 雲雀あがる野邊にきいせも聲たてつ子故になかぬ物なかりけり
 世中へよぶ人おほし呼子鳥なくなるやまのどけきものを

前の右のおほいまうち君ひんがし山の花御覽じけるついで我岡崎にたち入らせ給ひし又
 の日のつどひに山家春といふことをよめる

山 ざ どの春ぞうれしき百敷のおほみや人もおとづれおけり
 ことしもや又中空にあくがれむさけりと見ゆるやま櫻かな

大 空 の よ そ に お も ひ し 白 雲 に お の こ ろ ま が ふ 山 さ く ら かな
 みよしの、青根が嶺の白くもいまがひもあへぬ櫻なりけり

林 中 櫻 つね見れぱくぬぎまじりの柞原はるのさくらの林なりけり
 田 家 櫻 賤の男がかへま垣根の小山田にまけるがごとく散る櫻かな

山花未開 うちかはへて霞みわたれる昨日けふさかぬをしき山櫻かな
 尋山花 尋ねばやみ山櫻のどしくの我をまちてもさかむとすらむ
 尋花處不定 大かたの花のさかりを心あてにそおもいはず出しけふ哉
 霞隔花 さやかにも見るべきものを春霞たなびく時に花のさくらむ
 花似雲 風ふけばみだるゝまでを山櫻なにぞの雲にまがひそめけむ
 曙山花 ほのくど棚びきあくる雲の上にあらはれそむる山櫻かな
 遠村花 うちわたを遠山もとの垣根までかりぬるくも櫻なりけり
 故郷花 共に見し人も今なしふる里の花のさかりに誰をさそはむ
 故園花自發 いにしへの大宮人にまたれてもささけむものか志賀の花園
 關花 逢坂のせきの杉むらまげけれど木間よりちる山ざくらかな
 社頭花 ちらせども幣ならましを神垣のみむろの花に山かぜぞふく
 河上花 大井川かへらぬ水にかけ見えてことしもさける山ざくら哉
 花交松 のどかなる嵐の山を見わたせば花おそ松のさかりなりけれ
 花有開落 どふ人もなき山かげの櫻花ひとりさきてやひとり散るらむ
 落花 みな人の心にわかぬさくら花ちるよりおそひ恨みそめつれ

夕落花 稍ふく風もゆふべのどかにてかぞふるばかり散る櫻かな
 落花浮水 終にかくさそふの水の心とも去らでや花のうつりそめけむ
 池上落花 池水のそおにうつろふ影の上にちりてかさなる山ざくら哉
 花落客稀 花ちればふたゝびとはぬ世の人を心ありとも思ひけるかな
 暮春落花 限あればとまらぬ春の大空にゆくへの見えてちるさくら哉
 萎花蝶飛去 この里の花ちりたりと飛ぶ蝶の急ぐかたにも風やふくらむ
 殘花少 ひどさかりありての後の世中に残るゝ花もすくなかりけり
 人の賀に花有喜色といふことを
 誰もみなられしき色に見ゆれどもゑみほころべる花櫻かな
 志賀山越 逢坂のゆきかひまれになりぬらむ志賀山櫻はなさきあけり
 江山春興多 ねほむ河入江の松にふる雪のあらしの山のさくらなりけり
 嵐山の花見にまかりけるときよめる
 龜山のあらしの櫻いくそたびさきてちる世の春を見つらむ
 大井川早瀬をくだす筏士ものどかに見ゆるはなのかげかな
 籠に宿りて ねほむ川ちる花までの見せぬこそ朧月夜のささけなりけれ

また雨のふりける日に

あらし山花つるも花の雫にて雨さへをしきこゝちこそすれ
清水寺の夜の花見にまかりてよめる

遅

日

題まらず

いにしへの花のかげさへ見ゆる哉車やどりの春の夜のつき
てる月のかげにて見れば山櫻枝うごくなりいまかちるらむ
傳へきく遠山人の洞の内もかくこそあるらし今日の日永さ
大空のおなじどころに霞みつゝゆくとも見えぬ春の日の影
空にのみあくがればはてゝかげるふのありともなしに暮を春哉

燕 來

かたらはん友にもあらぬ燕すら遠くきたるの嬉しかりけり

苗 代

小山田の苗代水いそこまみてひくまめ細のかげもみえつゝ

雨後苗代

春雨の日ひろふりつる小山田の苗代みづいけふもにこれり

歎 冬

山城の井手の玉水くみにきてかげまで見つる山ぶきのはな

河 歎 冬

岩がねに浪をよきてもさきにけり吉野の瀧のやまぶきのはな

雨夜思藤花

篋れるも清瀧川のたぎつ瀬にちりてながるゝ山ぶきのはな
夜もまがら松の雫のひまひなしうつりやすらむ藤なみの花

暮

春 花のちりて春もかへるの力なき聲のこのころ夕まぐれかな

賀茂川のはどりにすみけるころ河暮春といふあゝるをよめる

年々にながるゝ春を河なみのかへるゝとおもひけるかき

夏 歌

題まらず

梢みな青葉の陰になりぬれど花のさかりをいはぬ日ぞなき

卯 花

わが宿の垣根にさける卯花いとなりにならぬ月夜なりけり

卯 花 似 雪

山里のなつのまるしの卯花をあやなく雪にまがへつるかな

夕 對 卯 花

白妙此うの花がきの夕づく夜さすといなしに物ぞかなしき

卯 花 隱 路

卯花のつゆふむ小野の山陰の浪にぬれゆくこゝちこそすれ

山 家 卯 花

郭公なくといふなる山さどの垣根もたわにさなるうのはな

葵 露

神山のみあれの後のあふひ草いつを待つとて二葉なるらん

葵 露

あふひ草日影になびく心ともまらでや露の置きかへるらん

郭 公

時鳥まのぶが原になくあゑをねらひがりする人や聞くらん
あゝるからみ山いでても時鳥よをうの花のかげになくらむ

尋 郭 公 粟田山松の葉うつむ白雲のはれぬあさきになくほどゝぎす
 時鳥やまの奥までたづねきてなかぬ年かどれもひけるかな
 待 郭 公 郭公すがたの見えぬものゆゑにねやの板戸をあけて待つ哉
 八重葎くも路にまでやさはるらむとひがてにする時鳥かな
 與女待郭公 妹どわが二人さかむの一聲をねたくもをしむほどゝぎす哉
 遠聞郭公 郭公なくなる空のどはければなほまのびねの心地おすれ
 月前郭公 さやかなる月ゆゑだにもねられぬを山郭公なく夜なりけり
 郭公たゞひとあゑの名残ゆゑあけがたまでの月を見しかな
 雨後郭公 夕ぐれの雨のはれまを足引の山ほどゝぎすなきてすぐなる
 時鳥老のねぶりのうれしきいたゞひと聲にさむるなりけり
 郭公一聲 五月をやましかね山の時鳥こよひひとあゑ鳴きていづなり
 足引のやま時鳥やまにのみなきしこゝろやみづれをめけむ
 郭公遍 ほどゝぎすなくねほのかに聞ゆなり遠里をのゝ松のむら立
 野郭公 關もりのうちぬるひまに通ふらんまのびねになく時鳥かな
 關郭公 あしびきの山田のはらの時鳥まづはつあゑの神ぞ聞くらん
 社頭郭公

郭公稀 初あゑを一聲なきていにしより山ほどゝぎを言づてもせぬ
 郭公歸山 時鳥かへる山にのこゑもなし世にふる程やなきわたりけむ
 菖 蒲 おやめ草かりにのみくる人なればいけの心や淺しと思はむ
 かりふけバ軒端にあまる菖蒲ぐさ根のみ長しと思ひける哉
 澤 菖 蒲 住の江の淺澤沼のわやめぐさ松どかはせる根ざしなるらむ
 盧橘薰袖 たち花のなつかしき香に匂ふ夜に我袖ならぬ心地おすれ
 にほひをばいかにせよどか橘の花ちるそでに風のふくらむ
 五月 雨 降そむるけふだに人のとひ來なん久しかるべき五月雨の雨
 降そむるけふだに人のとひ來なん久しかるべき五月雨の雨
 五月雨欲晴 五月雨の雲間に見ゆる夏やまのやがてもそらの緑なりけり
 五月雨晴 み吉野のたぎつ河内いさみだれの晴れて後おそ音増りけれ
 夏 雲 大空のみどりになびく白雲のまがはぬ夏になりけるかな
 夏 山 ふる雪にうづもれながら五月雨の雲間をいつる越のたか山
 六月のそらにかさなる白雲のうへに奇しきみねの富士のね
 夏 衣 なれがたく夏の衣やおもふらんひとの心うらもこそあれ

湊 夕 立 菡さき日にてりながら白菅のみなどにかゝるゆふだちの雨
 夏 浦 夕 浦風のゆふべまゝしくなりにけり海人の黒髪今かはすらむ
 扇 草も木もまらぬあひだの秋風の扇のかげにやどりてぞふく
 閨 中 扇 今いどてうちおく閨の扇かなぬるまや秋のまゝなるらむ
 扇 罷 風 生 竹 ならしつる扇の風と思はましくれて竹のそよがざりせば
 避 暑 うつせみの此世ばかりの暑さだにのぐれかねても歎く頃哉
 泉 心して汲むべきものを山水のふさたびままをなりにける哉
 泉 山かげの淺茅が原のさゝれ水わくとも見え老流れけるかな
 泉 爲 夏 栖 夏くれバ世中せばくなりはて、清水の外にすみどあるなし
 曉 風 如 秋 みな月の曉おきにふきにけりまださちあへぬ秋のはつかぜ
 納 涼 なく蟬の聲のまぐれゆらねども衣手さむき松かぜぞふく
 江 上 納 涼 山かげの岩井の清水くみくして照る日戀しくなりにける哉
 河 邊 納 涼 よる波の玉江の月のまゝしさにからでもむまぶ菰まくら哉
 松 高 風 有 一 聲 秋 川上の糺の森のかさもよしまゝみてをまむ夜のみけぬまに
 我やどの松なかりせば大空のかぜを秋ともたれかさだめむ

夏 神 祇 さらでしも神の心のまゝしきに波のうへなる川やしろかな
 六 月 秣 夏川のみちの瀬になる恨をもけふのはらへに誰かのまさむ
 いま川涼しき音になりぬなり日もゆふまでにかゝる白波

秋 歌

初 秋 風 今よりの秋の初風あゝるあらバ物思ふ袖のよきてふかなむ
 初 秋 露 片岡のあしたの原に秋たちてみだるゝものとなれる露かな
 玉ささの葉分の風におどろけバことしも秋の露ぞこするゝ
 秋 來 水 邊 め吉野のみくまが菅の下にのみ吹きける秋の風たちぬなり
 題 不 知 旅人のもてるくしげの箱根山わけがた寒しあきやたつらむ
 かへるべき限もまらぬ武藏野のたびねおどろく秋のはつ風
 七 夕 雲がくれあふとをれど棚機の度重なれば名い立ちぬめり
 棚ばたの雲の衣の夢もあらじよきなかへしそ秋のはつかぜ
 小車の牛のあゆみの一年めぐるれそしどいかにまぢけむ
 七 夕 雨 はれながらふりくる雨の棚機のあふ夜うれしき涙なるらし

水 雞 うの花のかきね見えゆく曙にそこも去らせ水雞なくなり
 夏 月 どけてねぬ子もち鳥の一隣にやがてあけゆく月のかげかな
 夏ふかみ木がくれ多き山ざとのつきの光にふけてなりけり
 樹陰 夏月 中々に檜の若葉のひろければかへるひまより月ぞ見えける
 題 去らせ 大空に月れてりながら夏の夜のゆく道くらし物かげにして
 夏 虫のけちなむとまざる燈のかげだにまたであくる夜半かな
 夏 草 蓬生の庭のなつくさありたちて拂ひしまでぞ人もとひけむ
 風前 夏草 風ふけバ秋にかたよる聲をなりなつ野の薄ぼにもいづべく
 河ぞしのねしる高かや風ふけバ波さへよせて涼しきものを
 夏 草 露 陰ふかき蓬がまをふく風にけさもこぼるゝさみだれの露
 蜻蛉のとぶひの野邊の夏くさもわくれバ下に露こぼれけり
 江戸にありける時野夏草といふことを
 題 去らせ 春風につのぐみそめし津の國の難波のあしに今ぞかるらむ
 鵜 川 夜河をどたく篝火の後の世の影みなそこらうつるなりけり

名所 鵜川 五月間くらはし川にはなつ鵜も心と身をバえづめざりけり
 悲しくも鵜舟さすなり長良川長らへはてぬおの世と思ふに
 陽炎のもゆる夏野のさはみづによるたつかげの螢なりけり
 夏來ても人のまをさめぬ我がどの板井の水にはたるとぶなり
 雨 中 螢 こも枕高瀬のよどにふる雨のかさより繁くとぶはたるかな
 深 夜 螢 さ夜ふけてもゆる螢のかげ見れば今のと聲もたてつべき哉
 澗 底 螢 ふる雨にともしに消えて箱根山もゆるれたにの螢なりけり
 螢 照 水草 夏川のみくまがくれのみだれ藻によるさく花の螢なりけり
 風わたる水のおもだか影見えて山さはぐくれとぶはさる哉
 海 邊 見 螢 芦間とぶ螢の影のなかりせばよるみつ沙をいかで去らまし
 蚊 遣 火 いをやまぐねん爲こそいなく蚊火の煙に夜たい打むせびつゝ
 奥山のむろのつま木をたきたてゝ蚊遣せぬ夜もなきままひ哉
 夕 立 一昨日も昨日もふりし夕立のけふもふるべし雨づつみせむ
 夕立の愛宕のみねにかゝりけり清瀧がはぞいまにこるらむ
 夕立早過 あまにも夕だつ雲の早ければ雨のあとだに残らざりけり

湊 夕 立 菡さき日にてりながら白菅のみなどにかゝるゆふだちの雨
 夏 浦 夕 浦風のゆふべまゝしくなりけり海人の黒髪今かはすらむ
 扇 草も木もまらぬあひだの秋風の扇のかげにやどりてぞふく
 閨 中 扇 今いどてうちおく閨の扇かなぬるまや秋のまゝなるらむ
 扇 罷 風 生 竹 ならしつる扇の風と思はましれくて竹のそよがざりせば
 避 暑 うつせみの此世ばかりの暑さだにのぐれかねても歎く頃哉
 泉 心して汲むべきものを山水のふさたびまませなりにける哉
 泉 山かげの淺茅が原のさゝれ水わくとも見えせ流れけるかな
 泉 爲 夏 栖 夏くれバ世中せばくなりはて、清水の外にすみどおるなし
 曉 風 如 秋 みな月の曉おきにふきにけりまださちあへぬ秋のはつかぜ
 納 涼 なく蟬の聲のまぐれゆらねども衣手さむき松かぜぞふく
 江 上 納 涼 山かげの岩井の清水くみくして照る日戀しくなりにける哉
 河 邊 納 涼 よる波の玉江の月のまゝしさにからでもむまぶ菰まくら哉
 松 高 風 有 一聲 歌 川上の糺の森のかまもよしまゝみてをよむ夜のふけぬまに
 我やどの松なかりせば大空のかぜを秋ともたれかさだめむ

夏 神 祇 さらでしも神の心のまゝしきに波のうへなる川やしるかな
 六 月 秣 夏川のふちの瀬になる恨をもけふのはらへに誰かのまさむ
 いま川涼しき音になりぬなり日もゆふまでにかゝる白波

秋 歌

初 秋 風 今よりの秋の初風あゝるあらバ物思ふ袖のよきてふかなむ
 初 秋 露 片岡のあしたの原に秋たちてみだるゝものとなれる露かな
 玉ざさの葉分の風におどろけバことしも秋の露ぞこぼるゝ
 秋 來 水 邊 ミ吉野のみくまが菅の下にのみ吹きける秋の風たちぬなり
 題 不 知 旅人のもてるくしげの箱根山わけがた寒しあきやたつらむ
 七 夕 夕 かへるべき限もまらぬ武藏野のたびねおどろく秋のはつ風
 雲がくれあふどのまれど棚機の度重なれば名の立ちぬめり
 棚ばたの雲の衣の夢もあらじふきなかへしを秋のはつかぜ
 小車の牛のあゆみの一年のめぐるれそしといかにまぢけむ
 七 夕 雨 はれながらふりくる雨の棚機のあふ夜うれしき涙なるらし

七夕 船 はるかなる年のわさりも限われバ漕ぎ寄せけりな天の川舟
 七夕後朝 一とせをまたん別に衰へてはなのかつらも去らむけさかな
 海邊七夕 棚機のためむけ草とのからねどもみるめいあまの心ありけり
 霧中七夕 ましらなく山下水にかけ見れば星合のそらも袖ぬらしけり
 憶牛女述懐 棚機に心をかしてねがはく我ひとせも長しとおもはむ
 曉 萩 風 限われバさめなむとする明方の夢のまゑふく萩のうはかせ
 外に出て住みける年の秋よめる

萩

この秋のふる里人の音づれにふくどのみきく萩のうはかせ
 さを鹿の妻とふ野邊の秋萩のまな葉よりこそ色づきにけれ
 一夜おや棚機つめのおりつらむ今朝しも萩のにしきなる哉

高臺寺の萩見にまかりて

薄

古寺のたかき臺のからにしきたち残しけんあきはぎのはな
 紅のあさはの野邊のまの薄はにいであれどいまだみだれず
 古郷の野中の道にやまらへバ風にひれふるまのをまき
 秋風にまききの糸をよらせつゝたがぬひいでしくさの袂ぞ

薄 隨 風 ひどかたに靡きそるひて花薄かぜふく時をみだれざりける
 行 路 薄 旅人の袖とひとつになりにけり末の原野のまのをまき
 薄 似 袖 おしなべてまらぬもまらぬも招くこそ尾花が袖の心なりけれ
 荊 萱 萱 かくばかりなぞや心の亂るらん野邊の荊萱かりそめの世に
 荊 萱 亂 風 秋風のふかぬさきだにある物を今朝の萱のまどろなる哉
 庭 栽 野 花 色々の花の隈をうつし植ゑて荒れぬ庭をも野とぞなしつる
 槿 花 未 開 露にだにうちとけやすき朝顔の花のひもふく秋のはつかぜ
 露 葉がくれをまだ明けぬ夜と思ふらむさかむともせぬ槿の花
 露 秋風にそよぐものゆる小篠原一夜もおちずつゆのおくらむ
 露 脆 さを鹿にまがらみかくる秋萩も露をばえこそ留めざりけれ
 庭 露 眞砂にもおくらん露を打なびき一むらみする庭のをまき
 荒 庭 露 滋 淺茅生の野邊とひとつになりしより露も心をおかぬ宿かな
 枕 邊 露 秋の夜の永き夢路のまをりに結ぶまくらも露けかりけり

蟲 なく虫の聲ふりたつる秋の野をさびしかるべく思ひける哉
 我ばかりうき夕べかと思ひしを暮てぞ虫もなきはじめける
 聞 蟲 虫のねの近き夜半かな枕とて草のむすばぬたびねなれども
 枕上聞虫 虫のねの近き夜半かな枕とて草のむすばぬたびねなれども
 菘 菘 菘むかしちぎりし誰なればきてのまくらのもどになくらむ
 閑庭虫 八重葎まげみが下のつゆけさをひるだにわぶる虫の聲かな
 叢 虫 さやまたの穂屋の薄の一村にあつめてもきく虫のさゑかな
 松 虫 みさをにも螢のもえし草むらに堪へずや秋の虫のさゑかな
 鈴 虫 秋の夜を千年とたのむ松むしの聲霜におそうらがれにけれ
 秋田風 虫 ひまもなき時雨のあめに鈴虫のふりならされてよわる聲哉
 故郷秋風 虫 かりたちて昨日かつみし芹川の竹田のはらに秋かぜぞふく
 題 虫 身にぞまむ鶴なくまでまみまてしたがる里の野邊の秋風
 秋 虫 關おえてゆくみちのくいかならむわが白河も秋風ぞふく
 秋 虫 さもこそ物の悲しき秋ならめ夕日にさへもぬるゝ袖かな
 秋 虫 いかんせむ萩の上風ふきよせて夕まぐれおもなりにつける哉

關屋秋夕 旅人の涙ばかりいどいさらぬ關のわら屋のあきのゆふぐれ
 故郷秋夕 いかならむわがまだまみし昔だに悲しかりつる秋の夕ぐれ
 田家秋夕 山城の鳥羽田の里の夕ぐれを見ぬ人しもやあきかなしき
 駒 迎 逢坂の山のまづくにぬれつらむふしてぞ見ゆる駒のくる髪
 雨中駒迎 雨ふりて暗き夜半だにあるものをけふひく駒の甲斐の黒駒
 稻 妻 ふしみ山松の木間の稻妻に鳥羽田のおもいつゆを見るかな
 秋 雨 我宿のまゝきはにいでて村雨のふる日さむくもなれる秋哉
 山路秋雨 雨にとくなりぬるものを鈴鹿山霧のふるのと思ひけるかな
 秋 時 雨 長月の有明の月のくまもなくする夜と思へば時雨ふるなり
 月 大方のうとさきものなるおろ空もまむ月ゆるむつまじき哉
 雲間待月 闇もなく常にかくてる月ならば夜をぬる人のあらじと思ふ
 愁人對月 まむ月も今か見ゆらむ大空にまづ雲間おそわらはれおけれ
 對月待客 思われればはれどあふぐ大空に月もひどりぞながめ顔なる
 深夜月 乙む人の何にか今夜さはらむ月おも隈のあらばこそあらめ
 物思ふとねられぬ聞の窓をあけて今宵もみつる有明のつき

閑夜月 ながむれば夜たゞ心もまむ月に音せぬ松のかぜぞふきける
 曉出月 さしのぼる月の光と思ひしやがても空のあくるなりけり
 獨見月 われ獨月にむかふと思ひけりよよひの影をたれか見ざらむ
 今去そわれ獨のみにもあらざりし昔の秋をつきやとふらむ
 月前風 ふくる夜の月の雲井にまづまりて袖おのみふく秋の風かな
 雲收月明 山の端に棚びきまづむ白雲の上よりいづるあきの夜のつき
 山月明 残りなくあらはれおけり山松の葉むしに見えし秋の夜の月
 山月聞鐘 高砂の尾上の月やふけぬらむまみわたりぬる鐘のおどかな
 峯月照松 いたづらに思ひし峯の一つ松およひ月こそまみのぼりけれ
 月前松 松陰にたち隠れても見つるかなあまりに月の隈しなけれバ
 松間月 洩まべき松の木のままの心ともまらでや月のかくれそめけむ
 松月夜深 さを鹿の妻よぶ山の松のはもあらはれそむるありわけの月
 月夜聽松風 澄む月のふけゆくまゝに聞えけりふきもふるさぬ峯の松風
 竹間月 吳竹のひとよゝにれくれきて葉むしになりぬふし待の月
 月前竹露 吳竹のふしもあらはにてる月の影におくれてのぼる露かな

月照流水 ゆく水の末いさやかにあらはれて川上くらき月のかげかな
 八月十四日の夜月いとさやかなりけるに

十五夜月 類なくまめる月かなうべしおそ今夜と人もまぢわさうつれ
 今夜とていつもかくやにてる月の光や今年あらたまるらむ
 雨ふりける年 たちいでて向ふかひおそなかりけれ雲の中の秋の夜の月
 故郷月 波のうへをあれぬ所と宿るらむ大津の宮のあきの夜のつき
 月前思故郷 いづくにか今いまむらむと故郷の月もや我を思ひいづらむ
 水郷月 橋のこむまが崎につきまめバ八十うぢ人ぞいねがてにまる
 田家月 さを鹿の聲ばかりこそ聞えけれひたうち忘れ月やみるらむ
 岡月 こゝにして見れども月の隠れけり何ぞいかひの山なしの岡
 關路月 波の上の月をきよみガ關あきて我こそ今夜もりあかしけれ
 浦月 月の今うしろの山にいでぬらんあらはれそむる須磨の浦波
 九月十三日安藝の國へかへる人をねくりて
 雲の浪たゝまもあらなむ長月の月みて夜船あぐひとのため

病にわづらひける年の十三夜に

月 前 萩 あらざらむ後と思ひし長月のあよひの月もこの世みて見し
 月 前 菊 かく露にかねてうつろふ秋萩の下葉まであそ月ひとひけれ
 月 前 虫 初霜のまだおきなれぬ宵々の月にうつろふをらぎくのはな
 月 前 船 てる月の光のうとき蓬生のはにみちさるむしのおゑかな
 月 前 笛 ますかゝみぬめの浦の沖つ洲に舟人さわぐ月やいづらむ
 寄月釋教 眞をばまたわらはさで光のみはなてるわしの山の端のつき
 みくま野のかたに

月の前に雁なびきたるかた

雁 打かはす雁の羽風に雲きえててりこそまされ秋の夜のつき
 雁 中々にかはらぬものゝかりがねの空にさだめし契なりけり
 雁 秋風のふかばど誰に契りけむさはれわふるはつ雁のおゑ
 雁 山風をつばさにうけて飛ぶ雁の思はぬ方によるどなくらし

夕 雁 山のはのどよはた雲に打靡き夕日のうへをわたるかりがね
 山 雁 山里のかきねの眞萩色さりとかりがねなきつ秋たけぬらし
 旅 泊 雁 かりくど何ぞの夜たゝなのりその浮寝悲しき由良の湊に
 遠 山 霧 玄げ山もは山もわかぬ霧の上にはのく見ゆる筑波山かな
 橋 上 霧 ゆく水のくも手にかくる八橋を霧のひとつにたち渡りけり
 林 間 霧 朝霧のうき田の稻のかりつらむ色づきそむる大あらしの森
 關 路 曉 霧 あふ坂の關の杉むらきりこめて玄らみかねる有明のつき
 河 霧 霧 河風にふきながさるゝ朝霧のいかなる瀬ふか消むとすらむ
 遠 村 霧 山崎をわがたちくれバ朝霧のたえ間に見ゆるさくら井の里
 攤 衣 やまがつが秋さり衣よひくにうつ聲たかくなりまさる哉
 曉 擣 衣 さ夜ふけて音こそかはれ唐衣まきかへしても打すさぶらむ
 山 家 擣 衣 有明の月より聲をひくなるねざめて誰かこるもうつらむ
 海 邊 擣 衣 我山にまゐたれすみて唐衣うつなるおどのことしきおゆる
 旅 宿 擣 衣 かねりこぬ夜舟まちあひ三保の浦の沖つの蜚や衣うつらむ
 ねられねバ妹こひしきを唐衣うつなる里になにやどりけむ

鳴 宇多の野に鳴ぐ羽かく音高しわなはる人のきゝもあそすれ
 澤 畔 鳴 あけぬとて鳴いたてども大澤の芦間の月のかげもさわがず
 故郷野分 故郷のまのゝわらがき野分して葎のとちめはあるびにけり
 宮の御會に重陽宴といふよとを

菊 露 このどのゝ高きにのぼりくむ酒のやがて山路の菊の上の露
 菊 花 久 露まもの色ぞまよとにうつるらむいよゝ白しまら菊の花
 菊 関中友 霜をへて匂ふ白菊これのみぞかれぬ友なるよもまよのやど
 菊 制顔齡 舟よせてかいぬ藥をえたるかな龜の尾山のまらまのはな
 老 對 菊 つもりての若ゆとさくの花の露いかに契をかけたがへけむ
 菊 映 水 いづくより駒うちいれむ佐保川のさいれふうつる白菊の花
 題 玄らま 吹く風の身ふまむ色に出にけり草木もあきや悲しかるらむ
 尋 紅葉 昨日けふあすかの里もまぐるらむ眞弓の岡の色づきにけり
 山めぐる時雨の雲あひひけり染めたる陰や有と問はまし

紅葉 浅 初時雨ふりしばかりの跡みえて梢のみこそいろづきにけれ

松間紅葉 山松の木の間に見ゆる年々のもみぢも色のかはらざりけり

ある夕べ内の御局わたりより紅葉のいとめでたきを白かねの瓶にさしこめて賜ひたる

題 玄らま 雲井よりさして來おけるもみぢ葉の色は夕日の心地あそまれ

暮 秋 霜 どりもわへず戴く枝のもみぢ葉をやがてかざすと人や見るらむ
 もみぢ葉の色ばかりこそゆるされぬ雲の上までゆく心かな
 時のみあくるゝを見れば朝顔の花に日かげもかくれざりけり
 何ならぬ限ももの悲しきにあはれなりけるあきの暮かな
 ことわりにすぎても寒し長月の有明のつきに霜やふくらむ

冬 歌

時 雨 神無月あしたの雲の定なきたがらざりよりまぐれそめけむ

父君の一周忌に時雨といふことを
大空のふきのみ拂ふ山かぜにくもりかねてもふる時雨かな

冬たちて今日みか月のありてなき影もかきくらしふる時雨哉
世中をうきたる雲と見し日より袖のまぐれぬ時なかりけり
風前時雨 浮雲のかげもどいぬ大空の風にのこりてふるまぐれかな
山時雨 浮雲のあはたの奥やまぐるらむ音羽の山ぞ見えたりゆく
關路時雨 鈴鹿山雲も關路にかゝりけりまぐれぬ先にいかであえまし
川時雨 貴船川いはこま波の早き瀬にたちかへりてもふる時雨かな
里時雨 けふも亦時雨のあめにぬらしけり木曾の麻衣さらしなの里
河上落葉 穴師河かれたる水の音さけば木葉のなみのさわぐなりけり
閑居落葉 山河の岸をひたりてゆく水にぬるての紅葉ちらぬ日どなき
残菊 かのづからふむ人もなき我門の桐の落葉のつゆのさやけさ
寒叢見殘菊 菊の花あまじく久しくなりぬれば霜さへにこそおき忘れけれ
殘菊 故郷のよもぎが原の冬がれにあらはれそめし白ぎくのはな
殘菊 昨日までおいせぬ色に見しものを雪をいたく白菊のはな

題 不知 夜を寒みぬざめく／＼てわけ方の霜と共にむむまぶゆめかな
神無月音せぬものにおどろく昨日のおほり今日の初ゆき
氷 殊更にけさより寒し神無月こほりぞふゆのはじめなりける
氷閉細流 岩間ゆく水の心のせばければつら／＼に思ひむまぼやれつゝ
冬 月 つく／＼と今年もながめはてにけり哀どおもへ冬の夜の月
寒 月 てる月の影のちりくる心地してよるゆく袖にたまる雪かな
寒月照梅花 たいにやの寒しといはむ冬ながら梅さく庭にてれる月夜を
寒夜千鳥 神山のよはの木枯かどさえてみたらしがはに千鳥なくなり
題 玄らむ かし曳の山邊さわたるあぢむらの早くも冬の日の暮ぬめり
水 鳥 かるの池にまむ水鳥の浮ながらうきたる世を知らむやあるらむ
水鳥のかきにさわげど廣澤のみぎはまてこそ浪のよせけれ
朝看水鳥 さ夜ふけて蘆の葉わたる山嵐におきたつ鴨の聲ぞきまゆる
寒夜水鳥 こやの池をむれて朝たつ水鳥にまばしらくもる猪名の松原
江 鴨 嵐ふくさやまが池になく鴨の夢もこほりやむまびはてけむ
あし鴨のけさつくま江のみをつくし今年も冬のまるし也けり

鴛 網 代 冬の池に眠れるをしの一つがひいかにとけたる心なるらむ
 たなかみの山の木枯さえくれぬあじろの籐いまかたくらむ
 風さゆる網代の床に今夜もや待つらむ氷魚のいかによる覽
 玄ぐるゝいぞれなるらし此夕へ松の葉白く成にけるかな
 かどろかま楨の板屋の玉われ寂しくもあらぬ我ねぞめ哉
 軒たかくふるや霞のうちつけにかはらも玉の聲たてつなり
 深 夜 霞 いかばかり驚けとてうぬる人の夢をまちてもふるあられ哉
 行 路 霞 玉はこの道ゆく人のうちかづく袖にひとむらふるあられ哉
 さを鹿のなきてかれにし朝より雪のみつもる玄がらきの里
 あともなき山路の誰うふみわけむ思ひたえよと積る雪かな
 蝶のとび花のちるおもまがひけり雪の心の春にやあるらむ
 待 雪 朝なくおきいでて見れど葛城の峯にもいまだふらぬ雪哉
 初 雪 まきあぐる玄の、籐のさらゝに思ひもかけぬ今朝の初雪
 草も木もあやめわかれぬぬば玉のよるしもあたら初雪ぞふる
 雪中厭人 朝夕にまてばあぬ人なかくに雪にや跡をつけむとすらむ

雪 似 花 ふりはへて誰いどふとも我宿の雪にいまど跡なしといへ
 梅の花ちるにまがひてふる時ハ雪さへにはふ心地あそすれ
 山 雪 かきくらしふる大空に近ければ山あハ雪ぞまづつもりける
 都より雲井にみゆるかつらきの高ねさやかにつもる雪かな
 遠 山 雪 夜も寒し瀬の音も高しと吉野の大川のべにゆきぞふるらし
 河 雪 白雪のつもるにつけて山里ハふかくなりゆく年を去るかな
 山 家 雪 白雪のつもるにつけて山里ハふかくなりゆく年を去るかな
 松 雪 深 拂へばやかへりて雪の積るらむさらばとよわる軒の松かぜ
 旅 山 雪 深 ねさそ山大雪ふれりわら熊のあもるうつばに宿やからまし
 賀茂の臨時の祭久しく絶えたるを今年再興ありけるに其日しも雪のふりければ彼西行の
 うらぐへす小忌の衣とよめりしおとを遙に思ひ出て
 鷹 狩 いにしへの竹のうら葉にふりし雪再加へる世にあそありけれ
 真白斑の鷹引をゑてもものゝふの狩おといづる冬ハきにけり
 野に山に悲しき鳥のあゑをなり狩びといまや鷹はなちけん
 雨 中 鷹 狩 せらせたる初狩衣の遠山も玄ぐれのあめにいるづきにけり
 炭 籠 比叡のねに初雪ふれり今よりや小野の炭籠たきまさるらむ

閑居埋火 底ぬるき火桶ばかりを友としてくらす老ともなりにける哉
 爐邊閑談 埋火のにはふあたりい長閑ふて昔がたりもはるめきにけり
 題えらま 埋火の外に心いなければむかへばみゆるまらどりのやま
 神樂 はふり子がとる柳葉に月よみのみ影も白し更けぬこの夜の
 五節舞姫 大津袖かへしたまひし大君のをとめのまがた今もみえつゝ
 豊明節會 豊年のとよのあかりの舞の袖おもへば民をなづるなりけり
 題えらま かねの音いさおえずながら百式の新たなめ祭夜の更けぬめり
 歳暮 宮人の日かげのかづら長き夜もわけぬと見ゆる雲の上かな
 歳暮 あら玉の年のうちにも鶯のはつねばかりのはるい來にけり
 雪 中歳暮 いたづらに明し暮して人なみの年のくれとも思ひけるかな
 歳暮 年の緒も限なればやまら玉のあられみだれて物ぞかなしき
 雪 中歳暮 白雪のふる大空をながめつゝかくて今年もくれなんがうさ
 歳暮 明日からのふるとも春の物なれば今年雪の積るなりけり
 歳暮 限あれば我よも近くなるものを年のみはてと思ひけるかな

都 歳暮 百敷の大みやびともいとまなき年のをはりになりにける哉
 山家歳暮 鶯の聲よりほかにやまざといいそぐものなき年此くれかな
 老後歳暮 なれくゝて年の暮ともおどろかぬ老のはてこそ哀なりけれ

事につき時にふれたる

まの籠れろしおめさる心をもうごかしそめつ春のはつかぜ
 都人といもやくると松の戸をあけたるのみぞ宿のはるなる
 音たてゝ氷ながるゝ山みづに耳もまたがふはるゝ來おけり
 けさも猶まがきの竹に震ふりさらく春のおちこそせね
 限なくまたせくゝてあら玉のことしぞふれる去年のはつ雪
 青柳の糸のたえまに見ゆるかなまだとけやらぬ大ひえの雪
 山里のまのゝ籠のまのゝめにひま見えそめて梅が香ぞする
 都人いであぬまに山さどの梅のさかりのうつろひにけり
 門さして人になしとこたへけりいかゝいもべき鶯のこゑ
 鶯の木づたふ枝の見えねどもこゑぞ聞ゆる夜のわけぬらし

ひるよりの大方くもる此頃の朝ごとになくうぐひすのこゑ
 まづかなる月おと向ふ曙のおゝろもまらぬもちどりかな
 わけわたる外山のみねの横雲にひきかさねたるあさ霞かな
 霞みつゝくるゝと思ひし春の日の朧月夜になりけるかな
 とはさらば何のことづてさらでたに物なつかしき朧月夜を
 ゆけどく限なきまでおもしろし小松が原のおぼろ月夜の
 妹といでて若葉つみにし岡崎の垣根おひしき春さめぞふる
 けさ見ればいつう來おけむ我門の苗代を田につばめとぶ也
 吾岡にけふも來てつむ少女子ご其なだにおそ聞かまほしけれ
 人まれば花とふたりの春なるをまたせてもさくやま櫻かな
 春の夜のまだくろ谷の鐘の音をおさいいでて花の本にさく哉
 昨日けふ花のもどみてくらまおそ我世の春の日數なりけれ
 少女子ごがひの宮にちる花の繭をいでる蝶かどぞ見る
 野の宮の櫳の下みちけふくれば古葉と空もにちるさくら哉
 只たのめ横川の奥にさく花もちりて後おそわかび出づなれ

世中のかくぞ悲しき山ざくら散りしかげあひよる人もなし
 るひふして我どもまらぬ手枕に夢のこてふとちるさくら哉
 家にありて見るだにあるをなつかしき妹が峠の山吹のはな
 山吹の花ぞひとむら流れけるいうづの棹やきしにふれけむ
 我門のまへの棚はしどりはなて折る人多しやまぶさのはな
 春の日のながくもかけて見つるかな我轉寢のゆめのうき橋
 春の野のうかれ心のはてもなしとまれといひし蝶の留りぬ
 てふよく花といふ花のさく限汝がいたらざる所なきかな
 里中の垣根までをぞまみける野邊の遊にくらしおまりて
 ちゝおぐさ母子草おふる野べに來て昔おひしく思ひける哉
 鶯のなきでとゝむる聲をさへものどもきかで春のゆくらむ
 今よりのはどり少女ら新桑のうら葉とるべき夏のきにけり
 まらかしのまづ枝うごかま朝風に昨日の春の夢のさめにき
 けふ見れば花の匂もなかりけり若葉にかゝる峯のまらくも
 いつよるか夏の境に入間川さしくるまほのおどのすいしさ

若葉のみまげりそひけり鶯のなきつる竹のいづれなるらむ
夜半の風麥の穂だちに音づれて螢とぶべく野のなりみけり
わが窓のうちをば照まかひなしと光けちてもゆくほたる哉
夜を照す光しなくばなか／＼に螢も籠みあもらざらまし
郭公まば／＼なきしあけがたの山かきくもり小雨ふりきぬ
時鳥ふるきのさばをまぎがてに昔まのぶのねをのみぞなく
とりはてぬ澤田のさ苗はる／＼と末あそみゆれ水の白なみ
五月雨の雲ふきまさぶ朝風に桑の實おつる小野はらのさと
かりあげし畑の大麥こきたれてふる五月雨にほしやわぶ覽
五月雨に賀茂の川橋ひきつらむたえて都のおどづれもなし
大橋のうへ渡りゆくかち人のたゞよふ夏になりけるかな
水鳥のかもの川原の大すゝみあよひよりとや月もてるらむ
夏の夜の月のかげなる桐の葉をおちたるのかと思ひける哉
尾羽ふれてあきつとぶなる草川の汀にさける大和なでしこ
根をたえてさいれの上に咲にけり雨に流れし河原なでしあ

かたぶきてたてるを見れば人まれず物をや思ふ姫ゆりの花
池水のはちまの巻葉けさ見れば花と空もあも開けつるかな
朝ふめど露もまめらぬ水無月の野づらにさける月草のはな
なびくだに涼しきものを夏河の玉藻を見れば花さきにけり
見わたせば神もなるどの夕立に雲たちめぐるあはぢ島やま
布引のたきの白浪みねあえて生田におつるゆふだちのあめ
近わたり夕立しけむあひの夕べ雲ふくかぜのたいならぬかな
山風にふきたてらるゝ楢の葉のかへればはるゝ夕立のあめ
わが宿にせきいれておとす遣水のながれに枕まべき頃かな
朝づく日いまだ匂はぬ山の端のまつ葉わたる秋のはつ風
あらはれて世にたてる名もまらぬを猶忍びける秋の初風
何となく袖を露けきいつのまに今年もあきの夕べなるらむ
心なきひとの心やなからましあきの夕べのなからましかば
秋風にまねくを見れば花すゝきたが袖よりもなつかしき哉
いはねども露わすられず東雲のまがきにささし朝顔のはな

いづる日の影にたゞよふ浮雲を命とたのむあさがほのはな
 夕日さす淺茅が原にみだれけり薄くれなるの秋のかげろふ
 敷妙のよどおの下のきりくすわがさゝめど人に語るな
 どにかくに露けき秋のさがあらば野をわけくてぬる増れり
 里人のいははきりおとす白河のたぐにきあゆるさを鹿の聲
 ればつかな塵ばかりなる浮雲にかくれはてたる三日月の影
 人まればわがまみそむる白河のながれを月の尋ねきにけり
 栗田山松のまげみをもりかねて木間かぞふる月のかげかな
 残りなく松のすがたのあらはれていまだ離れぬ山の端の月
 てる月の高くはなれて嵐のみをりく松にさはる夜半かな
 まぐるゝの音ばかりなる松の葉に心と月のかくれけるかな
 歸るべく夜のふけたれど鴨川の瀬の音の清し月のさやけし
 家路までおくらん月の影ながらわかれて歸る心地おそまれ
 身の老ぬ松も木だかくなりけりかはらぬ物の秋の夜の月
 月てればつらく椿その葉さへみな白玉とみゆる夜半かな

なか／＼に鴨の河霧たちみちて京まらかはへだてざりけり
 菊の花おぼるゝけさの露見れば千世もはかなき心地こそまれ
 よひ／＼の空にきえゆく長月の有明のかげや霜どかつらむ
 朝づく日匂へる空の月見れば消えたる影もある世なりけり
 おどもなき野邊をいでも見つる哉鴨が鳴く音のあわたしさに
 山里の軒の松風おがらしに吹きあらためてふゆの來にけり
 よもまがら木葉をさそふ音たてゝ夢ものおさぬ木枯のかぜ
 今のとてまぐるゝ冬のはじめおそ物の哀のをはりなりけれ
 朝づく日さしも定めぬ大比叡のさらゝの坂に時雨ふる見ゆ
 山里の冬の庭こそさびしけれ木葉みだれてまぐれふりつゝ
 月さゆる落葉がうへにかく霜を影のうづむと思ひけるかな
 冬の夜の長きかぎりを曉のまもにこたふるかねのおどかな
 吳竹のまげみぐ上に音たてゝちるやあられの敷をまくなき
 山かげの塵なき庭にちりそめて敷さへ見ゆるけさの初ゆき
 大宮の上にかゝれる衣笠のやままろたへにゆきふりにけり

けさ見れば汀のこほり埋もれて雪のなかゆく白かはのみづ
 かくれがの雪の雪とを積りける花なるさどの花とみゆらむ
 人とはぬ宿のけさこそ嬉しけれ塵もあどなきゆきのうへ哉
 春をまつ心もなしと雪のうちには老木のうめ隠れてや咲く
 山ざとの松につもりし初雪のきえぬまゝにて暮るゝ年かな
 何事もこのころおんど思ひつる三十ちの年のはてぞ悲しき
 家毎になやらふ聲を聞ゆなるいづくに鬼のまだくなるらむ
 事なくて氣賀の關だにゆるせしを何を見附の里といふらむ
 ましらなく杉のむら立下に見て幾重のぼりぬませの大さか
 思ひやれ天の中河なかほきてたゆたふ旅のこゝろぼそさを
 沖津より夕越えくれは山松のこきゑおかゝる富士のまら雪
 今夜もやまろねの紐をゆひの濱うちどけがたき波の音かな
 富士のねを木間くにかへり見て松のかけふむ浮島がはら
 箱根山ゆふる雲おやどからんふもとの遠し關のめづらしきぬ
 むさし野のはての玉山たまゝに向ふ高ねのめづらしき哉

津の國にありときさつる芥川まことの清きながれなりけり
 夕づく日今いどまづむ波の上にあらはれそむる淡路ま山
 鷗とぶちぬわにたてる濱市の聲うらなみにかよひけるかな
 よろばへる門にたちても縁子の父の母のどまぢかねのさど
 明石がた松の木かげに道のあれど磯づたひして若め拾はむ
 鴨川にうかぶあひるの朝なくたらすなりゆく敷ぞ悲しき
 鼻のおゑをまゐるべに歸るかな夕べをぐらきをかざきのさど
 山ふきて避んと思ひし世中のうきいさながら身の老ふけり
 浅ければすむかひもなき山なれど世にあるよりいさすかまされり
 門といふまゐるしばかりの二もどの杉のはしらも傾きにけり
 わが門の垣根のみぞの浅けれど山みづなれば濁らざりけり
 くむたびお見る我影のさわぐかな心もさぞな山の井のみづ
 露見えて草の庵にふる雨のよるさくよりもさびしかりけり
 松の葉の雫おつらし柴の戸にをりくあらき雨のおどかな
 夕まぐれ嵐にかつる松の葉を雨のわたるとおもひけるかな

夕べく外山のあらしきなれて是ばかりあつ物も思はず
 雲をのみ凌ぐと思ひし松が枝の地につくまでなりける哉
 おひまげる窓の吳竹ふしても見起てもみれどあかぬ色かな
 笑ふおも涙おぼるゝ世のなかに泣きつゝゑめる人も有けり
 子を思ふ道いかなる道なれば去るよりやがて踏迷ふらむ
 子いなくてあるがやせしと思ひけりありての後になきが悲しさ
 袖川におろす筏のいかにしてかばかり道にくだりはてけむ
 敷島のうたのあらす田荒おけりあらすきかへせ歌の荒す田
 けものすら物いふときく言の葉の道のまこと誰か去るらむ
 もろおしの虎ふす野邊に吹く風の目にみぬ所恐ろしの世や
 狩人の射る矢にむかふいかり猪のかへりえられぬ戀の道哉
 かくこそわれ身を唐猫の妻とひにさわぐ心の戀のすがたの
 空にちる鳥の一羽のかろき身をおきどころなく思ひける哉
 櫛の實の一つ二つのねがひさへなるおどかたき我世何せむ
 石をのみ玉といだきて歎かな玉の玉ともあらはるゝ世に

戀歌

初 戀 世中の一花ころもいつのまに身にまはすまで思ひそめけむ
 けふ放つとや出の鷹の苦しくも始めてこゝろにかゝりける哉
 忍 戀 かくばかり苦しき物をうつせみの人めを何に忍びそめけむ
 玄のぶどいすれどもすれど狩衣心にもどるわがなみだかな
 聞 戀 たまぐの便にきくの白露もつもれば袖のふちとこそなれ
 さししより心あてなる面影のいやはかなしな夢おさへ見ゆ
 傳 聞 戀 驛路の鈴のつたへてきししよりふりすて難くなるおもひ哉
 見 戀 玄かの蚤もからぬ先やの玄をれつるみるこそ戀の始也けれ
 玉だれのをすのすきまに見ずもあらず只俤の心地こそすれ
 契 戀 おろかおも思ふらめども今更にまことの外の何をちざらむ
 途 中 契 戀 さればなど思ひもぞよる玉銚のみちにあひつと人に語るな
 ささの世の身をえる雨の笠やどり一木のかげの契のみか
 憑 媒 戀 まかせたる苗代水いよどむども我といひかむ君がまふく

宮の御會に偽のゆふべといふ心をよませ給ふによめる

待 戀
おむといふをまたじといひしこの暮のわが偽も顯れにけり

深夜待戀
こぬ人をまつに今宵もいさよひて更けぬと志るき山の端の月

連夜待戀
曉のどりの八こゑをつくしても猶おぬものに定めかねつゝ

契 待 戀
月より夜にまだ深き四阿屋のまやの妻戸をさしぞ煩ふ

遣車待戀
思ひきや立ち居まち待ちかかね獨ねまの月をみんどの

逢 戀
月よりも後とちざりかかざりき先出てこむ時たがひぬ

忍 逢 戀
今夜だに猶つれなくひむな車押かへしてもやらんとぞ思ふ

適 逢 戀
とけぬればかくもとけぬる下紐の年月なにし結ばれけん

夢中逢戀
敷妙の枕のもとに太刀のあれどとき心なしいとねされば

雪折の聲さへたてぬなよ竹のよにふしたりと志る人もなし

わへバかくわはねばたえて山彦の音信だおもせぬや誰なり

年月をまちかね山の陰おほそうべたまさかの池のありけれ

はかなくも夢に契りし後の世のさめたる今のうつゝ也けり

忍ぶれば衣重ぬと見し夢のうらさへえこそあはせざりけれ

來 不 留
夢なるかわが手枕に我ふれて人のとこもひし闇のくるかみ

別 戀
まぼしだに影も留めぬ稻妻のよひく何にかどろかまらむ

いかでかくあふの夢なるおちしてつらき別の現なるらむ

とまれとやけさの朝風さらでたに別れがたみの袖に吹らむ

別後會難期
別れかねとるたなうらのかへるまも頼まれぬ世を待渡れとや

月前歸戀
人まねぬ袖のわかれをおくりけり心あり明の月のかげかな

後 朝 戀
いつかひん涙をさへにとりかへてきたるかさみのきぬくの袖

けさのまの夢も夢の見ゆやとて重ねし袖を返してぞぬる

たちそめて世に埋もれぬ浮名おそ苦の下まで悲しかりけれ

歎 名 戀
世中にたつ名おもへばうたゝねの夢にあひしや誠なりけり

無 名 立 戀
我戀の木がくれづたひゆく月のまらぬひまより顯れおけり

顯 戀
來ても見よ戀衰へてひを虫の目をへて世おのわらん様か

切 戀
ひたせらに人目をよくとこもひし誠おらととき心なりけり

疎 戀
ありしにもあらせいかにの疑にかつ我からや變りそめけり

變 戀
わすれ貝いかなる方に拾ひけむそのかたし貝いかに拾はむ

忘 戀

恨

絶

戀

人をのみつれなき物と恨みけりあまりに身をも忘れたる哉
神崎や磯まの浪のうちいでしうらみぞ戀のかぎりなりける
中々にたえバたえねと思ひしうらみしどきの心なりけり
いかにせんさもくることの繁かりし中より絶し賤のをだ巻
冬草のかれにし物と思ふらむさておそ下にもゆるおもひを
東路のさやの中山さやかにみぬ人いかでこひしかるらむ
年月をふるの神垣なにかもつらきこゝろを祈りそめけむ
獨して思へばこそくるしきを物をやとだにどふ人もがな
おはよしおはせバさてと天地の神に任せん戀からめやも
津國の深江のま菅いちぢろくねに亂れてもこふと去らせや
たけくまのはなわにだおもたてりせばまつうどのみいはいはれなましを
杣人の筏につくりさしおろすひのくれゆけば戀しきものを
まびきさる梓の弓のうらはづの音のみ高きこひのくるしさ
花筐つくる狭山の青つゝら手に手をこそなくまはしけれ
やがて身を離れざりけり黒髪末ふむばかりありしおも影

題
去らせ

思

曉

隠

舊

閑

片

戀

戀

戀

このごろの夢も現もひとつめてあけぬくれぬと面影ふたつ
哀ともきえての後にいふらめどけぶりの爲にかひやなからむ
若草を駒ふふませて垣間みしをどめも今のおいやまぬらむ
思はなんわたら一時新草のうらわかみこそひともいふなれ
三千年に花さく桃此一度もなるとしきかばうれしからまし
つぼくらめ通ふ澤邊のおもだかの思ひあがりし人を戀しき
紅此まゑつむ里のほどゝぎを思ひいでていなかぬ日もなし
紅のいろにみえなバ同じごといざ打いでんわがこゝろから
夕されバ千鳥なきたちま川汐のみちくる戀も走るかな
限あれバ富士の烟もたゝぬ世にいつまでもゆる思ひなるらむ
うちもいでじつらきにつかバ胸の火此いかばうりか燃増るべき
思はぬをおもひねにして見る夢のあやなと鳥の驚かまらむ
さもこそい厭ふあまりの業ならめ隠れ所此ねたくもある哉
吳竹のもとのふし此み戀しくておのがよゝとどね泣かれける
我涙まくらにあつる音ならでねぎめの戀いとふひともし

旅 戀 世のつね此草の枕此旅のみやつれたりとや人のみるらむ
 陸奥此玄のぶ此里のかやむしる寐もせぬ夢に人のみえつゝ
 春 忍 戀 音たてぬこひの涙にそふも此のつれづれと降る春の夜此雨
 夏 見 戀 人玄れぬ我垣間見もわか竹の玄げみにさはる夏の來あけり
 秋 増 戀 いかにせむ戀のさかりの秋にあひて又咲きかへる物思の花
 冬 厭 戀 まきまわれバ二人ふままも寒き夜といふにねよとか隔てそめけむ
 題 玄 ら せ 雨ふれば底に沈める浮ぬなはうきなまつまの戀もまるかな
 ふたつなき命をかくる偽もなき世ならねばうたがはれつゝ
 疑此こゝろのひまぞなかりける我身ひとつの數ならぬより
 後の世によも人ごとの繁からむたゆとな佐そまばしまて君
 ぬれんどの思ひしことよ人言の玄げさぐ下に木隠れしより
 津國のながらへてとも契りし絶ゆるはしにて有ける物を
 袖の上の人此涙のこぼるゝのわがなくより悲しかりけり
 菖蒲ぐさひくや五月のたまさかにきてのなきける時鳥かな
 瀧の上の玄め野にさけるみぞ萩の其みそか言いつか忘れむ

あづまにありける年此秋たよりにつけて人の許へつかはしける
 曉のをし此一聲なきわかれかへるたもとに玄もどあやれる
 かへし 夕暮の露もむせべる玉づさをなきてつたへよ天つかりがね
 露よりも雨と玄ぐれてふる里の涙のかなしかりとなきつる
 よみ人玄らせ

雑歌 上

朝 思ふこと寢覺の空につきぬらむあしたむあしき我こゝろ哉
 題 玄 ら せ 燈の影のそむけてねたれどもさやかにのみぞ夢に見えける
 限なくかなしきも此の燈のきえて此のち此寐ぞめなりけり
 つくづく物思ふ老の曉にねざめぬくれしとりのこゑかな
 海 海 ばら此沖の高くも見ゆるかな幾重積りし水あかあるらむ
 磯 浪 いそ崎の松此幾世かなれぬらむさてしもあらし波の音かな
 題 玄 ら せ 玉くしげふたみの浦のあけあけり打出る浪の敷見ゆるまで
 海 邊 眺望 あしや漏みる拾ふ子にこそ空はん眉ひきたるや紀路の遠山

古渡雲 夕されば水底をみて澤田河くも此かげのみたちわたる見ゆ
 船 松浦船いたでになりぬ大島のせと此たか汐いまかおつらむ
 舟行夜已深 汐時の風此こゝろをどる楫にはやくもあたる浪のおどかな
 湖上船 堀江川あかつき汐やさしくらむ棹の音ふかくなりまさる哉
 男をんな舟にのりて遊ぶ 俛れたが朝妻のふなやかたむかし此うかぶなみのうへかな

我せこが棹とる池の島めぐりぬらまをづくも嬉しかりけり
 大空のてる日此影もおよばねば解けたる世なき富士の雪哉
 峯 玄ながどり猪名山松にこちふけば遙にさわぐおやの池みづ
 池 賤の男がうつや荒田のあらためて作るおの非老かへま道也
 田 朝なく出る明日香此市人の昨日をけふにかふるなりけり
 市 さゝなみの大津此宮のあれしより榮ゆるも此のみをの柚山
 柳 いかばかり深き心此おくなれば山かげよりも静けかるらむ
 閑居 空蟬の世に木がくれてすむ宿の心にゆめいならはざりけり
 閑居夢 我山かけを離れてまばら観鷺亭に移りまみける頃よめる

山よりも深き心のありがほに市のなかあもかくれけるかな
 山家 山深くながめくくて雲水のゆくへあだなる世といえりにき
 題 何ゆゑに山おのまむと人とはいこたへむまでの心ともがな
 中々にのがれもはてますむ山の深きこゝろを去る人ぞなき
 山家 くるゝより松にふきたつ我山此嵐のまゑをたれかさくらむ
 山家 水 うき世をばきみ離れても山の井此みづから濁る心をぞ去る
 山家 秋 山賤となりける身の心ありてなぞ秋かせにも思ふらむ
 山家 鳥 我庵のあまりに山のおくなれば鳥の聲さへめづらしきかな
 山家人稀 我宿の垣根がくれのつゝらをりくる人あらばまつ人にせむ
 たま〜い人もあけつる奥山の杉此戸ぼそい苦むしにけり
 山家客來 わびぬれば言傳だにも嬉しきに山松の戸をきみぞあけたる
 物此音のたえを聞ゆるをさして

やま里をさびしきものと思ひし君が世去らぬ心なりけり
 古 住吉のさし此姫松なみよせ老なりにし後もいく世へぬらむ
 松色映水 大堰井ふちの緑やうつるらむふかくも見ゆる松のいろかな

人の賀に松添榮色といふころを

榮えゆく君がやどにしうゑさらば松もなべての緑ならまし
對松爭齡 子日まゐる千代のためしに君の松松の君をやひかむとまらむ
三寶院此御別業省耕亭の十二景此和歌仰によりて奉りける中に彈琴邱松といふありて
そのかみ重衡の中將をうしなひ參らせし最後の時琴ひき給ひし所なりといひ傳ふるを

松風も夕べにせまる聲まなり玉の緒よりやまらべそめけむ
伊勢なる本居宣長都にありけるほど嵯峨山松といふことを詠ませけるによみて遣しける

嵯峨山の松も君にしとはれまば誰に語らん千世のふるまど
播磨此別府なる手枕の松此かたに

萬代のゆめなりけりと手枕の松もれいてやかみひまゐるらむ
東六條の東殿なる涉成園此十三勝の和歌よみて奉りしその中に五松塙といへるを

五本のいつさだめたる陰なれば千世さへ松此變らざるらむ
河原のたどりの姫君生れさせ給ひて御行始に神樂岡なる春日此御祖の大神に詣でさせ給
ひけるついで我東塙亭に御こしいらせ給ひけるがいたくむつがらせ給へるに詠みて奉る
松の上にはじめてまたつ雜鶴の千代の聲あそ高きまゆれ

鶴

數へてもまゐるらむものう芦鶴の久しと思ふや千歳なるらむ
芦鶴のふめる眞砂此跡をみて千代といふ文字の造り初けむ

鶴ひなをつれたる

雞

千世此上に千世をゆづるの聲すなり子を思ふ心限なきかな
けふもはや申のさがりになりぬらむとくらにのぼる雞此聲
どもまればふせ籠にこもる雞のせぼくも世をば思ひける哉
大空にとびたちかねて打羽ぶきかけるとなくが哀なりけり

はなち鳥

つら籠をあけてやりつる放鳥わが遁れしと思はざらなむ
打なびく窓のともし火くれ竹の音せぬ風をいかにまゐるらむ
月見むとあけたる窓の灯此きゆるあゝるのこゝろありけり

窓 燈

よど共に物思ふ園のともしびのまめるを雨に習はざりけり

雨 中 燈 不 知

燈のかけあて見ると思ふまに文のうへ白く夜の明けあけり
草枕たびのそらこそかなしけれ野も山もまゐる人のなし
つれもなき草此枕にねざめしていく有明のつきを見つらむ

旅 旅 行 曉

つれもなき草此枕にねざめしていく有明のつきを見つらむ
朝 たいよへる朝の雲のふる里へかへりし夢此ゆくへなりけり

旅宿松風 岩がねのなれぬ枕もあるものをいたはり去らぬ峯の松かぜ
月前旅情 とけてねぬわが傍も見えなきむ都此かたのありわけ此つき
むげに若き時物ならひに都へのぼらむとて恐びに故郷を出て下此渡といふにかゝりける
に雪解の水いと高くあふれて舟もくつがへるべけれ河の遠近に綱ひき渡してそれを手
ぐりもて岸につくなりけり

猶ゆき〜ていと心細きに友のもとへかいつけやる
いくうき瀬渡らむ末のわやふさもかけてぞ思ふけふの川波

かくばかり戀しきものか相思ふ中の離れて去るべかりけり
題まらき 月をまつ旅ねの床此さゝの葉に嵐ふくなりさらしなのさと
駿河守昌敷が越の國へ旅だちけるせんしける時によめる

たはやまぐやがてといへど白山のゆきての歸る程もこそふれ
兒山紀成がいまだ公もつかうまつらざりしそのかみまばらく都に遊びて伊勢の故郷へ
歸りける時蹴上の里まで送りてよめる

夏山の下はふつゝらわかるゝがくるしき迄いつ馴にけむ
垂雲軒夢宅が信濃なる伊奈の故郷へかへるを送りて

玉の緒の長く短うき世なりけり又あはざらむ又やあふらむ
師走の末つかた越後國寺泊なる圓雅法師都をたちて近江國まで下りて故郷へかへらん
年あえんもはかりがさしといふに

同じくの都へかへれかへる山雪ふのみちもあらじぞぞ思ふ
池田基永妻の桂舟と共にまばらく故郷へ歸るべき事出さぬとて暇申に來たる時によめる

君がゆく伊豫の松山としふともいよくまたん伊豫の松山
内山眉生萩原貞起わが塾をいでて信濃國へ歸りけるが再上り來て學ばむ事をのみいふに

信濃路の木曾此かけ橋かけたれどあやふき物の契なりけり
述 懐 かくばかり愁なき世を歡びのあるべきものとおもひける哉
いづくかの思の家にあらざらむよそめ樂しき世にこそありけれ
夜 述 懐 明ぬればかならき覺る物にしてぬる宵々ぞはかなかりける
獨 述 懐 はかなくて木も草もいはれぬ心その思かりなり
懐 舊 懐 めのまへに昔々となりゆきて今なき世おそかなしかりけれ
懐 舊 涙 憂をへてよりける年の緒をよわみ亂るゝたまの涙ありなり
寄夢懐舊 老ぬればいと昔の見ゆるかな若さの夢のおゝるなりけり

性事渺茫都似夢

思ひいつる事も残らば夢なればさめしどもなき我ねぞめ哉
 無 常 荒いその岩うつ波による貝のからのまばしきとまりける哉
 なきを夢あるを現とおもひけりなほ世中をよのなかにして
 寄風無常 消らんもどまるも露のまばらくを何秋風のさそひわくらむ
 寄雲無常 引めぐるうき世の雲此村時雨つひにぬれぬ人なかりけり
 題まらき まづゆくを慕ひくゝて終に皆とまらぬ世を悲しかりけれ
 崇徳天皇の六百回御忌に

松山になみこえざらば濱千鳥かへりてあとの残らざらまし
 八條相國六百五十回の御わざ行はせ給ふに秋夢といふことを給はりて詠みて奉りける
 遠けれ昔にいたる夢もなしさばかりながき秋の夜なれど
 五月三日なりけん新皇嘉門院御はうふりの夜あけて雨いみじう降りければよめる
 久方の雲此上なるなみだこそさみだれ初るはじめなりけれ
 拙菴せじに人まれば契りおける事ありて年頃経たる後世になき便の聞えければ驚きてよ
 める よしやわれ聞きえたりとも山彦の空しき聲を誰にこたへむ

小澤蘆菴身まうりし時よみてつかはしける

親しきいななきがあまねに成ぬれどをしどの君を思ひける哉
 めのおもひに籠りける頃武者小路左中將の君より竹といふ酒にそへておくり給へりし
 數ならぬいさゝ村竹うきふしのよを慰むるつまとだになれ
 御かへし 慰めて君よりくれの竹なればまづなみだあゝ染じどぞ思ふ
 をさなき子を失ひける時

れひしきて取かへまべき物ならばよもつひら坂道のなくとも
 同じ頃白朮の花を人のおくりたるに

世中をうけらの花此開かきて凋むとならば咲かばやのあらぬ
 誠拙せじの初月忌に歌あまたよみて手むけける中に

何ぞこの形見がほおも空しくてとまらぬ物を残しかきけむ
 或人いまくとなりておこれに歌一つと乞ひたてしたるに讀みて遣しけるこの歌を額に
 あてながらやがて空しくなりけるとなむ

長月の末のつゆどの思へどもそのおきどころ花のうへなり
 昌敷が病せまりて後加級の宣下からぶりし事を其子相模守嘉之がもとより申しおこした

りける時よめる

見えなる影ぞ悲しき位山のぼるときくうれしけれども
大路にまてたる子

かちたるも拾はぬ御世を命めてまてにしれやの心なるらむ
何がしのせじより狗子此かたに替へひたる

ゑのころの何れ心もなかりけりなふの心かありとたづねむ
猩々の舞圖 よく諷ひよくまふ見れば思ふ事世になきのみや人に似ざらむ
猿藤のかつらをやぢたる

ひきとめてとまる春とや思ふらんげに人よりの愚なりけり
琵琶法師 かのが見ぬ花はどゞぎき月雪を四の緒おこそ引うつしられ
越後獅子 み越路の雪ふかみぐさ花にきてたはるゝ様のおはれなる哉
尉と姥の圖 相生の松にかく霜神さびて千世の流がたどあらはれおけり
白藏主杖をつらにつきてゐる

歸らんや今はいかにせむ此岡に枕もまべく夜はふけおたり
末廣といへる猿樂の圖

樂しさを我もうたはん春日やま笠とさしたる天の志たかけ
同じく鞆猿 やどいひしあらしの眞弓ひきはなれ今の鞆此うつゝなき様
同じく千鳥 濱千鳥おのがちりくゝ鳴棄てゝあそこそ見えぬ沖つゑら浪
遊女の物おもひたる

かしなべて誠なしといふ濡衣の袖ばかりだにほす人もがな
若さをとめの泥孩兒をいだきて雪此中をあゆむ圖

かさならぬ年の内より若草此妻めくものこゝろなりけり
秋の野原に女の鬨體を見て處女のにさる圖

かへり見よこれも昔はな薄まねきし袖此なごりなりたり
竹に雀のやどり靡きたる

まなよくもどまりける哉なよ竹のよに諷ふなる一ふしや是
蝶ふたつ空にとぶ圖

花の上に君が放ちし蝶もなほ天ああらばどちざりおきけむ
安倍仲磨を明州の海邊ふて餓したる

よるゆけど月の光し清ければあらはれわたる唐にしきかな

濱主が和風長壽樂まふ圖

八百日ゆく其濱ぬしの老の波わかきにかへままひの袖かな
陵王まふ圖 四方此海さわぞし波の立かへりをさまる時此聲となりあき
紀 氏 打わたす紀の遠山此なかりせば明石の浦もむなしからまし
芳野川の岸にたちて山吹見給へる圖

流れていいと影こそ匂ひけれ紀の川上此やまぶきのはな
渡邊の網そ此姨と物かたらふ圖

謀るに手もなき物と思ふらむとりかへされぬ報ある世を
西行上人猫の香爐もて座したる

中なかに心もどめぬそらだきのかをりや富士此煙なるらむ
芭蕉翁 ふりにける池の心へまらねども今もきこゆる水のおどかな
うつばの俊蔭此巻なる北山ごもり此圖

久方の月此桂の木此實もやとりもてくらむそふひかりのな
常盤御前子どもをつれて吹雪にあへる
かきくらす雪に伏見の吳竹此下をれたるやみさをなるらむ

湯谷ふみ見たる

古里此花のたよりのかけたれどかへり煩らふ春のかりがね
王昭君 よつの緒此半の月もかきくらし涙まぐるみち此そらかな
李夫人 中々につひの煙此まゝならば二たび世あつてがれざらまし
李夫人去漢皇情

あくがるゝ心のうちの煙もまづ面かげのたちかへりけむ
老萊子 子の爲み親此をさなくなれるまら悲しき物を悲しからせや
韓信が市人の股くぐる圖

かりそめ此市のつま屋の忍草うるたねなりとまゐる人ぞなき
東方朔三つの桃をぬきみ去る圖

萬代いたもどに包みえたれどもかくれぬ物の愛名なりけり
關雲長 桃園にちぎり一たび結ぶ身のかちぬ其名のよろづ代まで
王質 斧の柄のくたして歸る山路もまゑる人えたり白ぎくのはな
虎溪の三笑 もろこしの吉野此夢の浮はしか現ともなくかけはなれけむ
李白が酔さまたれし圖

水底にまづめる月の影みれば猶おほぞらのものにざりける
三寶院の御門主より許由が瓢を梢おかけて顧みたるかたをよませ給ふに

ぬらさじとくれし是すら煩はしうけらるべしや雨のまたり
また蘇武が雁の足に文ゆひつくる

そらごどを只かりがねの玉章も君がまこととなりける哉
また淵明が琴ひく

世中におはぬ調のさもあらばわれ心おかよふ峯のまつかせ
面壁の達磨 あまりふもそむきくして世中の月と花とにまたむかひけり
布袋の後むきたる

なしといひありと諷ひて世中此むかたおのみやる心かな
ゆくゆくかへりみきたる

霄の間に入りぬる影をかへりまてまつ程とほし有明のやま
月を指さしたる

あけゆかん其曉をまちわびて月のみやこをさまひとやたれ
寶頭 盧 身をつみて佛の心まられけり撫づるいさおそ嬉しかるらめ

寒山拾得 あひにわひし一つ心に比ぶれば似たるばかりの秋の夜の月
丹霞佛像をやく

観子蝦をまきひてくふ
御佛もはのはをいでよ此世からうしの車のわれみちびかむ

雪みだにくるふ跡なしかりたちてまきくふも空のきりか霞か
野寺僧歸 愛宕山まきみぐはらにくらしけむ嵯峨野をわくる墨染の袖
野寺隠喬木 中々にたちかくしたる一むらの松ぞ野寺のまるべなりける
臺頭有酒 いざくまむ其かのもたひもて來なむ臺の上に月のぼりぬ

雑歌下

正月一日紀きの守豊原の文秋きたりて笙吹きなどし遊びけるによめる

ためしなく治れる世をくれ竹のみをはむ鳥の聲にたつらむ
いかにして吹傳へけむ古へのあしがらやまのみねの松かせ

む月三日なりけん雪いたうふりける朝清岡式部の大輔の君に従ひて比叡の麓なる詩仙堂
をどぶらふ柴の戸おし明くる程に初音たかくさあえたるのかの鶯宿梅のわたりふやなど

宣ふによみ侍りける

梅の花さかばといひし我よりも先にどひけるうぐひまの聲
折りたる梅を わはれおも咲きこそ句へ梅花をられたりともまらせやあるらむ
登壽院法印了敬がもとより若菜一籠いとおかしげなるを送りたるこのやんどなき御わ
たりに堺なる或人の昔より奉りなれたるを此春おなじかたにまつらひておこせたるどか
いつの頃より奉り初めしそも今のまられせと聞きてよみて遣しける

摘初めしはじめなれば行末も遠里を野のわか菜なるらむ
せんま萬歳 石上ふるさついみひ苦むしぬされどもひいくよろづ世の聲
三 毬 打 吳竹のさはるふしなき世なりけり煙に聲いたてせどもよし
二月のはじめ八坂にて京を見やりてよめる

織りかけし都の錦おをやぎのたての糸のみ見えわたるかな
稻 荷 詣 いなり坂杉の青葉をかざきこそまだ花さかぬまゐるし也けれ
温 樂 會 世中の花のおそびにくたびれて一ねいりせる君が手まくら
西行上人の影供に春月言志といふことを

後の世のねがひもさぞなみちぬらむ花にかくれし望月の影

春 釋 教 春されば雪のみ山になく鳥の聲ものどかになりやまぬらむ
或人の追善の題に幻世春來夢

かの國の花にやどりて思ふらむこの世の蝶の春の夜のゆめ
うかりし事ありて籠りをりける春望南亭自体が庭の花や盛なりとていつの日かならせ
なごいひ契りたるに其日しも終日雨ふりければ詠みておこしたる

花の上に雨のふりこぬ里あらば所かへてもきみをまたまし
か へ し せぐとはいづくの里かふらざらむ涙の雨とまらぬ君かな
世繼直員が家に藤の宴きたりける日えまからで詠みて遣はしける

我宿にもものうげにふる春雨のねたくも花のまづくなるらし
四月七日なりけん年頃我塾にありける篠澤隆壽粟津の松原にしておのが本意とげたりし
時其事とりくくに傳へていまだ都にさだかならざりければやんどなき御わたりよりも
其虚實いかにくんと尋ねとはせ給ふことまばくなりければ詠み侍りける

時鳥とさしまちいでて名のりつる聲雲井まできこえけるかな
くらべ馬を 神山のやまびことよむ聲まなり宮人いまやこまくらぶらし
馬くらべ追ひまがひてぞ過にける月日のゆくも斯こそ有けれ

糺のまゝみにまかりけるに思ふことわりて

人の世の浪の浮藻にさく花のたゞよふ程ぞさかりなりける
六月の末やみ衰へて夜たゞねられぬに

ともし火にきえを争ふ夏虫の影ともわれりなりけるかな
水無月の有明づく夜つくぐと思へばをしき此世なりけり
初秋 薄露かかばいかにせんとか花薄たもとせばくもたちし秋かな
月の前に月草たてるかた

よひく月に月をうつしの色ならば心やそめむ秋のかたみに
東の方に遊びける頃雁来といふことを

はるくどかけて來ふける初雁の翅のふみをまゑる人もなし
こゝちたのみなく覺えける頃松虫のなくをきゝて

聲をのみ友ときゝつる松虫の身のゆくへもたゞふ秋かな
葉月の始なりけん娘孝子を伯耆守寛寧がもとに遣したりける歡をどて人々つどひて其夜
もまがら舞かなでなど打さわぎける中にひとりひそかにうたへる

うれしさを包みかねたる袂より悲しき露のなごこぼるらむ

葉月十六日の夜なりけむ頼襄が三本木の水樓につどひて語らひ更かしてよめる

まむ月に水の心もかよふらし高くなりゆくなみのおどかな
白雲にわが山陰のうづもれぬかへるさおくれ秋の夜のつき
白河の紅葉をしみにまかりし時

いなごどぶ淺茅が下をゆく水の音おもしろしこゝに暮さむ
青葉おてうつらぬ枝や中々に松のまづくのそめしあるらむ
三條前の内のおほいまうちぎみ右大將におはしける時紅葉の大枝に眞鴨一つがひつけて
是が御歌をさへ加へ下されし御かへし

染のこま枝かど見れば水鳥の鳴のあを羽のまじるなりけり
題 不知 北山のくらま嵐の吹こしにくもらぬさともかつまぐれつゝ
十月のまゑ母君の四十九日に五戒のうた手向奉りける中お不飲酒戒のこゝろを

雫だにまづ心せよさかつきの浮ぶながれも淵とやならぬ
不偷盜戒 色をたうばひて咲ける卯花も世にまら浪の名こそ立けれ
一月樓にまみける時に
めづらしく降れる河原の初雪をいつも晒せる布かどぞ見し

ひびがし山を望みて

はれなんとする山の端の白雪の霞める花のこゝちこそすれ
雪のふりける朝蘆薈がもとへ事のついでに咲きあへぬ梅の枝を遣はすとて

花どのみけさふる雪の欺きてまだしき梅を折らせつるかな
其つかひ其梅もてゆくを忘れたりければかれよりかへし

梅が枝を今たづぬるに見えざるの折りても雪や降隠しけむ
やごとなき御わたりより五色の和歌を四季雜にわかちてよみて奉るべう仰せられしに

青 わが袖の緑をさへにひくものい小松が原のかきみなりけり
黄 口なしの花こきくさしふる雨に園生のうめも色づきにけむ

赤 うら枯の浅茅が上をふきわたり夕日になびく秋のかぜかな
白 初雪のふれる高ねにのこらずば今朝もみざらむ有明のつき

黒 黒木たて鶴羽ふきけん古へも子を思ふ闇のかはらざりけり
神 神のなほ神代ながらの天の戸を押開きてぞみそなはせらむ

祇 世中の人のすなほになりしより神も荒ぶるわざなかりけり
おろかおも御代豊ふといのるかなもとより神の願なりけり

三 輪 杉ばかりたてる山邊を吹く風のめにこそ見えぬ神のますらむ

題 志らす 神垣のみたらし河のまら浪のさしれにかゝる音のさやけさ
寄 神 祝 せべらぎの現つ神なり秋津島動くべき世のあらむと思ふな

寄 日 祝 天地のいづれの神かうけざらん御代やまかれといのる願を
寄 月 祝 岩戸あけて天照を日の本つ世を仰がぬ國のあらばこそあらめ

寄 水 祝 大君の萬代までのかざしにと月のかつらのかげのさまらむ
寄 都 祝 大宮をめぐるみかはの水なれば月日の影もよどむべらなり

寄 松 祝 長岡の名をさへこゝにうつしけむ千年になりぬいまの都の
萬世も平安とさだめかきつらむこの都こそおほみやどころ

題 志らす 種しあれば岩ねの松も生かはり君が八千代に逢んとせらむ
高砂の松のわらしもきこえけり君が千年のかげのどけき

寄 竹 祝 陸奥の末にありといふ松山のまつほど遠しきみが千とせの
吳竹のふかきみどりにかく霜のさやかに見ゆる君が千世哉

寄 花 祝 百敷の大うち山のさくら花いまこそ御代のさかりなりけれ
寄 道 祝 奥えぞの果まで靡く君が代にひらけぬ道のあらじと思ふ

雜體

長歌

江戸にありける頃四月なかば原庭なる葵園につどひて歌よみける日し
も終日雨ふりければいへる

春雨にかくれし雨か、五月雨にさきだつ雨か、春雨にかくれし雨ぞ、去かれこ
そ鶯なけれ、五月雨にさきだつ雨に、おらねばぞ初時鳥忍び音もせぬ、

猪名の里なる壽性尼より淡海の濱づとなりとて螢あまたうせもの、籠
にいれて贈りける時よみて遣はしける

潮みてバ玉藻どうかび、沙干れば真砂にたちて、時つ風吹のまに、沖つ浪
立のさわぎに、なづさはり拾へるならぬ、大君の膳所の濱の磯の上にこゝし
みたてる、石山の石の中にし、籠りけん其璞を、伊加賀崎いかゝ打いでて、夜光
る貴の真玉と、綿津見の海人のえわざに、なりえけらしも、

つどへたる八十の螢の七車てらまたまにも去かざらめや

蘇子が後の赤壁のあそびのかたに

十月まぐる、時の天雲のいかに、はれてか、山高く、月澄のぼり、水落ちて岩根
あらはれ、寒き江に一葉どうけて、くむ酒のたゆたふ影に、三年へしきのふぞ
うつる、其秋のこちくの調、其ふしを訴ふる如き、木枯れ聲ふきまさむ、大虚に
むれたるならぬ、芦鶴の近くとび渡り、ふくる夜をなく音も長し、浦浪のうへ、
いかに、かも鶴のけ衣かへしけんむかしのゆめの今もみえつ、

旋頭歌

五月の末なりけん津國なる伊丹の里にありていたき病にかゝりていと心細くおぼえける
時駿河守まげのぶ都より下りきてさゝもあへず何のおきてなごいへるをいとかたじけな
み侍りてよめる

あらはれて 見ゆる夏野の 一もとまゝさ

おほかたの はにいづるとき はにやいづらむ

木槿の花を見て

いけがきの 小杉がなかの 槿のはな

是のみを むかしひいひし あさがほのはな
大嘗會おこなはれける其夜おとにのどかなりければよみ侍りける

おほきみの 大なめまつり きこしめき夜と
霜ゆきひ はいかる空に 月ぞてりたる

至日に着袴いはひける人のもとにて

たらちねの 末ゆたかおと たゝせるはかま

日もながく ならんはじめの 今日きをめけむ

信濃國松本なる小林爲邦くましの業まなびをへて故郷へ歸らんとせる馬のはなむけにお
のれひどうして白菊と名づけし硯を贈りけるに詠みて加へたる

露ながら かるゝ世えらぬ たらぎくの花

これもその 老老まなのゝ いへづとにせよ

俳諧歌

社頭の春といふことをよめる

石上ふるのやしるにひくまめのまた新らしき春のきにけり

いへの會始に家梅始開といふ心を

道もなきわが庵なれどうぐひまのふみ開きたる梅のはつ花
御忌の頃京を思ひやりて

題えらざ 吉水の大鐘のこゑひくくなり山のこゝろもうごくばかりに
氷とけし池のおもてに小車のあやかりみだり春さめぞふる

さいすなく山路の暮にほろくどふり出おける春の雨かな
賤がうつ荒田の原をたつ見れば雁をもすきてかへす也けう
とりとめしおのが心の荒駒も春の野はらにはなれけるはや
花見んどけふ打むれてのる駒もおぼぞらの青はるの日の影
菜花に蝶もたはれてねぶるらん猫間のさとの春のゆふぐれ
紙屋川おぼろ月夜のうまきみにまきかへしたる浪の色かな
世中におぼろ月夜をかざしにて花のまがたになりける哉
山里に水こひどりのなく聲もさびしからぬの苗えろのころ
莖おのまけて見ゆれどままひ草とりまてがたき花の色かな
花ちりて春よりなつにとぶ蝶の羽袖もえろし木がくれの里

みこしぢの雪にさらし比なつ衣かへたるけさの袂さむしも
 うの花の垣根にはりし竹の子の雪の中のをえたるなりけり
 道のべにとりて捨たる若苗のあまり豊けき世にこそ有けれ
 さよふけて流るゝ星の影のうちにはせせでどぶの螢なりけり
 落したる誰が種ならん山里のかきねがくれのなでしこの花
 蓮葉のうへのを誰か恐ばせのいける世ながら樂しからせや
 ゆきなづむ駒のわさりの夕顔の花のあるじよやどりかせ山
 山賤もうまさひるねの時ならし瓜はむららすおふ人もなし
 閨の戸をそたくく水雞人まねのたはわざ憎し夏のよなく
 五月雨にぬれくきけり時鳥われもなきつる心地おそまれ
 時鳥なれも矢矯の市にいでてくつてどのみもなきわたる哉
 まぐるくの市場のいかに騒げどかふりこぼしける夕立の雨
 夕立のそらふみさきし鳴神のなごりともなき月のかげかな
 まいみにと誰をさそはむ獨だにみるほどもなき夏の夜の月
 てる月に夏をわされし木間よりおどろかしける蟬の一こゑ

江戸にありける年あまた鳴さつる蟬の聲あるあしたふつに聞えせなりければよめる
 いたづらに今年もなかばめぐる輪のぬけん方なき身の齡哉

歌むまびまらる時草花早といふことを

此世をばつくぐらうしと鳴捨て又いか様に身をば變へけむ

世中にくちさが野なる女郎花あきにあへりと人にまらるな
 蘭の枝を 藤袴をりめ亂れて見ゆるかな誰こゝろなく手をば觸れけむ
 題まらま さしこめてまだ夜を殘き柴の戸をれそしとひらく朝顔の花

姑につまれしよめ菜あそれその時をきてこそ花さきにけれ
 花見ればとびたつ小野のいなをまらる人の子にこそ變らざりけれ
 はさおりめ梢かりこむ木ばさみの音に終日まじりてぞなく
 おなかましかまのまりの来つる我を見てこぼれかゝれる庭のまら露
 故郷にたま〜來つる月のかげ見ればわれさへいまぞ顯れおける
 山のはに出くる月のかげ見ればわれさへいまぞ顯れおける
 大空のおはかた雲にやどられて所せげなるつきのかげかな
 とびこゆる雁の翅やかけつらむたなびき切れし峯の横ぐも

秋風のまらべて拂ふ松の葉のおちたる見れば琴柱なりけり
箱根山せきもる人も朝ぎりのわたくし雨にあざむかれつゝ
誰とたが打かはせらん夜もまがら砧の聲のかたふるしなる
闇ながらはれたるそらのむら時雨星のふるかと疑はれつゝ
よもまがら玉の聲どもさゆるかな月ふきまさむ木枯のかせ
叩きつる氷の下にくだけりんわれても見ゆる月のかげかな
朝どほりどくるをまちて動くかな老のみわたの魚ならねども
冬がれの梢の雪のはつ花のちりそめてこそさきそめにけれ

一月樓にありしと雪を

鴨川にさらしくて青柳のいとさへまろくなりけるかな
吳竹の隣へかへるこゑまなり日かげに雪やどけわたるらむ
琴ならぬ桐の火桶のこゑもなし吹きだにおこせ夜半の松風
いたづらにふりゆく人を行く年のかへりて惜き物と見るらむ
我齡むかしのかきにかへらめや此いり豆にはなれさくとも
思ふとい思ふ人もまられじと思ふたれを思ふなるらむ

題まらせ

早くより心あへりと思ひしうたてまなはち戀にざりける
よき人をよしとよく見し夕べより吉野のはなの面影にたつ
山の端にくるれば見ゆる三日月のあなまらしくしひどの僞
久かたの天の岩戸のかくれても細目にみまはしき君かな
我戀の祈る神さへき、馴れて久しきものどまてかおくらむ
春がまみ絶間になびく青柳のめより色あはらはれおけり
むつ言を霞やたちてき、つらむ野あも山あもかくれなき戀
思ふ事ありのあなうと歎くまに崩れおけりな人めつゝみ
あふ事のかたき中おの楠の木枕もいしとなりぬべらなり
あらがぬの心も戀にわきかへりあつき涙とこぼれけるかな
小貝もる濱つゝら籠にゐる砂の下にはらく音のなうれつゝ
吾妹子がむねに結べるまへ帯のとけま物をおもひ顔なる
花つむと折かへしたる振袖にたまる人のこゝろなりけり
打どけて人とぬるゝねぬなはのねたしや世をばまら老顔也
なやにゐてこがひまゐる子のつま撰み田もやうあせもやるといふ物を

少女らが末きりはたり織る機の玄ねとやせめてつれなかるらむ
おほかみの兒の懐にいれぬとも思ひかけじといひし人づま
吹きたてゝ君がこちくの笛の音に枕の塵をたゞよひにける
こえがたき忍び返しのうちら釘のうちうらまても立歸れとや
生田川とりだに射ても見まへきをいまの弓ひく手力もなし
いなどいひてせに變りしも早川のまみ果しどの思ひつる事
こん世まであさむかれても遺葉の露を玉どの河たのみけむ

黒木うるかたに

めせやめせ夕けの妻木はやくめせ歸るさどほし大原のさど
三鳥江におふる眞菅を鴛ごりの笠おもぬはでかづくなる哉
心ふの何をいかるかまらねどもさへづる聲のおもしろげなる
ゑのころの早もあるじを見まりけり呼べ尾ぶりの嬉し顔なる
猫の子の鼠とるまでなりにけり何にくらせし月日あるらむ
人疎む門ふの市もなさいりき世をあきものといつなりにけむ
世中をいかに杉戸のふし多みあなともあなと歎くころかな

題まらき

わづらはしいさ世中に隠れ笠きつゝやへなむ雨ふらきとも
かけきてし鏡の面に影ふれてたそやと我をおどろかれぬる
いと若き時なりけん國を離れて五條わたりの伏屋に隠れまみて物學してありけるを聞き
つけて故里なる友のもとよりさてあるべきか早く歸りきてなごいひこしける時よめる

題 不知

わびて世にふるやの軒此繩まだれ朽果るまでかゝるべしやの
大堰川となせの上にあらはれて泥ふのひかぬ龜の尾此やま
高宮のまつばらごしに見わたせばまきさびたひなる冠のやま
月と日をふたみになして玉櫛笥わけゆく浦の名おこそありけれ
津國鮎川なる厭求法師在世の時鳥の聲をきゝて悟道のことありけりとて今年その百回忌
の追善に鳥といふ題を出してある人歌まゝめけるによみて遣しける

鮎川の井ぐひの鴉うにもあらまむにもあらまむと鳴やしつらむ



桂園一枝終

嚮に桂園一枝世にあらはれし頃師の大人くいなげきてのたまへらく今十年ばかりの齡をえてよみ試みたらましかばと其十年に五とせ六年をさへ加へ給ひしみ齡のほどあはれまことの限をつくし給ひし言葉や寛平延喜の上にて陽春白雪なほ低しと仰ぎて常に侍らふ輩いかでうかひもらさじとて年月にかいとめて若干此冊子となし侍りしを事のついで師此見給ひて猥に世に洩ぬべうか不つかなみ給ひけむ大かたの捨やり給ひてやや二巻ばかり後集のやうにも此し給ふといへどもまだおほやけにせんのみ心まらひあゝあらざりけらしさて身まゐり給ひし後の二なき形見とえまくほりする友どちはた世に廣くとり傳へまほしうながせるも多加めるをたいおこたりにかこちて今年七とせの秋までねんじ侍りし例のみ心をはかりかねてなりけり抑いにし年此春かしこき神宣を蒙らせ給ひて桂園靈神としもいつき奉れるあまりに今のかの光を和らげ塵を同じう玄たまはんぞる方よりねほらかにみそなはしめ許し給はざらんやとて師の嗣なる景恒うしに申しとき侍るにげにやかねてよりさこそあらまほしう思ひとりしをいでまからんあゝさきの集にもらせるも残り惜からずし

もあらねばそも其二巻の中に加へてんやときこゆるに早くよりのをも聊
ひろひ添へて假に桂園一枝拾遺と外題して平忠兄源真法橋如一等に謀り
て古昔庵好齋が書き清めしをやがて梓にのぼせ侍りし斯くておのが願を
かなへしむる物から猶おほけなきまわざなるをいかいせん希くハ靈神
のみたまちはひてお此真精きまらべの千歳の後に傳はれらば誰かハ歌の
うたふるさまをもまらざらめやハあなかしこ

嘉永二年七月八日

平 忠 秋謹誌

桂園一枝拾遺

香川景樹

春 歌

雪中立春 生駒山雪けのくもいまよへども春とさだめてたつかきみ哉
大嘗會かこなはれけるまた此年の春松含春色といふことをよめる

春風春水一時來

春きぬと氷をたたく山風にうちいでて浪のこたへけるかな
春生人意中 のどかなる人の心をまるべにて春もや空にたちうへるらむ
初 春 鶯 あけぬからなく鶯のあら玉の年よりさきにふちかへりけむ
雪の中になきし鶯うちどけて花にさへづるはるのきにけり
初 春 梅 あら玉の年ハ初風ふきしより己が春なりとにほふうめかな
早 春 河 水上ハ高根よりたつ春ならし雪げみなぎる富士かはのなみ
早 春 水 いつのまに雪も氷もとけぬらん緑になりぬまらかはのみづ

子 日 年々にひくてあまたの小松原千代の盡せぬものにざりける
 社頭 子日 みづ垣の久しきかげに引うゑて小松ながらも神さびにけり
 名所 子日 かざりなき玉の緒山の小松原ひくてもたゆき千代の陰かな
 子 日 興 姫小松ひくや子日此をぐるまに若菜をさへもつきてける哉
 寄子 日祝 初春此はつねのけふになりぬ也いざ松うゑて千代の影みん
 霞 契りけんたゝばたゝんど大空の春にかくれぬ朝がまみかな
 霞 添春光 野も山も霞をこめたる大ぞらにあらはれわたる春のいろ哉
 松 上 霞 山此はの松の霞にたちなれて我ふのうとくなりにけるうさ
 霞 中閑居 二木ども松のわかれを武隈のはなわにたてる朝がまみかな
 濱 霞 眞熊野のうら此濱ゆふうら若みまだ一重なる春がまみかな
 島 霞 たえくくに沖こぐ舟の管が島おほふの春のかまみなりけり
 連峯 朝霞 奥深くかさなる峯の中々にかまむあしたぞたちわかれける
 霞 隔山 富士の山はるの霞にうづもれて煙もゆきもまたにきゆらむ
 霞 隔浦 あさなぎに綱引やまらむ菅浦のかまみをつゝふ蟹のよび聲

霞 隔村 けぶりさへ遠き霞になりにけり何かの臘がまのうら
 霞 夕霞ふかくたてりのむら鳥さわぐあたりやこぞゑなるらむ
 霞 いかばかりのどけかれバか鶯のなく一こゑに春此たつらむ
 朝 霞 かざりなき春のねぶりもさめにけりあしたのどけき鶯の聲
 野 外朝霞 朝戸出の袂のいまだ寒けれど野のうち霞みうぐひまぞなく
 柳 上 霞 鶯此なき木傳ふえだ見ればはや青やぎになりけるかな
 閑 中 霞 くれ竹のよにかくれたる宿なれば鶯ならでとふひともし
 幽 居 鶯 あるかひのあらぬ今年も鶯のはつ音のきゝつ山かげにして
 妙法院の宮の御會始に鶯有歡聲といふことをよませ給ふによめる
 鶯 聲誘引花下來 み園生の花に木づたふうれしさをつゝみかねたる鶯のこゑ

鶯のこゑのかをると思ひしの花のこかげに来つるなりけり
 雪中 若菜 打拂ふ袖の雪まもなかりけりさえ野の若菜いかで摘まほし
 水邊 若菜 根芹つむ春の澤水ゆたかあもたちける袖をぬらしつるかな
 糺川つまれぬ水のふか芹もその根のきよしかみやうくらむ

田 若 菜 大あらし此浮田の根芹つむなべに森の木芽も春やまらむ
 獨 摘 若 菜 人よりもまづ打出でて春日野の飛火此野も若菜つむ見ゆ
 春 雪 散 風 春くれバども積らぬ雪と見て空にや風のふきみだまらむ
 山 殘 雪 霞むべき春の雲井にあらはれていよく白し比良の遠やま
 松 殘 雪 山里の松此まらゆき下解けて落つるまづくに春をまらかな
 巖 殘 雪 山かげに残るみ雪のつれなきのまがはむとてや消殘るらむ
 樹 陰 殘 雪 梅此花さける垣根此まらゆきのまがはむとてや消殘るらむ
 殘 雪 半 藏 梅 梅の花残れる雪のひまごどにさきいでて匂ふ春のきにけり
 家 梅 始 開 我をかの梅の林ぞにはひけるはく初はなかひらきそめけん
 雨 中 梅 梅盡此うちになまれる句こそ雲井のあめのまづくなりけれ
 窓 梅 夕月の影のすくなき窓の中にみちても梅此香こそにはへれ
 暗 夜 梅 梅の花やみにも見ゆと思ひし木のままの星の影にざりける
 深 夜 梅 あやなくも更しつるかな梅花それとも見えぬおぼろ月夜を
 女の家に男きたり前に梅花あり
 さく梅の色もにはひもなかりけり淺くも君によそへつる哉

折 梅 梅花袖のおよばんかざりわれは思はぬ枝を折りてけるかな
 野 亭 梅 故郷の春日のさどに狩にいて野邊にまづさく梅の花見む
 紅 梅 遅 まがへとや我まつ梅の紅のいろともまらでゆきのふるらむ
 河 柳 川岸にその根いたえぬ青柳のかげうき草にまがひけるかな
 垂 柳 臨 水 青柳のたてる石川かたふちにうおくや影のみどりなるらむ
 柳 經 年 年をへて人のかいぬる故郷のやなぎの眉ぞあさみどりなる
 早 蕨 賤の男がやくと焼きつる片岡の初わらびあそ萌いでにけれ
 春 月 春の夜の月おの物を思ふかなたがなみだより霞みそめけん
 春 月 朧 宵々のおぼろ月夜をかおどにて老のなみだをかまめける哉
 春 月 朧 中々に雲いたえままたれけり霞みはてたる春の夜のつき
 霞 間 春 月 かまむ夜も心づくしの光かなかなら老月の木のまならねど
 遠 山 春 月 さきいでん遠山さくら遠からぬかげあそ匂へ春のよのつき
 幽 栖 春 月 我ならぬ月もこの世やいとふらむ霞の奥にかくれてぞまむ

草庵春雨 かゝげ見しをものど山も雪さえて雨のどかなる庵のうち哉
 山家春雨 まみわびて今年のこと思ふ山里の垣根の木芽はるさめを降る
 關路歸雁 とびおえて浪路にきえし雁がねのあどをや守る須磨の關守
 海上歸雁 折しもあれもろおし舟につらなりて松浦の沖を歸る雁がね
 去雁遙 大空のみどりわけてかへるなり芦間にみえし春の雁がね
 江邊春駒 三島江のたま江の芦の若葉おのうべおそ駒も繫がれおけれ
 野外雉 櫻ちる片野の御野になくきいさ去年の吹雪や思ひいづらむ
 山櫻遅 朝おく心に句ふおもかげのさかりひさしき山ざくらかな
 山花未開 ちるおどを何かいひけんやま櫻さくも心にまかせざりけり
 初花 うちらやまし共ににいと思へども花の今年もはつ花にして
 依花客來 人めさへ見る日あまたになりけり片山林はなさきしより
 風靜花盛 ちるべくもあらぬ限の春風のふくものどけき山ざくらかな
 月前花 なかくに霞まさりせべてる月の光に花やまがひはてなむ
 花下逢人 たりもせぬ朧月夜のをぐら山されどもおか花かけにして
 花にぶそちざりおきつれ嵐山去年の人おもあひにけるかな

古寺花 世をきて、高野の奥にまむ人のちる物にして花やみるらむ
 海邊花 肥の海の松浦の櫻さきにけりもろこし舟も見やいとおめぬ
 花時無外人 玉ぼこの道ゆき人のことぐさもささちる花の外なかけり
 山家花 山里の花のさかりのかはらねど年々ひとこせなりけり
 嶺花 葛城の高嶺の花にくやしき久米路の橋のたえしなりけり
 題えらず 何ぞかくさけばとくちる花を植てのどけき春に物思ふらむ
 東山の花見にまかりて
 家にありて暮しわびつる日數さへ今さらをしき花のかけ哉
 さくら花ま葛が原にちる見れば春さへ風のうらめしきかな
 智恩院の花見にまかりける時
 大ぞらのいろの淺黄にさく花を霞のそでのうらかどぞ見し
 花浪 ちる花の山のまづくにあらなくに積れば浪と立さわぐらむ
 尋残花 のどかなる春の日影のおそ櫻のえらむ山をけふもたづねむ
 時鳥なくべきやまのけしきかな遅くも花をたづね來おけり
 残花少 残りなきわが世の春にくらぶれば散りたる花の少なかりけり

野遊糸 みな人の春の野原にあくがる、玉の緒とけてあそぶ糸ゆふ
 遅日 ゆけどく猶山のはの遠ければ空にやまらふ夕づく日かな
 瀧下款冬 蛙なくささの山川おとさみて山ぶきさけりたぎつ瀬おとふ
 款冬露繁 山吹の八重のむぐらにならふらむいつ我袖の露になれけむ
 躑躅中款冬 あしがらの八重山吹の花を折りて都戀しきかざしおぞさき
 款冬散 風ふけば井手のまがらみ浪おえていとわつろふ山吹の花
 雨中藤 おきたれて雨のふれどもゆく春のかへる色なき藤波のはな
 春鳥 山がらのつゝく岡へのうつば木の枝も一枝はるめきにけり
 をとめらがなつみの川にうく鴨のはがひも春の緑なりけり
 春虫 大空にたはる、蝶の一つがひ目にもとまらずなりにける哉
 旅泊春暮 春もはや一夜のつまとなりにけり室の泊にこぎやわかれむ
 みなど川浮寝お春やくれぬらむ生田のもりの花ものおらむ
 春盡鳥聲中 鶯のおるせぬ里のなきものをいつくを春のくれてゆくらむ

夏歌

題えらむ わかざりし花の名残もとりそへて木陰戀しき夏ひきにけり
 夏おろも袖ふきかへて朝かぜにいまだ昨日の花の香をまる
 首夏待郭公 藤波の葉がくれおおそ靡きけれやま時鳥えらむあらむ
 更衣 花ぞめの袖の別のをしけれぬぎしもいまだかへぬけさ哉
 何とわく句ならぬどとりいでて去年なつかしき夏おろも哉
 題えらむ いつよりも今年ひ長き春なりとゆたみまぎたる遅ざくら哉
 卯花 夏の夜の霜おの月もまがひけり雪とぞ見ゆる庭のうのはな
 隣卯花 ほとゝぎすまたるゝ頃の卯花の隣おあるもたよりなりけり
 薄暮卯花 卯花のひかりばかりになりにけり垣ねくれゆく玉川のさと
 卯花似月 夕まぐれ手折りて見れば卯花のつきの袖おも宿りけるかな
 卯月家の神まつる
 卯花をえらゆふ花ととりしでていざ庭中のかみまつりせむ
 神まつり たが里も卯花垣のえらゆふに神まつるべきときやえらむ
 新竹 雨はればぬきてと思ひしかひもなくおの皆竹に成てける哉
 雨中新竹 露だにもいまだならはぬ今年生のま垣の竹に五月雨をふる

稍々笋成竹 一つのまにうきふし繁くなりぬらん竹のよのかくおそ有けれ
尋 郭 公 ほとゝぎす何處いづくの雲に恐ぶらん山おの聲もきおえざりけり
待 郭 公 郭公きかんとおもふに夏の夜のまざるゝ鳥の多くもある哉
終夜待郭公 まつほどにはや夜のわけて時鳥なかぬおるおも驚うれけり
聖唐法樂の歌よみける中に郭公といふおとを

大ぞらもおめのうち野此時鳥おゝるのまゝに神のきくらむ
待客聞郭公 人よりもおくれてとはバ郭公ともにくくべき初音なりしを
遠 郭 公 時鳥もらまばかりのなさけおて遠き初音のきくかひもなし

壻 郭 公 かいぬれば耳なし山の時鳥とほきのおるのとほきのみかひ
ほとゝぎま立くゝれとや山里の卯花がきいまばらなるらむ

關 郭 公 おふ坂のせきの杉むらまぎかねて夜半おも名のる時鳥かな
時鳥なきたゆむ夜の手まさびに緒なき琴をバ調べそめけむ

鴟入夜琴 郭公ひとむらさめのふりいでてなく涙さへ見ゆるそらかな
杜鵑聲似哭 郭公なるればなれてきかぬ夜を數ふるまでになりける哉
郭 公 遍 まつ人も今のなきまで足ひきの山ほとゝぎま里なれおけり

郭公歸山 郭公ことしもやがて歸るなり猶みやまべやまみよかるらむ

郭公増述懐 なくからに悲しくもあるゝ時鳥ながこふらくい誰世なるらむ

採 早 苗 暮るゝまで田子の諸聲きこゆ也けふ植はつるさ苗なるらむ

曳 菖 蒲 時にわひてひかるゝ沼の菖蒲草五月いつかど待わたりけむ

沼 菖 蒲 淺香山かげさへ見えぬ五月雨に沼のあやめいひく人もなし

閑庭盧橘 たちばなも我を哀と思ふらむ外おにははむそでしなけれバ

盧 橘 子 低 あらぬみになれるを見れば橘の昨日の花もむかしなりけり

五 月 雨 桐の花おつる五月の雨おもり一葉ちるだにさびしさものを

山 五 月 雨 ままらをい端山のともしさし侘て幾夜くゆらん五月雨の頃

五 河 月 雨 日かおのみふる五月雨に湊川とらぬ真撒もくちやまぬらむ

瑞垣の波のひたせる名なりけりみたらし川のさみだれの頃

溪 五 月 雨 なく鳥も空にきおえお谷川のかとのみまさる五月雨のある

五 月 雨 晴 五月雨のけふぞ誠にはれぬらむ雲の八重山あらはれおけり

月 前 水 雞 すむ月の氷をたゝくこゝちして山澤みづにくひななくなり

水 邊 水 雞 山かげのいづみの水にことよせて水雞の聲もいは叩きけり

竹間夏月	山風のふきなびけたる吳竹のかへればくもる夏の夜のつき
河夏月	篝火のまらむ川瀬にたきすて、鶺鴒がとも、月や見るらむ
沙月忘夏	くれにけり月をみ吉の濱にいでて夏忘れ貝いざやひろはむ
短夜月	夏の夜を短きものとをしめども月も人の世をさぞ思ふらむ
夏月如秋	桐の葉のかへる隙もる月みればちりたる秋の心地こそをれ
夏草	高島のかち野の原の夏くさひ人のたけおちちかよびけり
野外夏草	夏さればあらはるゝ名に埋もれて野となり果つる深草の里
水邊夏草	てらま日にまなへうらぶれ篠薄風さへほふもいでぬ野邊哉
題まらま	淡江のよどの若こもからぬまにひきても汐のはしてける哉
鶺鴒勝衆花	六月のかはら撫子うちよする浪のつゆさへかわくおろかな
閑庭鶺鴒	櫻のみわがまきしまの花といふ人おや見せむ大和なでしお
鶺鴒河	撫子もおろのまゝにさきにけり蓬が庭のをしへなければ
雨後鶺鴒川	さきた川浪さへもゆる篝火の世に見るもおそろしき哉
鶺鴒船廻島	雨のやみ雲まだはれぬ夕やみの空まらいでてさす鶺鴒舟かな
	たちばなの小島此崎やめぐるらむ空に匂へるかゝり火の影

原 照 射

鹿まつとぬなのふし原ふしもあへず弓末はのく夜に明ふけり

水 邊 螢

亂れても鹿おふさまをもちの原のともしに思ひやる哉
岩浪此音せぬかたにちる玉の風にくだくるはたるなりけり

螢 知 夜

山川の浪のうき藻やくちぬらんなほねをたえてとぶ螢かな
河づらの螢のかげにあらはれて末葉もまろし根白たかうや
おもり江のみづから移る影をみて螢も浪のよるやまらむ

河 邊 螢

夕べく何をはたるのかもひ川影になる迄もえわふるらむ

螢 近 飛

上野や伊香保のぬまに旅寐してはたるを袖の物とおそえれ

橋 上 螢

柴人のふみあらしたる山川の朽木のはしにほたるとぶなり

螢 火 透 籠

思ひふくたが草のはら朽てだにきえぬ螢のもえわたるらむ
玉だれのをまの隙よりそれと見て巻んとすれバもく螢かな

疎 屋 夕 顔

いふしへのひさおかけんまひさへ思ひやらる夕顔の花
かたぶけばおぼる露を蓮葉のおきためたりと思ひける哉

水 邊 螢

松が崎氷室の口やわけぬらむおるまわらしの寒くもある哉
宇多山の松の下根おむすびおく氷のときもまらぬなりけり

桂園一伎拾遺 夏歌

夕立 夕立の雨の八重雲たちまちに降るまばらくの夏なかりけり
 夕立 早過 ならの葉に一むらかゝる夕立のまくなき雨の露におどれり
 遠 夕立 はるかおもなる神山の夕立のあめを見せたる賀茂の河みづ
 扇 端居してならす扇の風におそまづ萩の葉のそよぎそめけれ
 かげ深き山にまむ身も世中のあふぎの風をたのむおろかな
 閨 中 扇 夕べく扇のかぜにはらふかな誰をばまたぬ夜床なれども
 避暑 暑 むまぶ手にさへざる水の白波のおゑの外ふのふく風もなし
 泉 忘 夏 うちつけに水をむまぶ心地してあまみつめたき山の井の水
 山泉 忘 夏 ねく山の岩間の水のまら玉の夏をはなれて落つるなりけり
 松下 流水 松ふるく水あたらしき山陰の夏あそくべきとあろなりけれ
 水邊 納 涼 此さとの板井の清水くむ人のかきおも夏にいりにけるかな
 風わたる加茂の河原の柳かげうちなびきてもすいむ頃かな
 船 納 涼 松かげにとまらぬ船もなかりけりあらしや夏の湊なるらむ
 松下 納 涼 かぎりなき大海原の波の音を松におめてもさく夜なりけり
 樹陰 納 涼 ならかしの廣葉が上ふ音のして袖ふのあたる風をまくなき

四條の大ききみにまかりて水風涼といふおとを

晩 涼 水鳥のかもの川風ふきにけりいくらの袖かまゝしかるらむ
 けふもまた鳴暮したる蟬の羽のうまさ日かげに山風ぞふく
 夏 山 の 檜 の 葉 わたるゆふかぜに袂までおそひるがへりけれ
 夕べくまゝむ川戸の水底に秋まつほしのかげも見えつゝ
 夏 述 懐 ともまれば燃立つかびの下にのみくゆり難き此世なりけり
 夏 天 象 山の端にまはるかゝやく六月の此夜のいたく更にけらしな

秋 歌

六月 立秋 六月のてる日のうちにたつ秋の風の音おもえられざりけり
 立 秋 風 萩の葉の音そよさらにかきおゆなりたてるやおよひ秋の初風
 初 秋 露 人まればおぼるゝ袖の露見れば老あそ秋のはじめなりけれ
 眞萩さく岡邊の露に朝なくもまそぬらさむ秋のきにけり
 早 秋 朝 山 せいしくもけさを聞ゆる蛸のはやまが峯にあきやたつらむ
 湖 早 秋 玉手まきねての朝髪たる姫の浦かぜさむしあきたつらしも

七 夕 棚機も鳥のをしへしあどふみて渡りそめけむかさゝぎの橋
 年あらん秋も願の糸の上になさ穂のかつらかけて手向々む
 七 夕 月 久方の天のかはらにてる月のわれてあふ夜や今宵なるらむ
 七 夕 雲 一年もたえまおかねバ久かたのくもの通路ふみなれおけり
 七 夕 水 織女のふかきちぎりやうつらむ影みる水の底ひなきかな
 七 夕 草 棚機におよひあふてふ彦星もあゝろわくべきをみなへし哉
 七 夕 橋 棚ばさのわかぬわかれをあまの川なきてやわたを鶴のはし
 庚申七夕 たなばたのねぬ夜かなしき秋風にぬらしそふらむ天の羽衣
 萩 風 いかになき萩と風との契おてふけバ悲しきものとなりけむ
 萩の葉に秋のゆふ風たちぬめり今夜も夢やおどろかまらむ
 月 前 萩 はにいでぬ萩の末葉もはのくどあらはれ初る山の端の月
 雨 中 萩 ふりくらま雨の雫のさびしささふきだにみだせ萩の上かせ
 閑 庭 萩 とはれつる昔の秋のいつまでかおどろかれけん萩のうは風
 各行見萩 萩が花ささちるかげに都人おくれさきだちつたふ野邊かな
 行路萩露 小男鹿の涙をそでにおぼれける朝たつ野邊の萩の上のつゆ

故 郷 萩 高圓の尾上のまや此はさが花にはふらむとも恐ばむやたれ
 故 郷 薄 故郷のまゝさ一むら今さらに誰をまねけどかりのおしけむ
 月前女郎花 てる月のかゝみに寫る影みれば色さへ白きをみなへしかな
 曉 露 白妙のゆふつけ鳥のなくなべに露おきわたせ小野のまの原
 風 前 露 故里のものとあらの木萩ひとりまらあぶるゝ露をふく嵐かな
 虫 聲 非 一 よるなれば花の千種のみえねども色々になく虫のおゑかな
 月 前 虫 月てれる淺茅が上にかげみえてはねさる虫の聲さやかなり
 深夜虫聲 更ぬれば草葉にあまる露もほれど野の虫のねに埋れおけり
 虫 怨 波おゆるたが秋風をうらむらむ尾花がまゑの松むしのおゑ
 海邊秋風 白妙に浪おそかへれわたつみの袖のうら風あさやたつらむ
 秋 夕 雨 大かたの人の涙やふりくらむゆふべかなしき秋此むらさめ
 秋 夕 雲 つくくどながめいり日の影落ちて色なき雲に秋風ぞふく
 橋上秋夕 秋風のさむきゆふべに津國のさひえ此橋をわたりけるかな
 山家秋夕 なかくに世中よりもうかりけり山のいはりの秋の夕ぐれ
 たちいでて誰に語らむ日ぐらしのなく山かげの心ぼそさを

水邊秋夕 鳴のゐる澤邊の水のまみにけり草かげみゆる秋のゆふぐれ
 秋夕傷心 秋風にみだるゝ袖のゆふつゆの心をまぼるまづくなりけり
 駒 迎 秋の夜のふりはへてだに望月のままはしかりし逢坂のやま
 初 鹿 さを鹿の初聲たかし去年よりも今年も妻やつれなかるらむ
 夜 鹿 さを鹿の妻とふための秋ならしつれなきまでに永き夜半哉
 遠 鹿 ほのかおも聞えぬまでになりけり嵐のあと此さを鹿の聲
 田家聞鹿 賤がもる麓の小田にきおゆなり暮るゝ高ねのさを鹿のおる
 稻 妻 はかなくも消えぬ共おと稻妻のうきたる雲に宿りそめけむ
 秋 日 村 雨 卷向の檜原がおくの稻妻のまらぬ火のおゝらおそまれ
 月 山がつかげふも日和とはま稻に朝露ばかりそゝぐあめかな
 限なくまめる月おいにしへの人の影さへ見えわたるかな
 大空のまめるが上にまむ月のひかりぞ秋のひかりなりける
 逐夜月明 明日の夜の又あまの夜やまたるらむ昨日にまざる月の影哉
 對月待客 わが心幾たびゆきてさそふともまらで今夜の月やみるらむ
 もる共に今宵のみんと契りしをなかくゝ月に忘れはてけむ

山 月 近江のや鏡の山にてる月をかけたる秋の名おまそありけれ
 月 出 山 山の端のくるゝもまたで出るおそみちたる月の心なりけれ
 月 浮 流 水 底をみて流るゝ水のなかりせばうき世に月の宿らざらまし
 林 間 月 まはせ山杉の林のまげ々れど見るひまえたりありあけの月
 樹 陰 月 ゆくまゝに見えまなりぬる月影の木隠れたりと我を恨みむ
 竹 間 月 ふしておそ見るべかり々れ呉竹の下てりわたる十六夜の月
 湖 月 はるくゝと志賀の辛崎あらはれて鏡のやまをいつる月かけ
 關守のどいめざりせばいかで見む箱根のうみの秋の夜の月
 湖 上 月 明 月をめば比良のたかねに雪ふりて真野の入江に氷をぞま
 筑摩川秋ゆくみづの清ければそおまでまめる月のかげかな
 河 上 月 山 深み月もよなくゝまみわびて我さびしさを思ひまらむ
 山 館 見 月 いかにせん雲の衣のうらにありてまだあらはれぬ月の白玉
 雲 間 待 月 一つだに物いなしといふ心おも今宵の月のとまらざらめや
 淨 侶 對 月 てる月のよそおも雲いなかりけり徒にふく夜半のやまかせ
 晴 夜 月 大空の雲の千里の外にきえてひとり月おそまみわたりけれ

野 月 ねられ老や月にうかれてとぶ鳴の羽ね音高し猪名のふし原
 古 寺 月 にはは寺はるかに影を更おける月を西ふいねがはぬものを
 時しもあれ檜原が上に有明のつきいでにける鐘のおどかな
 故 郷 月 歸りきて又まむ人もなき宿をいつまで月のもらむとまらむ
 海 邊 明 月 大崎の夕玄ほくもりかつはれてみちたる月に浦かせぞふく
 濱 月 似 雪 黒珠のくろどの濱にてる月のなぞ雪とまで見えわたるらむ
 十五夜 翫 月 わけぬとも月をバ入れと玉櫛笥二夜とだにもあははるあらめ
 三 五 月 正 圓 塵ばかり雲のかけたるきづもなし今宵とみかく月のまら玉
 不 知 夜 月 玉だれのをまにも半かゝりけり光いさよふやまの端のつき
 立 待 月 足引の山のあなたにてる月をおそしと松もたてるかげ見ゆ
 居 待 月 とく今宵つきのいでなん玉篋の上にてまつ露もあそわれ
 月 前 管 絃 心さへまらべあはせてちの秋たのしむ聲を空にきおゆる
 月 前 雲 てる月の光のうちになりけりさはると見えし空のうき雲
 月 前 鐘 くれわたる入相の鐘の音羽山月みよとてやおどろかまらむ
 月 前 思 故 人 終夜おもひやるあそ悲しけれいかなる世にて月を見るらむ

月 前 旅 情 今まめる月やみやぶの空ならむ思ふ人みな見えわたるかな
 釣 夫 棹 月 釣の糸も月にをさめてゆく舟のさま棹さへや忘れはてけむ
 曉 月 秋此夜のながき心をたれみつゝあくるもまらぬ月のかげ哉
 社 頭 曉 月 夜に今かわけの玉垣はのくと木間にまらむありわけの月
 深 山 曉 月 ねがふおどあり明の月を高野山今宵も旗の葉おしおどまつ
 我ぞみる山よりおくの山の端にひとりいでたる有明のつき
 九月十三夜 おぼつかなたが世の後此月ならむみぬ秋迄ぞ戀しがりける
 雲 月 遞 微 明 浮雲のうまき所になりぬらむおもかげばかりにはふ月かな
 憐 月 などをかく世おも心のあり顔に月をおはれと思ひそめけむ
 寄 月 祝 治れる御世のためしにひきて見む手にいとられぬ弓張の月
 雁 世中いたちはなれたる大空のかりもなくなりうき秋にして
 暮 天 雁 おの夕べ都にきくも秋のなほ秋なりけりどかりやなくらむ
 雁 行 寫 水 雲路ふも夕べの露やむまぶらむ翅はらひてかりなきわたる
 雁 が ね の 大 空 け ぞ 木 幡 が は か ぬ の 瀬 を 渡 る な り け り
 海 邊 雁 松浦ぶねからろおしきる大どものみつの湊に雁なきわたる

湖上雁 わま人も今や衣をうちいでの濱かぜさむみかりぞなくなる
 關秋雁 狩人此どなみ此關もあるものをやまくもきぬる秋の雁がね
 江流宿霧中 霧の中に夜のおもり江の落標見ゆるや明るまるしなるらむ
 搦衣寒 中々にわが爲ならばから夜さむき夜かぜにうちやたゆまむ
 旅にぬるほどの夜寒を身にまめてたれふる里に衣うつらむ
 山家搦衣 山風のさむきもあゝろから衣妹あひしらにうたぬ衣ぞなき
 鶉 まれ、浦の入江ふきおま濱かぜに床さへわれて鶉なくなり
 菊初開 淵とのみたまらむ菊の初花にけさかく露や千世のみなかみ
 菊花第一 花といふはな此末あはさきぬれど上は匂はん花なかりけり
 對菊待月 色にのみ月をまたせて菊の花にはひわたれる夕まぐれかな
 月下菊 をるおとを月もをしとや思ふらむ光にかくま白ぎくのはな
 翫菊花 わかおとて折りてかざさば菊の花千世を願ふに成ぬべき哉
 終日愛菊 菊見んとまがきがもとにたてりけり南の山も暮れわたる迄
 菊花臨水 天のがは渚の岡のまらぎくを星のうつるとおもひけるかな
 故郷菊 千世をへて歸りきにけむ故郷のむかしにも似ぬ白菊のはな

菊の一枝 仙人のかざしめてたる菊の花おぼるゝ千代の誰かひろはむ
 菊爲重陽冒雨開

秋菊有佳色 九月のけふしも雨にぬれおけり折りてやはさむ白菊のはな
 美色うつりやましといふものを菊の千種此千歳なるらむ
 菊制頽齡 菊此花人のよはひの早河に千代のまがらみかけてけるかな
 紅葉淺 鷗のなく末此原野を見わたせば一むらばやしうま紅葉せり
 山松此ふかき緑をにはひおてあらはれそむるうま紅葉かな
 朝ざりいはれての後も佐保山の柞此いろのうまくもある哉
 霧添紅葉 朝な／＼たちならびたる秋ざりに山の錦のまかせてぞ見る
 紅葉待霜 つひにさておかぬの霜の心ぞとまたに紅葉や思ひそめけむ
 森紅葉 紅葉まゐる立田のもり此風まつり神のうけても見えにける哉
 紅葉曝錦 けふ見れば紅葉の錦はしてけりまぐれ／＼し天の香具やま
 紅葉如錦 山見ればさ此ふもけふも唐錦いくむら時雨おろいづすらむ
 瀧紅葉 山風もいまださはぬもみぢ葉をかげおておとす瀧の白浪
 名所紅葉 松此いろも紅葉のためと立田姫心ありてやそめのおしけむ

紅葉盛 いにしへの賤機山をけふ見れば錦のみおそかりいでにけれ
 行路紅葉 鴨のなく道はゆくのはし紅葉驚くばかり染めてけるかな
 紅葉寫水 もみぢ葉の影ばかりなる柵にまばしいさよふ水のあきかな
 紅葉浮水 大炊川舟とながるゝもみぢ葉のとまる湊やるせぎなるらむ
 九月つおもりに女車紅葉散る中を過ぎたり

秋 動物 もみぢ葉のちるにとまらぬ小車ゆく秋の妻ふかあるらむ
 秋 人事 わがすえし小鷹ぞおどる足びきの山田此ひたに驚かされて
 秋 色 足曳の山田の原の遠ければかりてはあぶにけふも暮れぬる
 秋 衣 松さへも秋の心はかはるらむうつらぬ色もさびしかりけり
 秋 祝 わがせおにぬひてさせむと唐衣ときしけふしも夜寒なる哉
 八束穂のおしね刈あげて颯ふらむ案山子の弓も治れる世を

冬歌

時 雨 野邊見れば草葉みながら色づきぬつゆばかりおそまぐれそめしか

父君の一周忌に時雨といふよとを
 山風にまぐれのこりし浮雲此まばしどふるも頼みなの世や
 うきながら年の一年めぐりきて今年もこの時雨ふるなり
 まぐるればまぐるゝものど神無月まねび顔おもふる涙かな
 折しもわれまぐれて歸る浮雲のかきくらしたる山此端の月
 大空のさながらくれて夕時雨ふる音ばかりのこりけるかな

夕聞時雨 夕ぐれに雲の色だにかなしきに音さへたてゝふるまぐれ哉
 樵路時雨 山人のゆふべ此道やたどるらむかへるゝもふる時雨かな
 森間時雨 柏の實此かつる音だに悲しきにまぐれぬ間なき久我の杜哉
 野時雨 片野ゆく人ぞぬれたる冬がれの葛葉わたりや打まぐれけむ
 里時雨 炭がまの煙や雲となりぬらむまぐるゝ日のみおははらの里
 岡時雨 雲間よりさまや夕日の岡のべ此松の葉見えてふる時雨かな
 寢覺時雨 さめて思ふ夢も昔此さ夜時雨おと此みきゝてぬれし袖かひ
 落葉 山里のおちばの塵ぞさだめなきはくもみだまも木枯のかぜ
 落葉如雨 ちる花の雪にまがひしさが山のさくらの落葉雨とおそふれ

閑落葉 今いどて梢はなるゝもみぢ葉の聲もかなしき神なづきかな
 關落葉 不破の關ちる木葉もて山かぜ此ふきかへにける板びさし哉
 紅葉散 紅のなみだに似てもちるものゝ物思ふやどの木葉なりけり
 池上殘菊 池のおもに見し有明の影ならでつれなく殘る白ぎくのはな
 霜 ぬば玉の闇此空よりかく霜の色いかなればさやけかるらむ
 朝野霜 冬のたつあしたの原の下草にかるゝちぎりを結ぶまもかな
 枯野眺望 つくはねの緑ばかりぞ残りける冬がればてし武藏野のはら
 夕木枯 しばつかな木間に見ゆる三日月もちるばかりなる木枯此風
 寒草纒殘 かりゝまなきからしたる冬草此下根ばかりに殘る色う奇
 野寒草 あはれなる末此原野の神無月かれたる草にまぐれふりつゝ
 谷寒草 かつしか此昔のまゝ此女郎花そのかけさへも枯れし野べ哉
 氷始結 松此葉の霜ふきおとせ木枯に色おそなけれどたにのまたくさ
 氷知冬 月かげも残りぬ水の朝おほり何をたよりにむまびそめけむ
 薄氷 朝手洗ふ瓶の氷のうらにおそまさしく冬のあらはれにけれ
 人のゆく道いさゝつや狐まらうまきおほりの渡らざりけり

水氷無音 ゆく水此さゝやく音も耳敏川きおえぬまで氷りけるかな
 池水初氷 けさよりぞ結びそめたる池水にうちいでん波の花の下ひも
 瀧氷 ちちたざりみだるゝみを此一筋の氷もえおそ結ばざりけれ
 氷閉瀧水 朝氷とづる冬よりおとなしの瀧のなにおそながれそめけれ
 氷の上に紅葉のちりたる

冬月 もとぢ葉をおれる氷の薄もののみだりに波もたゝまざりたり
 水郷冬月 くまもなき月を誰か見ざらん我あたら光の寒くもある哉
 社頭冬月 玉島やこの河上に家もあるをおりにやどる冬此夜のつき
 寒夜衾 かへま手に霜の拂へど山あゐの袖なほまろし冬の夜此つき
 椎柴嵐 山かげのかれぬ時雨の音ながら嵐にかわくにはのまひしほ
 薄暮千鳥 たち此ぼる佐保の川霧はれまのみ此日くれぬと千鳥なく也
 遠近千鳥 あふみのやま此濱千鳥さそふらむ友よぶ聲の沖にきおゆる
 湖千鳥 諏訪の海此氷の上をゆきかへり浪をたづぬる千鳥鳴くなり
 水鳥 山河此みをさか此ぼる芦鳴のむねやまからぬ世おもふる哉

雪中水鳥	大澤の汀此まつ雪をれにおゑうちそへてかもぞなくなる
水鳥馴船	水鳥もふねさま池此おもなれて同じあしをゆき歸るらむ
葦間水鳥	山川のあしまをくゆる芦鳴の尾ぶり寒けに見ゆるけさかな
一鳥過寒水	寒き夜をひとりねじとどぶ鳥の行へもおほるとおの山川
芦間	鶯霜かかぬ芦の葉がくれ友ねして明ゆく空を抜しのなくらむ
網代	くれぬより河風寒みあじろ守かのがかりのひをや待らむ
朝網	網代人朝おぎ歸る舟の中にたまれる雪のひをにぞありける
閑庭	かくれがの苔此上おの心してまづかおもちる玉あられかな
霞殘夢	わが通ふ夢のたいちを妨げてひとりもはしる玉あられかな
竹間	鶯もなくべき年此くれ竹にあられのみおそおとづれおけれ
窓	あられふる學の窓のくれ竹になげうつ玉此おゑをきくかな
狩場	初どかりまだまゑなれぬはし鷹の翅をかけてふるあられ哉
待初雪	時しもあれ雪をくゝみていかり猪のたける狩場に霞ふる也
山寒雲	今夜おそつもらむ峯の初雪をいはぬいろなる夕ぐれのかも 白雪の積らんけさの山の端いまづ雲おほそうつもれおけれ

河	濱	海	常	晴	晚	神	題	冬	冬	冬	冬	冬	冬	
雪	雪	雪	磐木雪	雪落長松	頭鷹狩	樂	老	朝	望	聲	里	祝	言	
おえかねし浪かどみえて大堰川おせぎもたわに積る雪かな	海人のみやけさ打出の濱千鳥あらぬあどあそ雪にみえけれ	烟のみうづみ残して鹽がまのうらさびしくもつもる雪かな	玉つばき二たび三たび花さきて雪おぞ陰のあらたまりける	はつせ山櫻が枝のまばらにて檜原ぞゆきいさかりなりける	松が枝の下をれたりと思ひしに碎けて雪のおつるなりけり	是やあ野守のかいみはし鷹の影さやかおも見ゆる月かな	大君のふきなしたまふ笛竹のあなかしこしと神もきくらむ	老ぬれば友なし千鳥ははれまた子を思ふ闇の空になくなり	年々にあはれど年も見てゆかむ齡はかにつもるおもひを	初雪のよるもどふると起いでて山の高ねをおさなくみる	霜深き冬の野邊おそさびしけれあさる小鳥も友なしにして	あろも手の田上川のかみつ瀬に網代うち渡さ音のさやけさ	たなつ物かりて收むるくらかきの里のふゆさへ賑ひにけり	音羽山さみが御幸のほどをめておつる木葉も千代の數なり

桂園一枝拾遺 冬歌

歳暮 海邊歳暮 家々歳暮

またへばぞ我身に年の積るらむ思ひきて、や春をまたまし
およろぎのいそぎなれさる蟹の子のたつ年浪も去らせやあるらむ
松たて、迎へぬ門もなかりけりたが里よりと春やまどはむ

事につき時にふれたる

立かへり神代の春の朝づく日のぼるやゆめのいはくらの山
正月たつけふにしわれや祝じま小松がうれにさづさはになく
けふいどて春まちえたる山里此玉のまだれい垂氷なりけり
とけてだに鯨さやれるえぞの海此氷れる冬を思ひおそやれ
やま水も氷とくくかちくめり岩間をむたる春のわらしに
ふる雪もどもにみだれて鶯此きたるかひなき梅此はながさ
恐ぶ山玄のびくくにさつ人のとなみはる雨けふもふりつゝ
うたゝねに打ながむれバ芦垣のまだり柳につきいかにぬ
おしなべて梅の盛になりにけり夜ふく風もなつかしきまで
歸るおのまだ日も高し稻荷山ふしみの梅のさかりみておむ

みやお人柳さくらにあきませで袖のにしきもかをる春かな
あくがれて心も花にのる駒の道さまたげにもゆるわかくさ
故里へかく玉章をつてやらむ折しもわれやかへるかりがね
うらみてもたが引やりし玉章ぞはなれくてかへる雁がね
花にあかで塙にかへる鶯のひとく暮れぬとねをやなくらむ
花かげに遊ぶを見ればのりきてし駒も家路や忘れはてけむ
青海のうづまさ寺にきて見れば身もなげつべき花此陰かな
大井川鮎とるわざをけふ見れば流るゝ花をまきふなりけり
蝴蝶だにいまだねぶれる朝かげの花を起出でて獨おそみれ
堇つみ一夜しねせバ朝づく日にはへる野邊の花も見ましや
大井川入江のりおむいかだしの棹のうへおま花のまらなみ
ひきたがへ花見車に此りの輪のみ寺の春ぞにぎはひにける
どもまれバ霞のかげにかくれけり二人ならびの岡のべの松
見ても猶みまほり川の辰橋花にかけたる名におそありけれ
あらたへの藤江の海人のいへ櫻みえおそわふれ夕和にして

白雲にたちまがへるの白雲のたちまがひたる山ざくらかも
愛知がたわかめかり上げはし崎の千瀉も見え老霞むけふ哉
東路のはなのさかりに忍ぶかな都のよしだをかざきのさと
吹おろし吹巻く風にまのまだれ花と共おもみだれけるかな
花みんどうゑし山吹一重とも八重ともいまだいはぬ色なり
我妹子がひよひ髪ゆふ元結のおむらさきなる藤なみのはな
あら玉此年の一とせくる、より惜しきの春の日敷なりけり
なら山の兒手柏にかぜふれてうらおもしろき夏のきにけり
なつかしき若葉のかげおなりにけり昨日か吹きし木枯の杜
月かげふにはひとらるゝ卯花のくるゝ迄おそおのが色なれ
音羽山たづねくらしてはとゝをき我おそなれ逢坂のせき
時鳥檜原がうへにふるあめも音たかやまにいまぞなくなる
郭公まださどなれぬゆふやみに忍びもあへせとぶほたる哉
くれおたりさ苗とる賤がをがさ原夕日の影もさゝせなる迄
家にしてけふのうたへる聲をなり門田のさ苗植みてにけむ

故里のよもぎの軒におよびけり菖蒲ばかりをふきや添へまし
遙おも此りあまされてふちおまの狩の外おもいばえける哉
たが宿の昔をかけてたちばな此遠くもおゝに匂ひきつらむ
もとより此壁のくづれて葎のみ八重とちはつる五月雨の頃
五月雨のあめおや星のおちつらむ石ばかりおもなれる道哉
ねられねば舟ばた叩き諷ふ夜をくひなも聲をあはせ顔なる
五月雨のふる日寂しきうたゝねを叩き起まの水雞なりけり
あけやまき空だにあるを稍より稍にうつるなつの夜のつき
まきしまの大和撫子人の世にまきし種あゝあらじと思ふ
なきくらま蟬の涙やおちぬらむ露おそみゆれ杜のまたくさ
山賤が蚊遣にたつるおがくづれおまかにものをくゆる頃哉
あけゆかば奉らむと氷室守おのがまろねもどけぬ夜半かな
村雲をわきいかづちの名もまろく神がきひかり夕立ぞふる
山おろしに霞たばしる心地して夏ともまらぬ瀧のまらさま
誰とぬる中どのなしに夏衣ひとへばかりもいとふころかな

暉の羽にならの葉おほひ吹く風の亂れて共にかつる聲かな
うてバ火のいづる巖の何處よりわけバか水の涼しかるらむ
秋風の玄のびくにかよへバや松の玄た葉ぞ紅葉そめける
涼しきを雨のなおりと思ひしいやがてもあきの始なりけり
たむくべき梶の一葉ぞちりにける星の林もあきやたつらむ
富士がねに初雪ふれり庵原のきよみが崎にあきやたつらむ
柵機のつまとぬる夜を獨まむ月人をとあねたしとおもはむ
古里の昔がたりにあらなくなみだあぼるゝ萩のうはかぜ
藤ばかま下此くゝりと思ゆるかなうら紫のりんだうのはな
いづれかのかのがあるじとまどふらむ中垣にさく朝顔の花
門田早稻はにいでたるを夕べく此ぼる露かと思ひける哉
武藏野をわがわけくれバあま水のゆくへまどはま虫の聲々
あど更にてる三日月の三栗の中なるあきのかたわれおして
足引の山田のはらにひくひたの影さへ月にみゆる夜半かな
あよひあそ月もままみの鏡山むかはぬ人のあらじと思ふ

曇りていはるゝ月夜を玄の籠まきみおろしみふりしつる哉
赤裳ひきたてりと思ゆる玉だれの内あらはおも出づる月哉
隅田川つきも都の名にしおはバあよひ戀しき影やとはまし
宮根山たかねの松のひま見ればわけかゝりたる有明のつき
さらぬだに峯の松垣荒果てゝままれぬものを冬ひきにけり
庭たゝき垣ねの霜を拂はまバ枯れたるくさ此色もみましや
神無月あのは落ちたる朝戸出に夜半の寢覺此か老を見る哉
おくて田此さはだをかるどけさ見れば穂浪かたかけ薄氷せり
山おろしの風に一むらちる霞かやが軒端のたままだれなり
むら千鳥よまる浪おやならひけむ立つ時聲のきおえける哉
受けがたき伊吹おろしに朝妻の片山がくれ千どりなくなり
えら河の末の草河ふゆがれてほそきながれに千鳥なくなり
木がらしに下紅葉さへちりはてゝいと常なる松の色かな
いかにねん麻手小衾うちかつくあふちの風も寒さあのを
園の上の松の上葉におく霜をかつくふさまの下にまるかな

てる月の中なる里のつめた川氷れる夜半の名おほそ有けれ
一むら此氷魚かど見えて網代木の浪にいさよふ月の影かな
遠方のたかねの雪のいづる日の光につもるおちあそまれ
炭がまを埋火にして池田人けぶりのふくにおもるふゆかな
梅がえの花と一つに見ゆれども寒きや月のひかりなるらむ
終夜あし火たく屋にねたれどもうら風さむし雪のふれ、
今世にあるおもあらぬ老が身の捨て年だに積らざらなむ
玉此緒のたえぬばかりの思ひ出にまたる、春の哀なりけり
夜の中につくりし雪のけづり花三世の佛のいか見らむ
夕されば物思ひましくなく聲のみたびもまたでぬる、袖哉
くひなだに音づれかねし我山此松のどぼそを叩くひとあり
新しくかけたる松の丸木ばしもとより苔のつけるなりけり
たらちねに似たりとさけは増鏡わが影さへもなつかしき哉
墨染のゆふべの山をながむれば松のたてるも寂しかりけり
いかなれば柚木さるてふ山人のをのにありながら音無の瀧

岩がねを洗ふと思ひし荒磯の浪のくづをかくるなりけり
おぼつかなきのふもけふも白雲の跡なき跡をふむ山路かな
ぬれく、てゆくらん物と誰かけふ雨ふる里に思ひ出づらむ
まみだ川夕まほ今やさしくらむもとの洲崎にかへる白なみ
ながめやる心のまるや武藏野の尾花がまゑの三日月のかけ
のどかおも鷗とならぶ蚤小ぶね心なきおそあゝるありけれ
山路だにさびしきものを啼く鳥の聲さへき、もまらぬ國哉
白浪の上を走らま石つぶて沈まぬほどの世におそありけれ
菜摘おど人にくれども山里のおどなし草のまらぬなりけり
呉竹のたえま、に野邊見えてつねおもしろき岡崎のやど
あしけくもよけくもまらぬ我山に何れさがぞも狐まばなく
池水のそおにまづめる石がめのかたしどもせぬ萬世ならむ
いくら人わたしく、て山城のよどの舟をさまかいかいけむ
住の江の岸の松かぜふきけらし淺香のうらに玉藻なみよる
淺澤のぬまのま振の墨をとりてあつま少女の眉つくりせり

四長鳥ゐな野の原の玉ざさにあられふるまで旅寐してけり
 水鳥にならぶうきねを思ふふの舟おそ人のつばさなりけれ
 大海の舟ばたまきてねたれども猶みるゆめの妹が手まくら
 うちはへてくるしき世をバ中々にかけはなれたる蟹の釣繩
 大原やみ幸のあどの柴ぐるまめぐれいうつるあはれ世此中
 何おとももど糺なる神ならばむかしにかへせまきしまの道
 ひきとめよ遠き千里もはなれ駒獨かけらバかひなからまし
 わくがるゝむねの煙を蚊遣おて聞へもいらまわかを頃かな
 おく山の石つみ車ちからにもおよばぬ戀のみちぞくるしき
 わら玉の年のくれおも人こふる心のねにのやらひかねつゝ
 白髭の神もあはれとおもふらむねいにけるまでおふる心を
 焼太刀のつばの市路にたつ民も打やはらげる世におそわりけれ

戀歌

初戀 大方のよその情をみし日よりおひしき人になりけるかな

恐待戀 ともまれば露のみだれん戀ゆゑにまゝきのほおもかく心哉
 恐久戀 さを鹿の立野此原のま此薄はにいでて人をいつかまたまし
 聞聲戀 埋木此うつばにおふる恐ぶぐままられぬ中に年のへにけり
 見書慰戀 玉だれのをまのめさへに繁ければ聲より外にもる影もなし
 見書慰戀 せめ神此大御社此おほみぬさみぬさき何におひしかりけむ
 見書慰戀 かきなまの筆の心とまりながら慰むおとぞかつのはかなき
 深夜待戀 閨の戸の人のゆゑあけて山の端にかくるゝ月の影をおそまて
 遣車待戀 いかにせむかへりくるまのねそして妹が駒もやられざりけり
 祈不言戀 祈るかひあらんあらじいまらねども世に神ならで誰を頼まん
 思不言戀 わたつみの底に涌いつるいよ此湯のいはぬ戀をバ汲む人もなし
 恐尋縁戀 恐ぶ山おえんまるべを白雲のよその上おもまかべてぞとふ
 恐通書戀 覺束な雲井がくれをゆく雁此そのおほひ羽にかけし玉づさ
 寄山戀 白雲のよそにそびゆる伊駒山つれなき君があたりなるらむ
 寄雲戀 風はやみやがて跡なき峯の雲なびきし迄のちざりなりけり
 寄關戀 いかにせむおゆればそよど咎めけり妹がまがきの刈萱の關

寄岡戀 かの岡此松に夕日のかくろひぬ今やとまたん駒にくさかへ
 寄藻戀 潮みつる真砂が上にみだれ藻の又ひくかたに靡さけるうき
 寄木戀 から山のからさが中にさく花を求むるよりもかたき君かな
 寄木厭戀 打どけてねもみしものを濱松の久しき世より去らぬ顔なる
 題えらむ 三吉野此吉野のやまにゐる雲此花にまがひし人ぞあひしき
 花鳥の色音を何にもらしけむ物のあはれも去らぬわたりに
 わが戀の玉くしげなるまき鏡みえもみえまも君がまに
 阿波此海なるともさかぬ人故に何わだ波のたし騒ぐらむ
 我戀の數をつくさば大島なるとの浪もたしぞあらまし
 山ふるし日も夕かげにふく時ぞ去みく人戀しかりける
 山賤が脊面此岡の畑に生ふるからなたてもやまんとやまる
 契りつる花のたよりも過にけりたれおかうつる心なるらむ
 年月もまてば待しを逢見ての後はたいかにかくの戀ふらむ
 ひきいるゝ恐び車のうしみつお睡くむねをやるかたぞなき
 うつせみの人の人言まげさまを去ばしといひし中絶にけり

立名戀 逢ふおどの是を限といひはてし後おそ戀のはじめなりたり
 君をのみ思ひの草をまくらにて尾花がもとに旅寝してけり
 百重山へだつ都もみゆるかなおひの上おまみねなかりたり
 敷妙のそでもかさねぬから衣つまと何にかもひそめけむ
 山の端に棚びく雲此いちじろくたつ名ばかりにきえや渡らむ
 世中に去られむどのみ思ひつる名のおひにおそ顯れおけれ
 かばかりの情にかへて惜しむ哉何ばかりなる我名なるらむ
 夢がたりだにせぬ物を何おかも思ひ合せて世おの去りけむ
 久方の天此よそづらよそおてもかけておひんの契ならせや
 いく度かいひかへされて葛の葉の重なるもの恨なりけり
 いかにせん煙にだおもかへらぬ此世ながらの姿なりたり
 君おねばどらぬ我琴に積る塵かき拂ふお音のなかれけり
 共にみし其俯のままかいみ手おのとれどもておのとられせ
 たえし世の久しきものを鳥の聲かぜのおとあも驚かれつゝ
 一夜だに君がゆるさば小車の榻のまるねもうれしからまし

惜名戀 別不知戀 恨不知戀 疎戀 顯戀 時々驚戀 寄鏡戀 寄琴戀 戀車

戀 島 松前のままのみ崎に刈りてはま世に廣きゆをいかに恐ばむ

雜歌

御即位のあした慶雲のたてるを見てよめる

題 君が世のえぞが千島による浪の音もきおえせなりける哉
富 士 駿河なる不二の遠山はてもなく見ゆる雲井にみえわたる哉
風の上になつ塵よりや積りけん空にはなれし不二の高ねの
不二のねに打向ひていはき山心なき人あらじとぞおもふ
あふぎみる雲井に白き富士此ねの雪をときは此三保の松原
空の海雲の波間にはちま葉のひるがへりたるふじ此芝やま
海上眺望 はるくくと神代をかけて見渡せば雲井につよく天のはし立
夕なぎに明日もひよりと定めけん沖にいでたる海人此釣舟
扁舟歸暮 芦の屋もかなじ一葉の上なれどかへるやなみの心なるらむ
山 家 さびしさを常なる山の中々にあきともまらぬ松かぜぞよく

山 家 瀧 静あと思ひいりにしれく山のみねまでひよく瀧此おどかな
山 家 眺望 限なき海も脊がひに見ゆるかなふかきやまの心なりけり
田 家 竹 山賤の軒端にまげる篠竹を小田のかいし此矢おやはぐらむ
故 郷 風 ふる里のたまき此宮のあれおけり檜原の風此音ばかりして
故 郷 橋 古里にとしへてくれれば板ばしの心さへあそあやぶまれけれ
山 寺 鐘 つくくと眺むる山の尾上よりくれぬと鐘の聲ひよくなり

のどかなる大方の世をまらせして山にまめがと思ひける哉
世中此なげきの我もありはてついで山賤とあひまひせむ
三月十四日立坊の供御中山頭中將の君奉行にまわり給ひていたし給へるを其内四品ばかり大御器ながらくり下し給へるを畏くもいさきて
花さそふ大内山のおろしをばうけたる袖につゆさへぞちる

薄 暮 松 よさの海北湊にいらしかひもなく松の葉見えぬ夕まぐれ哉
社 頭 杉 あどむけしあれやまるとの銚杉も神さびたりな白鳥のみや
竹 不改色 吳竹の千世のもと末みどりみて枝さへ葉さへ變らざりけり
從五位下宣下蒙りし時よめる

けふぞまゐるふして仰げば位山いよくたかき君がめぐみを
大納言の君より拜叙を祝ひ給ひ下されてかましく御たまもの上に

近き世に例まれなる恵うけてさかえそふらん老のゆくまゑ
とよみ加へたまはりたるいとかたじけなみ奉りて。

齡のみ世にまれなりと思ひしのおのみ恵をまらぬなりけり
位山たかね此月の影なくばまげきふもといかでわけまし

三位中將の君より

めぐみまゐる大内山の松の上にふたゝび千世の色やみまらむ
と祝ひたまひ下されたるに

二度の千世をば君にゆづりおきて恵をまつ陰にかくれむ
題まらむ袖の上にかちたる見れば雲井とぶたづのくはえし稻葉なりけり
三條の君より實房公の御集をたまはりて此中より御影の上にあはるしおかるべき御歌えら
びてよとありければ撰みて奉るにかいとへたる

藻屑だにまじらばおその撰びても清き渚のたまひひろはめ
富小路佐兵衛佐の君より山吹に御歌をへて賜はりける御かへし

元 服 山吹の花にむまべる言の葉の露のあがねのたまにざりける
紫のはつもとゆひにかくるかな北の藤なみさかえゆく世を
比叡の麓なる渡邊某が八十賀に

百とせの高ねにのぼれ比叡の山はたちばかりの今ぞ重ねむ
加藤氏の母の七十賀に寄松祝といふおとを

千代ふべき君がかざしの松上に加はる藤のはちかつらかも
大和守久敬が七十賀に

かきわはせ調へあせせてうたふらむ君が手馴の大和おとは
八田知紀が母の七十賀に寄葵祝といふおとをよみて遣しける

たらちねのみ親のもりの葵草かくらむ千代の祈る子のため
人の七十賀よめる中に

なゝそぢの心の胸にまかせつゝ千年の坂も乗りやぶゆらむ
七世へし其則とほき斧柯のまゑながしめにきみを見るらむ
或人の四十二の除厄を賀して
の布るべき千年の坂もまら雲のよそぢの上にとえわたる哉

和泉なる里井の家に七人の子ありてあるいその家に富みあるの外に榮えたるを賀してよ
みてつのはしける

おなじ國人の七十賀に

仰ぎても老やたのしむ七つ子のさやにそれく治れる世を
七曲の玉の緒ながく見ゆるかな千とせ萬世ありとほきらむ
夜過關屋 木幡山ふけたる月に關もりのゆづるつまびく音きおゆなり
旅 いにしへの草の枕のえらねども旅のねざめぞ露けかりける
旅 わし引の山おえ根おえ越來れど旅のうきやといふ人もなし
旅宿 曉 曉と夜になりぬれど鳥のねもきおえぬ山にたびねしてけり
他郷 涙 我袖にえらぬ露おそおられけれ草木が上のかはらぬものを
遣唐使餞別 浪速瀉みをつくしまでやらはせせば同じ別もなぐさめてまし
蔭山秀雄霜月ばかり君の御使ふて江戸に赴きける馬のはなむけけるついでに詠める
思ふなよ別れんほどの遠けれどかざりの見えじ武藏野の原
磯野直章が信濃國へかへりける餞しける夜
立かへり又音づれよむら時雨いくたび袖のぬらまきともよし

題えらま 住の江のさしかたばかり戀しきに昔に似たる浪もかへらま

寄道述 遠からぬさかひなれども二度のあひかたし貝いかで拾はむ

寄鳥述 言の葉の道の奥なる淺香やま影だにみまてやみぬべきかな

寄馬述 鴛鳥のいきながらへて後におそ沈まぬ身とも世に知られぬ

寄馬述 心せん驚のあさりの下におり世の渡らひもかくおそあるらし

行路述 老おけりつひに心のおそ胸の鞭うたれつるかひもなくして

夢 ぬみなれし山の岡邊の道に生ふるわなづるにおそつまづきおけれ

世路如夢 ぬらましの事皆夢にみゆる哉ぬるまばかりや我世なるらん

題えらま 定めなき世中よしや夢ならば愛事のみ見えまもあらなむ

夏無常 ながむれば涙ぞおつる花やうき月やつらきと人のとふまで

仙院崩御をかしおみ奉りて ちりぬとも惜みけるかな蓮葉の下に結べるみをえらまして

限ありてれりぬの雲井二度のいかなる空にうつりましけん

千代どのみよばひし物を芦鶴の聲くもるにに至らざりしか

諒園のあろの正月一日芝山宮内大輔の君より梅花ふゝみがちなる三枝ばかりによみそへてさまひたる

春もけふさち枝の梅の初花を君がかざしにたをりてぞやる御かへし 世中のなみだに花もたぐふらむかざせば袖におぼれける哉 龜山院の御陵のわたりにて

手向ふと草のたもとやきりつらむ幣とみだるゝ花まゝき哉 宣阿翁の百回忌に人々に歌まゝめける時懷舊の心をよめる

百歳をふる里にけふかへりきて昔まのぶのつゆはらふらむ 芦 間 鶴 打はぶく鶴の上毛もまじるらむ芦がはなちる住の江のうら 龜 浮木のみ何かいはいはむ萬世の春にあへるもちぞりならせや 龍 天雲のよそにさかめや世中になつといふ名もかくあそあるらし 鯉 朝づく日のぼるを淵の上に見ておひのむ心ありげなるかな 山蔭いつかふる道も遠しかつ家もわろくなれりよき所をなど人のまゝめける頃放鳥といふおとをよめる 心から身の大ぞらにはなち鳥くみ緒までたる籠も何かせむ

山田清安が通天橋の紅葉に男山といへる酒をそへておくりけるに

今の世に見るかげもなき男山くみてむかしの色にいでなむ 奈良なる人のもとより鈴虫を籠にいれて贈りけるを道の程もやつれまふりいでたるを 聞きて おの中にありともまらで春日野の野守と我をみてや鳴くらむ 小澤芦庵がもとへよみて遣しける

身いつかる道はた遠しいかにして山のあなたの花の見るべき 芦 庵

かへし 年をへし我だにいまだ見ぬ花をいと空く君の折りてける哉 本居宣長と東山の吉水のはどりにて物語まけるついでに都此別れ難きおとなどいへるに たゞ一め見えぬる我のいかならん古さとさへに忘るてふ君 宣 長

かへし 故郷の思はせとてもたまさかに逢見しきみをいつか忘れん 赤尾可官がもとより大きやかなる紅葉の枝にうるのやもてつゝみたる小鳥をそへて詠みておぼせたる

村鳥のおちばにまがふ冬山を一人みつるがをしきなりけり

かへし 其どりの翅えにけりいざ我もとびたちぬべし君があたり
修學院のどつ宮の圖紅葉あり時雨ふる

君がため早くそめむと大比叙の雲のとなりなる時雨かな
花の上に月いでたるかた

大空のかまみの奥にまむ月のはきも花のにはひなりけり
鐘櫃のかた 我のあれ南の山のやま人ぞきみがいのちのかけじくづれじ
鉢たゝき 口あらばたゝけやまをせ木枯のふくべも獨あゑたてつなり
壽老人ねぶれる圖

芦たづのかへる雲井の遠ければまつ程千代の夢やみるらむ
懸想文賣のかた

是を見よ花なき里にままばあそ翅にかけむふみもたのまめ
花使のかた 初雁もねたしと思はん八千草にかけし雲井のけふの玉づさ
梶葉に鞠 久かたの天つ星合の手向あゝの夕まりのうへやなからん
職人盡の白柏子くせまひの圖

かへままのまを花の袖なれどなまめき馴しくせの見えけり

山水のかた いざや今おき浪白しおぎいでて出たる山のつきのかげみむ
玄 女 むなしきの水の心のふかき江に何ぞのうつる影をたのまむ
月下にをとお女をどるかた

月にねぬやもめ鳥やうかれ鳥うたへ諷はん明けぬともよし
狸腹鼓うつかた

ふけぬるか時の鼓のうちやみてあらぬ音おそ野邊に聞ゆれ
紅葉狩といへる舞の圖

限われはゑひをまゝめしもみぢ葉のはのほもさえし秋の霜かな
うつば猿のかた

かくもよくつよき心をどる弓のかへりて末に諷ふらんまで
蘭に蜻蛉をり ぬていたちくゝてぬてふ草の上に羽もまやめぬ秋のかげろふ
撰 虫 百式の大宮びどのえらびあひもれじと虫もねをやなくらむ
翁稻をおひて田づらをゆく童あどに従へり其童鮎子を草にさしてうち見もてゆく圖

老人のやしなひ草にとりそへむ年ある秋の小田のいろくづ
俵栗のえだ 山づとに言傳さへもそひてけり初紅葉がりおもひたちてむ

釣瓶に雀をり 汲みきて、人影もせぬ古里の板井のみづにあきかせどふく
白牡丹のかた 深見草とめるまおどの花の色をうかべる雲と誰かまがへむ
窓に夕顔の咲きかゝれるかた

いと白し脊面のまどのたそがれに人かあらぬか花の夕がほ
龜ふたつ行くかた

外になしいざ萬代のよろづ代の友とや龜のさそひゆくらむ
布袋空をうち見たる

あまりにも其曉の遠ければまづおのくれのつきやまたまし
操綿婆の圖 花ならぬ翁草おやさせわたのつゆ色もなきまさびなりけり
土佐日記なる宇多の松原のかた

敷島の宇多の松原つばらにものおれば残る千代のあどかな
海原の巖に鶴鶴をり

浪間よりとびわたりきて教へけむ神代の尾振今も見えつゝ
天臺の石橋にて獅子の子を試るかた

ふきおろせ谷ふかみ草ひるがへりのぼるも風力なりけり

衣通 姫 おどのはの玉のひかりも唐衣てりおそとほれよろづ世迄に
小侍 従 世中にありわづらひし昔おもまさりてつらき鳥のおゑかな
静 女 松の上にあふといまれど鶴が岡雲井戀しき音をやなくらむ
李 夫 人 はかなさをせめて思へばありし世も煙のうちの姿なりけり
季 札 つるぎ太刀心おかねてかけたれば其なき影いどくやうけむ
陸 羽 いかにして木の芽はるゝ雁がねの羽風高くも薫りさにつけむ
古畫の遊女 雲の上にあまがへる松の位山まおどならぬもなつかしきかな
瓢 行末いともなれかくもなり瓢かけて思はぬ世おそかるけれ
忍 草 ねく山の榎の朽木のまのぶ草もどのはなりと思ひけるかな
井 草 さよふけておのづからなる車井のおゑ物凄きおのねぞめ哉
朝 市 朝づく日出ぬ先おとひんがしの市に商なふはよのひろもの
瀧 尾 社 落たざる瀧のをにおそ亂れけれおひみなかみのなせる白玉
神 祇 かつらぎや長尾の松の限なき世々のみしめい神ぞひくらむ
寄道神祇 間ならでたどくしきい目に見えぬ神をまるべの敷島の道

幸逢太平代 うらやまき御代ふいあひぬいざや子ら硯の海の玉拾はなむ
 寄 海 祝 よせくめりもろおし舟の貢物かきをつくしの海もとゝろに
 寄 弓 祝 はふり子がとるや真弓のふして祈り起てうたふも君が世の爲

桂園一枝拾遺終

新學異見乃序

言乃葉の道の其もと世にたがひ來れる事大よそ千年に近し吾師たま〜
 おれを見出る事ありて此年月より〜に説を示し給へれど彼その本を
 去らざるの眞玉もつくり玉も見じかちがたしとや師のをしへ大方の故
 きによりまべての誠をもとせざるより岡部眞淵の古學を倡へしおもむ
 きも同じおゝろに思へる人多し彼の今にそむくをもて古へとよび巧の
 なれるをもて眞心と示し大御世の平言をバひたまら俗語といやしめて
 さい古き世にのみ反らんとまおの學一たびおあなれてやう〜そ此
 害はひ人の身に及ぶものあり言の正しからざる罪大いならざらんやさ
 て其うたへる歌つくる文を見るに物のわかれざるやうるま人と語らふ
 如く事のためがへるやいるま詞きくらん心地して更に此大御世おゝろの
 まがたとも思ひなされぬの淺ましからまやおよそ言の葉のみやぶひ
 なぶりのもはら調べのなしのまゝなる事を去らまかつ神世の歌の神世
 の俗言萬葉古今の歌の大泊瀬の宮より今の延喜の御世までの俗言なる

事をわきまへざるのあやまち也されば吾師をどし秋かも河の一月
 樓に病をいひいませし時命のきいもはかりがたしざる方のけぢめい
 さゝか辨へおきてんとて彼翁のかける新まなびといふ書いもいら其道
 とせる心を去るしたれば其一章を論じてなほ細かなる誤いさておかれ
 ぬさるゝ病のうちにて筆もまゝみがつかつゝさばかり心いれて物ま
 べきものにもあらざればなり深き旨の萬葉古今の抄どもの成れるにつ
 きておれを見れば明らかなるべしさいへ此巻を去をりとして己が心に
 立かへり見ばまゝどの眞玉いもどより我家の寶にして今更門よりしも
 入りくるものにはあらざる事を知りいくらの玉のまゝやくありともか
 つて惑へる心なきに至るべし此頃再び書きあらたむるにつきて其よし
 いさゝか申しおき侍るもの也あなかしお

文化十年きさらぎ十日

平直好

新學異見

香川景樹

新まなびに云

いにしへの歌の調をもはらとせり。うたふ物なれば也。
 景樹按らく、いにしへの歌の調も情もとのへるの、他の義あるにあらせ。ひとへの誠實
 より出れば也。誠實より爲れる歌はやがて天地の調にして、空ふく風の物につきて其聲を
 なまが如く、わたる物として其調を得ざる事なし。おれを雲と水とに喩ふ。雲の在や騰て
 浪にまがひ、垂りて花をあざむき、拖きて褶となり、屯まりて峰をなま。水の行や、亂れ
 て文をあり、漉へて藍をそめ、凝りて鏡をかけ、迸りて珠をなまが如き、百に千に變態を
 盡せといへども、みな意ありて然るるに非ず。たゞ風によりて飄ひ、地に就て下れるの
 み。彼言の葉も斯の如し。短き短歌となり、長き長歌となり、見る物さく物のまに〜
 其狀貌あらわれざる事あたはせ。是やがて情の物にふるゝ形容也、さる中にこのつから調
 なりて、巧めるが如く飾れるが如く、其奇妙たぐふべき物なきに至るの、天地のなかに斯
 誠より眞精き物なく、斯誠より純美き物なけれを也。れば往古の歌い、このつから調を

なせりといふべし。意を用ひて調べなしたる物と思へり、大錯へる事也。本の差ひ毫釐のみならねば、末の謬り究まりなきを奈何せん。又往古うたふといへり、大よそ聲を引くの稱にて、いま譜節して謠ふのみをいふ如きに非ざりけらし。直にうそぶき長息を本なるべき。されば公庭に訴ふるなどのうたへも、悒鬱しき懐ひを聞え上るの稱にて、長歎の意よりいへる也。鶏の鳴をうたふといへるも、其ひく聲の長ければ也。また事有りていひ喧ぐを、世にうたひるなどいふも、古意の遺れるなるべし。ざるを故に搆て謠ひ上るい、いよ、嗟歎の長きものなれば、猶うたふといひむ事論なし。後世ざる方にのみ言慣たるをもて、歌の曲調にかけたる後、となへ出たる稱也と思へり、なか／＼本末を取りたがへたるもの也。まか調べなしてうたひん、一たび歌と詠出たる後にして、其稱の本といひ難し。往古といへども見るもの聞ものにつけていひ出せる歌、まか悉く綺飾て、謠ひ上るものにあらざ。されば後世よむといへるぞ、やがて往古のうたふなるべき。勿論いにしへよむともいへり。ざるを往古にして、必謠へるもののみ思ひとれる、歌といふ稱み泥めるの謬なるべし。

その調べの大よそ、のどにも、あきらにも、さやにも、をぐらにも、おのがまし得たるまふ／＼なる物の、つらぬくに、高く直き心をもてき。且その高さ中にみやびあり、直き中に雄々しき心ありある也。

按るに、大よそののどにもあきらにも云々といへり、四の時のつらに天地よりせうち得たる自然の調をさし、つらぬくに高く直き云々といへり、往古の淳朴なるならしし心をさせる意なるべし。此論の末にいへり。

何ぞといへば、よろづのもの、父母なる天地の、春夏秋冬をなしぬ。そが中に生るゝもの、こをわかち得るからに、うたひ出る歌の調もまか也。又春と夏と交り、秋と冬と交れるがおど、彼此をうねたるも有て、くさ／＼なれど、おの／＼それにつけつゝ、よろしきまらべの有りあり。

按るに、まかに天地の運行みなぞらへて、うたひ出る歌の調もまかなりと云るをみれば、又さる意をも得たるに似たれど、まの尋常からん理りに随ひていへるのみにて、恐らくの已が處どあるの實論にあらじ。さて、前み後に其意あはざる也。まべて議論高しといへども、空言にして誠實なれば、聲を逐ひ影を捉に似て、なか／＼初心の感ふべきものぞ。いかで新學のたよりとならん。おれを懼れて已がどちの爲に、いさ／＼か其見る所をかいつくのみ。

まかれば古へのまどを知る上に、今その調の状をも見るに、大和國の丈夫國にして、古

へいをみなもまをらるに習へり。かれ萬葉集の詠の、凡丈夫の手ぶりなり。山背國のたをやめ國にして、丈夫もたをやめをならひぬ。かれ古今歌集の歌の、専ら手弱女の姿也。

大和の國を丈夫風、山城の國を手弱女風の國也といへるの、たゞ世の聽を驚かすのみならず、かつ其微ありければ、誰もさあそと思ふべし。まゝと其説の如くならんに、後世も大和の國の丈夫風なるべく、往古も山城の國の手弱女風なるべく理り也。然るに古への大和も山城も丈夫風にして、後へ山城も大和も手弱女風なるのいかに。いと怪しむべし。又次につよくかたきを丈夫風とし。のどかにさやかなるを手弱女風とせるも從がたし。おの御世へ流行るゝまがたありて、萬葉集の頃の質朴にして木強く、古今集のあるゝ文華にうつりて清柔なるべし。さるゝ時運のまかる所にして、唯一國の上にかけて論らふべき限にあらざ。所謂さやかなるゝ文華の風化にして、おのづから都風なるべく、強き質朴の氣象にして、おのづから鄙俗たるべき理り也。其世の情態かくいさゝかも偽なきぞ、道の正しき調なりける。されば文も質も其實にしもかなはず、孰れをとりいづれを捨ん。然れどもつよき世のつよきながらにして、女歌のめゝしく、さやかなる世のさやかながらにして、男歌のめゝしく、其跡さらに同ふべきものに非ざ。されば昔今の風俗をか

たるに、男女をもていへるのいとも惑ひしくて、比類を得せといふべし。此論なは次にいへり。

仍てかの古今歌集に、六人の詠を判るに、のどかにさやかなるを、姿を得たりとし。

按るに、是の彼序に、僧正遍昭の歌のさまのえられどもまゝと少し、とあるをいへり。おの歌仙の上につきて且く其得失を論らへるにて、實まくなしといへるに對へて、其跡をば得たりといふのみ。此跡を抽出て、世の標準とせられしに非ざる也。されば餘此歌仙の、其跡を得せといふに非ざ。各さるべき跡なからんや。中に就て遍昭にのみ、取立て其さまをいふべき謂れあり。其歌を味ひて知るべきもの也。また遍昭の歌の、澹率たる調のわれど優閑なる跡のなし。まへて往古の歌をかたしといひ、後世の歌をのどか也といへるも、打まかせての當ぬ事也。されど又つよしといひさやか也といへるの、傍らのみ且く得之ざるにもあらねば、いへるに從て論じおさぬ。

強くかたきを、ひなびたりといへるの、

按るに、是も彼序に、文室の康秀の詞の巧みにて其さま身におはせ、いはゝあき人のよき衣きたらんが如しといひ、また大友の黒主の、其さまいやしなどいへるをさせる也。まづ康秀の歌を鄙しき跡にいへりと見たるの、いみじきひが事也。かの序の評の、詞の華過て

心の實に稱^{カチ}ざるをいへるにて、更に鄙しとせしに非也。今の賈人の喩へに泥みて、其躰近俗と書る眞字序の説を受し、古説につきていへるもの也。さればいやしといへるの黒主の詠のみ也。さて黒主の歌の、意ばへの遍昭に似たる所ありて、躰のいたく異^{カガ}へり。實に鄙しきさまある也。今ふれを強く堅しと云るの全^{ムク}にかなざるにもあらねど、康秀の奢^{オホ}りたる躰をも、一つものに思ひなせるのいとあやなし。まべて實に其躰を實^{ミヤ}知たるものにあらず、たゞ古人の評に従ひて、また其評を詰^ツれるのみ。抑上つ世の物ごと質素にして、後の皇都^{ミヤコ}の全盛^{サカシ}なりし時よりふれをみれば、天皇^{スノヒミコ}の御所^{カサミソ}爲より、大宮造^{オホミヤツクリ}に至るまで、總是^{オホカガ}の鄙^チき風俗のみぞ多かりき。さればうたへる歌もいやしからん、おどわり然るべきもの也。其躰の鄙しき鄙しきにして、其心たふとさ所なからむや。いやしといふの後より言るの稱ひて、其大御世の罪ありあらせ。上つ世の歌仙たまく鄙しき躰をのがれざるの、其世の姿なれば也。黒主の華美さかんなる御世に當りて、卑俗のまらべあるの、古人の其世にかなへる類ひに非也。されば其鄙^チき躰大に違へり。其歌をとなへて知るべし。譬へば往古の鄙しき躰の、冬にあたりて寒しといへるが如く、時に感^カざるの弊ありて、真心の直さるもの也。黒主の歌の鄙しき、夏にうつりて寒しといふにて、時の躰にあらざる也。寒しといふ一つにして、其趣^マ異なるを知るべし。

その國その時のまがたを姿として、ひろく古へをかへり見ざるもの也。

按るに、其世の躰^{ノカガ}を躰とせせして、いつの躰をまがたとせん。まゝ廣く古へを云る事、遠く神世を論^{コト}りての歌のまじも定まらせ、まなほにして事のおろわき難かりけらしといひ、近き昔をさして、柿本の人麿なん詠のひまなりける。又山部の赤人といふ人ありけり。歌ふあやしくたへなりけりといひ、此人々をひきて、又まぐれたる人も、吳竹の世々にさかえ、云々などいへるにあらせや。殊に人麿赤人^{ヒツリ}を、聖^{ミヤ}といひ妙也といへるに、深く古へを仰ぎたる意をみるべし。

もの四の時のさまゝあるなるを、まかのみ判らむ、只春此のどかなるをのみとりて、夏冬をまて、たをやめぶりによりて、まをらまをさみをいむに似たり。

按るに、躰意^{ノカガ}の己がさまゝならん事もとより也。されば序中にも、人麿赤人を始め、六人のくさくさなるをも品^{アキツク}隋^スひて、その得失をいへるならせや。また集中にも、俳諧の異躰あり。大歌所の古風あり。かつ奈良の頃の歌も、少なからぬを見て知るべし。唯のどかなる歌のみとれるにあらせ。大躰^{オホカガ}の萬葉どかはれるの、大御世のまがたあして、撰者のあづかる所あらせ。さるを遍昭一人の評を取て、さやかならぬ躰をば、弃たらんやうに思ひなせるの、いたく意を得ざるもの也。却て彼はゆる、強く堅き躰をのみ尙むおその、

冬の冷まじさのみを取て春秋をきて、丈夫ささみふよりて、婦女風を嫌ふ似たれ。さらば四の時さまぐなるをよろしと云る方に、なほ進ふべからんかし。

そも上つ御代、その大和國に宮敷まし、時の、願ひの建き御稜をもて、内に寛き和をなして、天の下をまつるへまし、からに、いや榮えにさかえまし、民もひたふるに上を貴みて、おのれもなほく傳のれりしを、山脊の國に遷しまし、ゆ、かしおき御稜威のや、劣りにおどり給ひ、民も彼おつき是におもねりて、心邪に成行にし、何ぞの故と思ふらんや。其まをらの道を用的給のせ、たをやめの姿をうるのしむ國ぶりと成り、それがうへにからの國ぶりに行のれて、民上をかしおませ、よおま心の出來し故ぞ。然れば、春の此どかに夏のかしおく、秋のいちばやく、冬のひそまれる、くさくなくして、よろづたらにざる也。

按るに、おの一段の専ら大御政の上にしおれば姑く置てん。勿論よしやあしや、得窺ひも知り侍らせ。唯歌に關係るあやしき致をいひ試み侍るあり。されど古へ今、その大なる物の更に變るべきにあらせ。中につきて、後の古へに優るれ事なきにしあらねば、古へに後の劣れる事少なからざるも、また世運の常なるべし。深遠見ん人の、その古へに變らぬ物と、その古へに優れる事をえり、淺近てみる人の、其古へに變らぬ物を遣して、其古へに

劣れる事をいはんのみ。

古今歌集出てよりの、やはらびたるを歌といふとおぼえて、をしく強きをいやしとせり、甚しきひがおとなり。

按るに、雄々しく強きの質朴の躰なるべし。質朴の鄙しからん理りの上にして、論なきおど也。いかでか僻事ならん。是を丈夫婦女になぞらへて、男の尊とく女の卑しかるべくいひなせるの、道理を變亂てかの初學を惑はせるもの也。さう定まれる剛柔文質なども對へいふ時の、さばかりの差別みえがたきによりて、故意お丈夫婦女のふりにあてたるの、驚てりといふべし。且く男女の上を去れて見んに、彼説の如きの、束帯して立る姿を柔弱て賤しとし、兵革もて鞏めたる貌を、剛強て貴しとせる也。さる理りあらんや。

これらの心を煮らんには、萬葉集を常にみよ。且我歌もそれお似やと思ひて、年月によむほどに、其調も心も、心にそみぬべし。

按るに、おのゆ、しき妄論なり。歌の情のゆくまに、ひとり調べなりて、思慮を加ふべきものならねば、古へに擬似んとせるの違あらんや、若おれを似せたらん、やがて飾れる偽のみ。又似せんとして似べきものならんや。おれを似せて似たりと思ひをらんといと無慙し。抑歌のまらべの、天地の中に含孕り運りて、まらせ、その大御世の風躰を

なまもの也。また人々の性のまゝに、稟得たる調あり。そのおのゝ異にして、其面のかいれろが如し。まか各異なりといへども、その大御世の風をへ出るべからず。是を且く機に譬へんに、かの性質の調を徑となし、萬端の思ひを結となして、天地の心のまゝ織りなせり。時ありての上機に織出し、時ありての下機に織出ま。それやがて大御世のまがたにして、或の味織の錦となり、或の荒布の布となるも、みな彼手に任せて織成もの也。されば狼に安排ともべきものに非ざる也。賢さに移し上れるに似せんとせとも得べけんや。然るに此吟詠するわざを、舊歌を讀て事變に達せといふ、修爲の道と混つにして、氣質變化など云らんかたお思ひとまると、いたく意得るがへるもの也。若かの所謂たをやめ風の國ならんおの、其歌もたをやめ風ならんおその、やがて天地の眞實のまがたなるべけれ。さらんをも丈夫此風にならへといひ、又萬葉に似ばやと思へおと云るの、偽を教へて誠を亂すもの也。切恐るるかたさまの歌をのみ、年月によみもて來べ、まらま^{トホキ}虚遠にはせて眞心を失ひ、竟に狂疾のしくさへ成り行きて、いと^{カラサヘツ}缺舌さくらん心地ぞべき。歌のうたひ上る即お感ざるもの也。かたぶきて其意を悟り、たづねて其調を識るものならんや。されば誤お人もして聽^{キキマ}焚はまべきものに非ざるなり。今の世の歌の、今の世の辭にして、今の世の調にあるべし。然れども其受得たる調、己がさまゝならん

中に、おのづから萬葉古今に似たらん風、其外くさゝの韻、いかでか^{イテコ}出來ざらん。さいさて今の大御世の調の外に出ることあたね、それなほ萬葉古今の古風にあらせして、實^{スガ}今の大御世の風、後の大御世の風に移らん後ぞ、明らか^{カハシ}に回顧らるべき。

さるが中に、萬葉の撰みぬる卷の少なくて、多くの家々の歌集なれば、あしき歌、あしき言もわり。いで今撰^{イマヒ}としまねばんに、よきをとるべし。其よきを撰むの難かれど、既いへる調を思ひてとるべし。又本のいどめでたくて、末あしきもあり。その本を學びて末を捨べし。是をよくとれるの、鎌倉の大まうち君也。其歌どもを多く見て思へ。按るに、既にいへる如く、歌のおのが思ひを盡すの外なれば、何を撰とし何を學ばん。また鎌倉の右府の歌の、志氣ある人決て見るべきものにあらず。況や是に倣ふべけんや。凡古歌をみることを貴むの、其言をな一偏の實心に出で、人情世態かくる、限なれば、治亂興亡の機おのづから彰著く、是を讀て其意を得たらんに、教諭をまたまして温厚の徳を成べきも、亦難からざるが故也。且傍ら己が詠歎するも、古人の偽飾なきに倣はんがためぞ。然るに右府の歌の如く、ことごとく古調を踏襲め古言を割裂たらんに、後より是を見んお、或人の藤原平城の上つ世に似たりと貴とみ、或人の情を枉り世を欺くの作也

と卑しむべし。其卑しまんいさて有なん。其尊とむに至りてい、害はひ勝ていふべからせ。意を用ふべき事也。かの唐詩作る者の、大御世の語をまて、大御世の調をはなれて、ひたすら彼國風に似せんとするの、同じ學びに思ひとりなば、大錯ひ出さんものか。

まかまがに、又古今歌集を見るべし。あひ凡女のまがたなる中に、よみ人まらえぬ歌に、奈良の朝の歌もあり。且そを後の言してとなへかへたるもあり。今の都なるも、始め三嗣ばかりの御代い、よろづ古への手ぶりありて、誦もなかばい古へをかねたり。よりて此集にい、よみ人まらざてふにお勝れたる歌の多けれ。それより後なる中にい、おまかに巧て心深げなるを去るべし。本撰める物といへど、古へにかへらんとする時い、なごか更に撰みのあらざらむ。

按るに、集中の歌の心細やかなるい、細やかなるべくして細やか也。かの古學者流の細やかなるべきをも、搦へて大らかに調べなき類ひに非ず。又心深きい深かるべくして深きなり。専門家の淺らなるをも。設て深くよみなまに同しからんや。心細やかなるも心深きも真心のまゝなるもの也。況や古歌によりて古へに反らんとするおど、既にいへる如く更に有まじき事なれば、是を去り、是を擇ぶなどいふべきに非ず。たゞ其情を在得べし。歌いおのが情を枉て、古調に似せんとせるばかり、巧みの甚きいあらざるをや。

かく意得たる後にい、後撰、拾遺の歌集、古今六帖古き物語ぶみらをも見よ。かくて立かへり、古事記、日本紀をよみ、續日本紀の宣命、延喜式の祝詞の卷などをよく見ば、歌のみか、おのづから古きさまの文をもつらるべき也。首章終

按るに、此に云るくさぐさの書籍ども、學の道に志さん人の見るべき事論なし。されど今歌よまんぞる笠蹄にい、更に用なき事既にいへり。さて文の義を本とし、歌の感を要とせ。譬へば文の華也歌の香也。華の其容ち語るべく、香の其芳り説得べからぬが如し。只此差ひ有る事を知べし。文も亦其御世の風貌ありて、古今同しからざることい、所謂宣命祝詞をはじめ、世々の撰集の題詞、後々なる物語、或は日記、道の記の類ひまで、一わたり看過なば、おのづから明らかなるべきもの也。さて古へにしてい、古へなるおどを知りて今に行ひ、今にしてい今なる事を知りて古へに依べし。昔も今も文辭いたゞ、義理の達らんのみを要とするを、己れだに解得ぬ遠御世の古言を聚めて、今の意を書きなさんにい、違へる事のみ多く、誰かいうまく聴わく人あらん。されば苟且にも今をすて、古風の文をかく事なかれ。さる例もなくさる理もなきおど也。さゝりて歌と別ひて、思慮を用ふべき事なきにあらねば、時と事とに隨ひて、おのづから体格あり。其体格の學ぶべし。其學ぶに意得あるべし。似せて似べからざる事など、概略の歌につきていへるが如し。参互て

思ふべし。さて卷の末まで書了ぬべきを、立かへり見るに、次々の諸章皆事の末にして、いと煩瑣しければ、説き遣せり。此一篇の主旨もて推して知るべし。

新學異見終

古今和歌集正義總論

香川景樹

景樹竊お考ふるに、大同弘仁の大御世より、詩學やうく盛んおして、寛平延喜のおほん時不及びてぞ、殊お甚しく侍り々ん。朝となく野となく、詩おそれと尙びて、大和歌の言痛からぬを、めしき戯れと卑しめて、正實ならんゆふてい、是を咏ふも面を伏せるに至れり。歌の衰へたる事も、是より甚しきと非ざり々らし。紀氏おの衰弊を憂ひ給ひて、もとより詩歌と其音清濁とをかれ、其義幽顯のさかひある事をひそくお辨じ、又いおしへ今の大和歌をほごゑて、そまが中より勝れたるを撰びて、千首廿卷となし、古今和歌集と號けて、奉り給ひしより、大和歌の道再び古お復りて、今お迷べり。此集を覽ん人の、まづ撰者の心えらひを知るべく、唐歌大和歌の同じからざる差めを知るべく、大御國の異邦の風俗と、いさく違へる事を知るべき也。

古語おいとく、歌と詠む事の難さお非ぞ。よく詠む事の難さ也と。おのれ按るお、よく詠む事の難さお非ぞ。知る事の難さ也。是を知る時と、よく詠む事も難からじ。我大和歌の

心を知らんとならば、其原とある大和魂の、尊と事を知るべき也。いとゆる人情を察し、事變を識るが如きと是が末也。その大和魂の尊と事を知らんとならば、まづ大御國の尊と事を知るべき事論なし。後世大御國の萬國に優れざる事を、言擧ぐる人多しといへども、まことに其本原の、あやに尊と事と實理を知らざり。荒唐悠遠の旨をのぞ主張して、かつ異見の臆断み出るもの少からねむ、信ざる者も竊に疑ひ、信ぜざる者の嘲々るに至る。いとんや廣く他方を示さべけんや。そもく我大御國大八島の本號を、豐葦原の水穂の國としも稱へつるに、八百萬の國に優れて、其水穂強く堅く清く甘々れ也。其清きや玉に似て其堅き事礫の如し。もとより水穂の稻穀の總名にして、餘の穀類を陸穂といふに對へるの稱也。水々しき穂也と思ふると謬れり。さて其強く堅き事、其土の強く堅きが故也。其清く甘き事、其水清く甘々れ也。其土堅くして壞らく事なれば、其水清て濁る時なく、相交りて相汚れざる、その水土の中孕まりて、生とし生出る物、また何物も萬の國に優れざらん。獨人命の本なる水穂をしも抽出て、群品含めり。扶桑の高き金桃の重きも、何ぞ異しまん。貴賤長く定まり、男女和らぎ亂れざる事も、夙くあゝに萌せるをや。さるに開闢の始めより、四海の高き最上位して、天機とじて到るとある神化生じ、其神達鎮領ものし給へるなべも、豊祭のぼる天つ日の、本つ御國と定まり、底つ岩根の萬づ國に先

立て、毎朝照徹らせらる大御光の下に、生固まれる豐葦原の中つ國內、その水土いかで剛潔ならざらん。獨神仙の靈域也と、萬邦仰ぎまつるへるに、うべも尊と事と旨ある哉。其神武不殺の化ゆきとらひ、千萬神の、神鎮め鎮め給へるはあゝ、葦牙此下根いや固く結ばれ、浦安の浪いと清く立となれて、生ゑてる青人草の、あやも尊と事とあらゆる所行と姑くかく。言擧せぬ言靈の、神ながら幸とふ中も、事と咏とん嗟歎の聲、いので萬の國に秀でざらん。萬の外國、其聲音の濁濁不清なるも此に、其性情の濁濁不正なるより出れば也。其性情の濁濁不正なるもの、其水土の濁濁不潔なるより生れ也。聲音の性情の符、性情と水土の靈ならん事、更論を待つべうらさ。まうも濁れる中みありて、善と能見し西土の、芳野の花の美善を盡せるも似るも、百千鳥侏離のあちたさを免れられ、彼いとゆる、樂しびて淫せを哀しびて傷らざらん、性情の正を得ん事、ほとく希なるべし。況や黄なる泉に染紙の、いとく喧擾る響ひをや。猶餘んの萬づ國原、其音きべて單直清明なる事、事とざるに、我天つ日靈の大御照しまさらん、大御光の遍き際りに疎れば、水土自然に剛潔ならせして、彼雜はり濁れる柔土弱水の中、涵育が故也と知るべし。されば其謠へるや、譜節して是を文どり、鐘鼓もて是を奏すといへども、なほ其音清爽ならせ。其調朦朧なるをいふべし。獨我安積香の山の井淺からせ、清濁る影し見えぬ、

難波津の何とをこめて、善や悪やととん。脣肉の空しく、内木綿の洞らひおして、天霧
 させる隈しなれば、金石を假らせといふとも、咏ふさいちに天地を感動し、神人和樂ぐ。
 何ぞ百獸の舞をうらやまん。鶯蛙の聲も、あやに聞くべきふし〜の、いづれう歌ふわら
 ざらんと、天然の實理を推して歌の歌さる本の心を、序中ひそか論し給へるを思ふべし。
 擇びて後邪なき類ひならんや。

古昔を考ふるも、凡唐歌之其志を言ふもの也。さるの専ら思意より出て、其義理おのづの
 ら正しきもの有らんおの、是故政治お施おして其益少なからせ、其用廣きもの也々らし。俗
 官おれを擇び采て、更お其聲を永くし、其節を諧へ其律お協へ、ほひお其調成て後、樂と倡
 へ頌と見かちて、朝廷お奏し郊廟お薦むべし。お、お至て始めて我大和歌の、咏ふまなち
 神人を感じしむる妙用お、粗並ぶべき事あるお似たり。大和歌のもどより性情を述ぶるの外
 なく、思慮お涉るべきものならねば、其言より取く其心をさなくして、いふべき義もなく、聞
 くべきの理ある事ならん。然も義理なきもの、實お義理なきにのほらせ。性情の自然お
 出て、其義精しく其理深くして、人智の測り識るべき限ならねば、我より姑く義理なしとい
 ふのこ。義理を弃て天地何物う有らん。義理を離れて天地何おう感ぜん。譬へば道行人の
 ゆく〜遙峰を回視お、見ゆるん限の峯有りといふべく、やうやくに隔て、目路の及ばぬ

お至りての、峯なしといふんの外なしといへども、なや其峯の高く聳えて、雲井の奥おあて
 るが如しと知るべし。古語お、僅お理おこされば天地の感を塞ぐといひ、義をもて求むれば
 性を離れて遠しといへる、義何ぞ性お遠からん。理まゝ感を塞ぐべきものからんや。是又
 人智の量れる義理の、眞義ならせ至理さららんからに、反て神人の性お拂り、實の天地感
 老るに足らざるもの也。情を離れて道を求むる徒の、識得べき限ならんや。當時の人此理に
 達せせ、政教お補ひお、日用お疎きを見て、大和歌の唯一時心をやる翫とれとめて、漫り
 に好色の媒どのと思ひおせるを陋しからせや。されば我單直清朗の聲を詠れととして、反
 てかの渾濁不正の音を尊とび慕へる餘りに、其方の博士をさへお置うれさり。さればたま
 く詠吟さるも、彼おのこ倣ひて、屈したる理をのぼへつ、さらお歌としをわらさめる
 を、反てたなき事お思へらんおあぢきお。此時おあさりて我紀の朝臣、獨此陋弊を歎き悲
 しび給へる事久しきに、時ある哉、まう卑しめて世お數まへ給とぬ大和歌をしも、もろく
 の事を弃給とぬ餘りお、撰むせ置くるべき大御言より下り、まゝ人もおたわれ我紀の朝臣、
 其勅をしを奉承り給へりし、實お千載の一遇おして、八雲の道更お開り、敷島の浪再び
 復るべき、瑞運おりけらし。
 或書お、皇國と萬邦お優れ〜といへども、往古より聖者出せ。おの故お漢國の如き禮樂

の製作あくして、大典の缺けざるを惜むといへり。予をもて是を觀れば更お然らば。我大御國の天つ神代の始めより、天地陰陽の自然に則どり、尊卑別れて長く定まり、男女和らぎて竟お亂れせ。大凡神お奉事り、人お交らふ舉動の、清まり慎しめるといふも更也。或て其八十系亂るゝ事あく絶る時あく、正しく傳へて萬古一日の如し。禮の大なるや、更お加ふべき物ある事あけん。又大和歌と、彼水土お隨ふ秀靈の、性情より出る自然の音調おして、さると開闢の始めより、千早振神もよんさび、遠く人の世お廣おりてい、遂お我磯城嶋の道とたへて、上下おもく諷ひ、神人おあしあへお樂しむの聲耳に滿り。樂の盛んあるや、是より上あるもの非じかし。何ぞ鐘鼓をしも樂といとん。玉帛をしも禮といとん。鐘鼓玉帛を俟て、始めて禮樂の典備れりせ。却て其實耗しき故お、是を虚器お假る物也。されば彼國を觀るお、さるべき理りを記し備へらん太古の志らば、其謂ゆる禮樂の實なるもの、全く行はれざる世の、をさく見及び侍らぬをや。さるをかきたの教をのミ尊とび羨びて、言舉せぬ我浦安の大御國俗を、あうを足らぬお思へるの惑へるの甚しき者也。

或人問ふ、詩の其も空志を言ふもの也といへども、又性情より出づともいへらんや。其性情より出らんものい、謠ふたいちお神人を感動すべきおと、又何ぞ大和歌お異ならん。歌も慮りおこるもの有りて、さるの忽ち感を失ふお至るを、其理り同機おらばやといへり。己いとく、其理然るお似て然らば。咏ひ舉ぐるを恥とちお、神人を感ぜしむる事い、獨りお大和歌の自然の妙用おして、外國人の溷濁不正の音調おあるべきおらば。其溷濁あるものい、撰びて後お是を咏歌し、是を節奏して、始て神人感ぜるお至るべきもの也。山溪の水瀨と其まゝ采て神お薦むべく、澤畔の根芹と淨めて後お祭るべし。ひとしく自然お生るといへども、其清濁淨穢の水土お隨ひて、鬼神おに享くと享ざるのけぢめ、分るゝが如きを推て知るべし。或人諸蕃の不正朦朧の聲を論ぜし中に、月お名なる蜀魂、花お木傳ふ黃鳥の、清亮和諧の聲い、人お取聞く事を希ひ、深林お叫ぶ泉、市肆お騒ぐ鴉の如き、不祥敖々の聲おと、誰うの耳をそむけざらんといへり。此譬へ甚しといへども、和漢清濁の音調分れて、神人一と感じ一の感ぜざるの、差めを知るお足まりといふべし。又問ふ、然らば大和人の作れる詩と、反て其調清爽おらんお、かの大和歌おひとしく、神人忽ち感ぜべきものう。己れいとく猶然らば。もとより唐歌と唐歌おして、かきたの音韵の上おおき、其聴くべきの調おあんめれ。いとゆる訓讀おして、詩の詩なるをがたおらんやい。されど我大和言の訓お移して後、其義明らからんお、其訓お移さる事おはせ。また我大和歌の調を假て後、僅お其感通おべきお、其調を假るべうらば。